紅糸清澄

茶蕎麦

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

赤い糸は誰と繋がっている？

須賀京太郎を中心とした、清澄麻雀部の恋愛話です。再構成をしたために、原作と異なる部分が多々あるかもしれません。

麻雀ならまずサイコロかなと、ダイスを転がしたその数字を各々の最初の好感度として考えて投じてみたら、想定外の結果になってしまいましたが、それを元に書いています。

この作品はｐｉｘｉｖにも投稿しています。

自分で挿絵描いてみました。

目次

第一章　紡錘
第一話　染まり始め　1
第二話　オカルトではなくて　10
第三話　逆境の果てを待つ　21
第四話　開花予想　32
第五話　そして糸は撚られる　43
第二章　混織
第六話　危機感　55
第七話　勝つよ　68
第八話　お姉ちゃんだから　79
第九話　たべる　92
第十話　月が綺麗です　108
第三章　浸染
第十一話　私より弱ければ　127
第十二話　私の方が　138
第十三話　可愛い　149
第十四話　負かします　162
第十五話　勝っちゃうのよね　176
間章　水元
第十六話　間違える　187
終章　紅糸清澄
第十七話　理屈じゃない　198
最終話　左手と右手　207
番外　異織

第一章　紡錘

第一話　染まり始め

「ん？　こりゃあ夕立か……」

室内にてカンカン照りの陽光を冷房の涼しさにて忘れていても、空が盛る夏であることを思い出させようとしているかのように、外では大粒の雨が落ちた。

暗い空模様を窓から覗きながら、染谷まこは自動麻雀卓が奏でるジャラジャラという音色に負けず劣らず大きく響く、ざあざあといった雨音とゴロゴロと鳴る雷の響きを耳に入れて、溜息を吐く。

「ふぅ。今日も一日手伝いで終わりそうじゃの……しっかし、小遣い貰えるからいいんじゃが、この服装には未だ慣れんのう」

独りごち、白黒な衣服の、殊更白布を特徴的に彩るフリルをまこは引っ張る。そして、肩まで伸びた癖っ毛の上に乗っかったホワイトブリムを彼女は確認してから、表情を微妙なものにした。

そう、現在のまこの装いは正しくメイドさん。それも、趣味としてではなく、今までここで制服としてメイド服を着込んで接客していた。ならば、彼女が働くこの場はメイド喫茶かと普通は思うだろう。

しかし、それは違う。間近で使われ音を立てていた一つだけでなく、スペース余すことなく幾多も置かれているのは、自動麻雀卓の数々。その半分以上は定員を迎えていて、大いに使用されていた。

まこがぼうっとしている間も、他のバイト達はまこのものよりもミニスカートで装飾過多なメイド服を着込み、接客をしていたり、面子の足りない卓で客と打っていたりしている。明らかに、ここは喫茶店ではない。

それもそのはず、この店の名前は麻雀、ｒｏｏｆ－ｔｏｐ。そう、彼女の実家が営んでいるこの店は、メイド雀荘だったのだ。

もっとも、ｒｏｏｆ－ｔｏｐも元は普通の雀荘であった。だが、ネット対戦麻雀が流行っている今、そこに来なければ得られない価値を、ということで客を取るため試しに従業員にメイド服を着させたと

ころ、大はやりになって。
　そのため、スタッフはメイド服か執事服を着込むことに。それは、経営者の娘であるまこであっても同じだった。
　ただ手伝いをしていただけの頃は、まこも無理に着せられることもなかったのだが、高校に入学して以降給金を出してもらえるようになってからは、流石に制服を拒否することは出来ず。
　だから仕方なく、まこはこうして着ているのだが、どうにも慣れより照れが勝り、時折気恥ずかしくなるのだった。着慣れた暁には、なんと彼女はメイド服集めが趣味になるほど傾倒していくのだが、今はそんな気配は微塵もなく。
　そうして、頬を僅かに赤くしている少女を微笑ましそうに見つめている常連さん達の存在を知らずに、まこが丁度手隙になったレジ打ちに入った時、雨音をかき分けるようにして入店ベルが鳴った。
「いらっしゃい」
「うわー、濡れた濡れた……あの、すいません。ちょっと雨宿りさせて貰っていいですか？」
「って……なーんじゃ、客じゃないんか。まあいけんとは言えんの。雨があがるまでは居てもええよ」
「助かります……ってメイドさん？」
　そして、来店してきたのは、制服を着た金髪の青年だった。話しながら見上げ、まこは混乱している様子の彼をメガネのレンズ越しに確認する。
　実際床を濡らす程に湿潤しているが、水も滴る何とやら、という程ではなくとも彼は中々に整った顔立ちをしている。少し軽そうな印象も受けるが、それを含めてモテそうな青年だな、とまこは思った。
　また中々の長身ではあったが、よく見たところその制服が近くの中学のものであると思い出し、彼が最低でも高校一年生のまこよりも年下であるという事実に、彼女は少し驚く。
　しかし、どうもまこ以上に彼は驚きを覚えたらしく、メイド服に目をむいてから直ぐ周囲へと視線を彷徨わせ、そして口を開いた。
「あの……ここ、ひょっとして雀荘ですか？」

「看板は……ああ、雨に追われて見る暇がなかったんか。まあ、その通りじゃよ」
「初めて入りましたよ。……あの、こういう所って十八才未満は入店禁止とか、あったりします？　俺、出ていかなくちゃダメですかね？」
　急に慌て始める青年。雨宿りの一時入店とはいえ、法に背いたことはしたくないのだろう。
　見た目の軽薄さと異なり、彼は随分と真面目な性格のようだ。青年の初心さに、まこはくすりと笑った。
「平気、平気。それこそ、わしの生まれる前に麻雀はビリヤードと同じで風俗営業から外されちょるんじゃ。うちのようなノーレート雀荘に年齢制限があったっちゅうのはずっと昔のことじゃよ」
「そうなんですか……ノーレートって、多分お金を賭けないっていうことですよね？　こんな感じなのか……いや俺、友達から聞いて、麻雀に賭け事の、なんか危ないイメージが付いていて……一度も手出したことないんですよね」
「ほう。そりゃあ珍しいのぉ……」
　常連さん達が横目で伺う静かな注目も知らずに、青年は明るく和やかに行われている麻雀を、見回して認識していくことで驚きを感じているようだ。
　物心ついた頃からここｒｏｏｆ―ｔｏｐを遊び場にしていたまこに、それはよく分からない感覚である。そして、世間的にも実際に麻雀を危ないものと思っている人は少数派であるだろう。
　世界中で麻雀競技人口がついに一億人を突破したと話題になったのもまこの記憶に新しい。テレビでプロのリーグ戦の報道が流れたり、アイドル雀士に牌のおねえさん等の活躍もあったりして、賭け事として麻雀を捉える見方は殆どなくなっている筈だった。
　それに、自分が通っている清澄高校でもあるまいし、彼の通う中学で麻雀部が開店休業状態というのはあり得ないだろう。校内で打牌の音を一度も聞かなかった筈もない。部活説明会も見たろうに、和気藹々とした麻雀を想像することすら出来なかったのは不思議だ。
　ともするとその友達とやらの話が偏見を持ってしまうほどに印象

的だったのか、とまこはそう考えた。そして、彼女が彼のそんなイメージを変えてみたいと思ったのは、雀荘の娘であったから、なのだろうか。

気付いたら、まこは青年に口を開いていた。

「良かったら、ちいと触れてみんか？　一ゲーム分はお代をサービスしちゃるけぇ、どうじゃ？」

「ええと……いいんですか？」

「雨もしばらくあがりそうにないし、どうせ待つならたちんぼで暇を持て余すより座って遊んだ方がええじゃろ。それに、雀荘に来て打たないというのも勿体無いと思うんじゃが」

「でも、俺、ルール分かりませんよ？」

「大丈夫じゃ。わしが後ろで教えてやるけぇ、麻雀の楽しさにちいとでも触れて行きんさい」

「はぁ……そこまで言うのなら、分かりました」

「よし、ほいじゃあバイトやお客さん達に話をつけてくるけぇ、ちいとそこで待ちんさいな」

卓の内でも外でも発揮されるその目敏さで、青年のその気のなさを感じながらも、笑顔でまこは彼に対して余計かもしれない世話を焼く。

まこは所属している高校、清澄で何度か友人を麻雀部に招き入れ、そして同好の士を増やそうと試みたことがあるが、しかし入部するに至るまでの情熱を育むことには失敗している。

それでもまこは、初心者達が、意外と面白いねと言ってくれたり、笑顔になってくれたりした時に、都度大きな喜びを感じていた。

麻雀はもはや、まこの一部。だから、麻雀を好きになってもらうために青年をお客候補としてやり方の教授をすることを、彼女はためらわない。

「麻雀、か……」

一人残された青年はどこか物憂げに呟き。そして、生まれて初めて、彼、須賀京太郎は卓に着く。

「須賀君、それじゃあ、いいかの。ここまで来たら、わしが教えた通りにして、後は好きに切ってええ。後ろに控えとるけぇ、分からなかったら、その度にわしが教えちゃる」
「はい。分かりました、ええと……真似して、あそこから引いてくれば良いんですよね」
「そうじゃ。ああ、牌を揃えるのは別に後でもええよ?」
北家に座り十三枚の牌を並べ、苦心して理牌をする京太郎。質問に答えながら、彼の配牌を覗き込んで、まこは表情は変えずに、少々の落胆を覚えた。
シャンテン数が極端に少なかったり、役満の影が見えていたりする、という訳もなく。あがりまでの距離はまずまずで、上手く育てていけば伸びなくもない、といった可もなく不可もない、そんな手牌だったのだ。
「待たせるのもアレですし……そうですね。引いて、っと。うーん……とりあえずコレ捨てておきます」
そして、京太郎が引いてきた牌も良い所に入るようなことはない。どうも彼にビギナーズラックはなかったようだ。
京太郎は一瞬だけ捨て牌を見てから、二枚出ているオタ風を迷わず捨てた。それは、未だ役をリーチ以外上手く覚えられずとも、まこが面子は雀頭以外、順子か刻子、三枚ずつ揃えるのが基本と伝えたその教えを忠実に守った故の選択だろう。
「ほう」
そしてそれは、一度だけまこが口にした、場を見ることが麻雀では大事、という言葉に則った動きでもあった。
一杯一杯の中でも、考えることは忘れていない、その様子。何と言うこともない筈の京太郎の一打に、まこは多少のセンスを感じた。
その後も、京太郎は理解できる情報少なくとも、河を見て確率を考えることを忘れず慎重に打っていく。頓珍漢な打牌はあれども、教えは確りと遵守している辺りにまこは彼の真面目さを感じる。
何となく、まこはその後姿に大型の忠犬を重ねた。

「リーチ」
「うおっ」
　しかし、初心者であるからには、処理できる情報にも限度というものがある。京太郎は八巡目に親のリーチ宣言を聞いて驚き、背を縮こまらせた。
　京太郎のそんな姿を見てこれ見よがしに悪どく笑う常連さんに苦笑いして、助けを求めてくるだろう彼のためにまこは当たり牌を考える。曲がったのは三索であり、捨て牌から見てもドラ筋でもある四索・七索辺りが怪しいが決定的ではない。
　何より、初心者の麻雀に嬉々として付き合ってくれた常連さんのことだ。茶目っ気を出して悪待ちでもしている可能性もある。河に転がっているヤオチュウ牌の多さを信用し過ぎるのも危険かもしれない。
　京太郎の下手な打ち方もあって、これは過去の経験もあまり参考にならないな、一旦現物を切らせようか、と思いながら助けを呼ぶ声を待っていると。
「……よし、これだ！」
　何と、京太郎は少し逡巡したかと思うと、まこを一瞥もせず、そのまま牌に手をかけて河に投じたのだった。彼が切ったのは七索。
　まこが呆気に取られていると、親が声を上げ、そして牌を倒す音がした。
「ロン！　リーチ、一発、ピンフ、タンヤオ、イーペーコー……裏ドラはなし。満貫、一万二千点だね」
「……はい。えっと、染谷さん。これが一万点棒で良かったですっけ？」
「あ、ああ……そうじゃ」
　我に返ったまこは慌てて返事を返す。しかし、点棒のやり取りをしている京太郎と常連さんの姿が、彼女にはどうしてだか遠くに見えた。
　確かに好きに切れとは言ったが、意味を教わったばかりのリーチ後の一打に彼は不安を覚えなかったのだろうか。普通の初心者なら、耐

えられずに経験者を頼るはずなのに。また、一見悔しそうだが、どうにも落胆が少ないようにも思えた。
不可解に思い、それでもまこは気を取り直して、次こそ色々と訊いてくるだろう京太郎の後ろ姿を見つめ直す。だが、その後半荘の中で彼が後ろを振り返り、牌の切り方について尋ねるようなことは、一度もなかった。

余程疲れたのだろう。一ゲーム付き合ってくれた客らに挨拶を終え、気に入られたようで彼らに声をかけられたり肩を叩かれたりしながら三々五々別れた後も、京太郎はそのままだらしなく椅子に寄りかかっていた。
悩み掻き毟ったことで乱れた金髪を覗き込みながら、まこは後ろに控えたままに腕を組んでどこか憮然とした表情をする。
「いやー、手ひどくやられた……ゲームとはいえ借金をしたのは初めてですよ」
「予想通り、とゆぅたらそうじゃがのぉ……」
トぶ可能性の高い初心者の京太郎のためにもと、今回は箱下ありのルールを採用していた。案の定トんだ上に焼き鳥で終わった彼のためにも、先に決めておいて良かったと、まこは思う。
だが、それで散々に借金しておきながらも、ろくに自分の指示を仰がなかった京太郎のことを、まこは不可解に感じていた。
勝つために終始必死に目を彷徨わせていたというのに、最善の勝利への道である経験者の助言を殆ど断っていたというのがまこにはよく分からない。余程、自力で和了りたかったのだろうか。
それが与えられたものでも、一度でも和了ってその喜びを感じて欲しかった、というのが彼女の偽らざる本音である。
「初心者、とはいえ悔しいですね」
「まあ、それは見ていてよぉ分かっとったよ」
和了れないことに実に悔しそうにしていて、和了られ続けて、でも腐らず最後まで続けた。中々にタフな精神である。

或いは、届かなくてもひたすら勝ちを目指すその最中に、麻雀の楽しさを見つけてくれていたのか。それなら、半ば無理矢理に卓に着かせた甲斐もあるというものだとまこは思う。
「それにしても、染谷さんには申し訳ありませんね。ヘボな麻雀を後ろで見ているだけじゃ、ちっとも面白くなかったでしょう？」
「そんなことはなかったが……まあ、助言したくなるこの口を黙らすのには難儀したけぇ、何時もと違って気苦労があったのは確かじゃな」
「はは、すみません。でも、どうせやるなら、負けて元々。一度あいつの代わりにも思いっきり自由に麻雀をやってみたかったんです。勝つために、教わったことには気を付けましたが……いや、最後まで諦めなかったけれど、全然勝てなかったなぁ」
「……そうじゃったんか」
あいつの代わりに、その言葉を京太郎が口にした時の表情は、まこが一度たりとて見たことのない種類であって。まるで、何か強い想いが透けて見えてくるようなものだった。
遠くを望むその横顔、彼の未だ幼さを残す容貌に凛々しさが重なって見えて。年下とは思えない大人びた顔をした京太郎の横顔を見つめることで、一つまこの胸の中で鼓動が高く鳴った。
あれ、と思う間もなく彼女の知らない感情が、滲み出る。痛いぐらいに鳴る胸元に、その想いは染みた。やがて一杯になった胸から押し出されたのか、今まで後回しにしていた質問が彼女の口から転がり出ていく。
「どうじゃ……麻雀、やってみて良かったかのう？」
「勿論。――麻雀って楽しいですね！」
問いかけに答えるために椅子ごと振り返り、笑顔で京太郎は言い切った。自然、二人は向き合う形となる。麻雀で対面する場合よりも、ずっと近く。
それに慌てるほどまこには男子に免疫がない、なんていうことはない。しかし、京太郎の間近で大きく綻んだその表情に、硬かった先までとのギャップを感じて、彼女は思わず頬を赤くした。

本当に、楽しかったのだろう。こうして見てみれば、僅かに覚えていた軽薄な印象など欠片も感じ取れず。思わず脳裏に浮かんだ可愛らしい、という感想を、まこは頭を振ってから、話題を変えることで無理やり消す。

「そ、そうか……なあ、須賀君は清澄志望じゃろ？」

「ええと……そうです。どうして分かったんですか？」

「だって、今日は清澄高校の学校説明会の日じゃろ。夏休みのそんな日に、高校近くの雀荘に制服着て入ってくる中学生なんて、説明会帰りとしか思えんよ」

「そういや、そうですね。俺、清澄が第一志望なんですよ。ひょっとして、染谷さんは清澄高校の……」

「一年生じゃよ。……良かったら説明会だけじゃなくて、秋の文化祭の時も清澄に顔を出してくれると嬉しいのぉ。わしは麻雀部じゃけぇ、部員の数が少なくてちぃと面子が足りんけれども、その時はきっと麻雀の楽しさをもっと教えてあげられるじゃろう」

「分かりました。それは楽しみですねー。是非とも行かせて貰います！」

また笑んで、元気よく京太郎は約束した。とても社交辞令とは思えないそれに、しかしまこはまだ不安を覚えてしまう。

もう、雨はあがっている。ゲームは終わっているし、それにそろそろ中学生は家に帰るべき時間になっていた。だから、ここで別れるのが当然の流れなのだろう。そして、口約束など時間とともに忘れてしまうのが当たり前のことで。

でも、まこは京太郎と二度と会えないというのは何故か、どうしても嫌だった。一度高鳴った心臓の鼓動は何時迄も収まりそうになくて。

「……絶対じゃよ？」

右手で癖っ毛を弄りながら顔を朱く染めて、目を合わせることも出来ないままに、まこは念押しをした。

第二話　オカルトではなくて

一目惚れ、というものを原村和は全く信じていなかった。いや、それどころか彼女は恋ですら自分がするものではないと、考えていたのだ。

お嫁さんというものに対する憧れはある。しかし父親、親類にこそ情を感じていても、和にとって世の男性というものは今のところ押し並べて大差ないものと感じていた。嫌に女性的に成長しすぎる自分の肢体を粘っこく見つめる彼らを同じ人とは思えない。

猿と結婚する人はないだろう。和は素晴らしい何かと結ばれることを望んではいるが、それが見知った醜い男という生き物では到底ないとも思っていたのである。

もっとも、だからといって、女性を好きになるようなこともなく。和は興味の湧かない異性から目を背けながら、彼らを想う分の時間を趣味の麻雀に費やしてきていたのだった。

「大丈夫ですか？」

「は、はい……」

そう、一目惚れとは、和の中ではオカルトに類するものである。否定するべき、ものであったのだ。

彼を見て胸がドキドキと鳴るのは、窮地を脱して直ぐのことだから。間近に見える容姿の全てが愛おしく思えてしまうのも、吊り橋効果によるもので。

倒れ込まぬようにと腹に巻かれた彼の手を、離れないよう強く握ってしまったのも、急の事態で混乱してしまっていたからだと和は思いたかった。

しかし、自分に嘘を吐くことなどそうは出来ない。春休みの人通りの多い歩道で二人はしばし動けずに。どうしてだか和には、開花にはまだ早く一分も咲いていない彼の後ろの桜が、満開に見えた。

原村和は、片岡優希と友人関係にある。いや、一緒に中学生活を過ごしてから、高校も時間を共にしたいと二人同じ清澄高校を受験した程であるから、彼女らの関係の名前は本来親友というべきなのかもしれない。

受験戦争に勝利し、卒業式で涙のお別れをしてから迎えた春休み。仲良し二人組みは、入学前のその空いた時間を一緒に過ごそうと考えたようだ。どちらともなく、連絡を取りあって、丁度いい日取りと時間を決めた。

共に、麻雀に青春を費やしていても、二人は女の子。洋服に小物類、お洒落するために欲しいものは沢山ある。今日は、土地勘を養う為にも二人は清澄高校の近くで店を開拓してショッピングをするつもりだった。

「それにしてもゆーきったら、遅いですね……」

しかし相方が訪れる事は中々なく、暇から和はついつい独り言をしてしまう。遅刻の連絡は既にあった。けれども、具体的な時間がそこに書かれていなかったために、和は困る。

約束した十一時、今から二十分前にメッセージアプリに投稿されたのは『ごめんのどちゃん。ちょっと遅れちゃうけど、待っていて欲しいじょ』というもので、五分前に送られたのは『もう少しだじぇ』という短いもの。

これでは何時来るのだか分かったものではない。

あの小さな友人は、大好きなタコスが出ている店でも見つけて寄り道をしてしまったのだろうか、或いは好きな小動物でも見つけてそれと戯れて遅くなったのか、等と想像して、和はため息を吐く。

「こんな所に一人でいると、目立ってしまいます……慣れているとはいえ、視線が集まるのは気持ちいいものではありませんね」

和が居るのは近くに市営の公園があるデパートの前。入り口から少し脇に避けているとはいえ、それでも三十分以上立って待っている少女の姿はよく目立った。それが、そこいらのアイドルなど裸足で逃げ出すほど可愛らしいとあれば、尚更のこと。

殊更男性の視線を多く受けることを、和は嫌がる。何せ、それは、以

前行われた麻雀のインターミドルの大会で受けたのよりも少ないものとはいえ、彼女にとって決して嬉しいことではないのだから。
　因みに、幾ばくかの異性の目線は、容姿ではなく和の称号でもあるインターミドル優勝者、つまりは有名人を見るものであったのだが、それに彼女が気付くことはない。麻雀が得意とはいえ、彼女は他人の観察が得手、という訳でもないのだ。
　和の心象を映しているかのように空は薄曇りで、頬を撫でる風は温く弱々しい。過ごしやすい天候、といえばそうであるが折角の春の日。色取り戻し始めた草木を鮮やかにさせる日光が恋しくも思う。
　そんな陽よりも輝き、周りの喧騒よりも尚うるさい、そのような存在を好き好んで和は待ち続けている。多数に見られるのは嫌でも、そのために立ち続けるのは苦ではない。彼女の中で、片岡優希とはそれ程に特別なのだから。
　だから、だろうか。昼時の往来の中でも、その小さな姿は簡単に見つけられた。対面の歩道にて、息を切らしながら走る優希を望んで、和は思わず笑顔になった。
「おーい、のどちゃん。今来たじぇ！」
　元気な声が、届く。赤信号の下、足踏みをしながら待つ彼女は、ひと月も経たずに高校生になるという事実が信じられないくらいに、あどけない。
　信号が青色に切り替わった途端に、横断歩道を優希は駆け始めた。恐らく、勢いのまま和の胸に飛び込もうという算段なのだろう。
　触れ合うことがまんざらでもない和は早く受け止めるためにも、優希の元へと歩み出す。
「のどちゃーん！」
「ゆーき。そんなに走ったら危ないですよ……あっ」
　優希の姿に気を取られて、注意をしておきながら、和は足元を疎かにした。それは、前しか見ていなかったからか、はたまた成長著しい、彼女の胸元が重すぎてバランスを崩したのか。
　理由は和にしか解らない。どちらにせよ、結果は同じ。足を遅らせた身体は、前へと倒れていく。

和は急の転倒に対応しきれなかった。手は痺れたかのように動かず、体の前に出ない。これでは顔か、胴体から落ちてしまうだろう。予想できる痛みを恐れ、和は瞳を閉じる。
と、その一瞬に、眩い光が認められたような気がした。
「っと」
和が身体を強張らせたまま何時まで経っても、痛みは訪れない。目を閉じながら感じたのは、倒れ込む身体を支えるように回された腕のようなものによる圧迫。
助けてもらったのだと、和は知った。感謝を伝えるためにもと、恐る恐る彼女は目を開ける。
「大丈夫ですか？」
そこで、和は雲間から降り注ぐ光に金毛輝かす、京太郎の姿を見たのだった。何かを堪えるように目を細めて整った顔を真剣にしている、そんな彼を認めて、彼女の心臓は勝手に大きく鳴り出していく。
決してオカルトなどではなく、胸元に確かに根付いたそれ。それこそが、和の初恋の始まりだった。

場所は移って、デパート一階の喫茶店の中。京太郎と和と優希は同じテーブルを囲っていた。
人助けした方とされた方、そして見るからに互いが同年代ということで気安い雰囲気が流れる中で、まずは優希が京太郎に頭を下げる。
「お前、のどちゃんをよく助けてくれたな。私からも礼を言うじぇ」
「礼は受け取るけどさ……俺はお前じゃないぞ、小さいの。俺には須賀京太郎っていう名前があるんだ」
「むっ、私にも小さいのじゃなくて片岡優希っていう名前がちゃんとあるじぇ。よく覚えておくんだな、京太郎」
「分かったよ、片岡」
「優希でいいじょ」
「そうか……ところで何処かで買い食いでもしてきたのか？　口元にお弁当付いているぞ、優希」

「なぬい！」
口元を拭う、優希。女の子であるからには、見目に気を使うのは当然であるが、美味しいものを食べたことで彼女は気を抜いていたのだろう。
焦り、タコスのソースがポツリと付いた右頬を知らず、優希は綺麗な反対側を手の甲でゴシゴシと擦った。
「逆だ、逆。ほら、コレ使え」
「ほう、中々に気が利く奴だじぇ」
見かねた京太郎は、バッグからポケットティッシュを一枚取り出し、優希に渡す。
躊躇わず、優希はそれで顔を拭う。どうにも二人の距離は、近い。初対面にしては嫌に気安いようである。
しかし、そんなことにも気づかず、ぽうっとした表情のままに頬を上気させ、和は京太郎と優希を眺めていた。蚊帳の外のまま、胸にて沸き起こる熱を大事に味わっていたようだ。
そんな傍観姿勢も、優希の次の言葉で崩れてしまうのだが。
「それにしてものどちゃんったら、何時まで京太郎の腕を掴んでるんだじぇ？」
「あっ！　す、すみません。ずっと、動転したままで……」
「いや、俺としたら役得って感じだったからいいんだけれどな。ええと、聞いていたと思うけれど、俺は須賀京太郎。君の名前も聞いていいか？」
「わ、私は原村和といいます……」
「原村さんか」
「和です」
「えっと……和、さん？」
「和でお願いします」
「わ、分かった……和」
「はい」
笑顔で半ば強引に、和は名前呼びを強制させた。京太郎はどこか真剣に向けられた彼女の視線から目を逸らす。

見た目も中身も子供な優希には同性と変わらぬ対応が出来たが、一部分など特に同級生らしからぬ程育った正に美少女な見た目の和にまで気安くすることは中々出来なかった。
積極的に距離を詰めてくる和から、照れる京太郎はしかしどうにも離れ難く、そんな近くで応答し合う二人組は対面の席から見たらいちゃついているようにしか見えない。
「テンプレな乙女言動だじぇ……京太郎も満更ではなさそうだし……なんてことだ」
思わず、優希は呟いた。親友が、男にこうまで近寄っている姿を見るのは初めてで、愕然とした心持ちになる。
今日出会った二人が恋仲になる。創作などではよくある話であるが、友人と初対面の男との間でそれが目の前にて起きたとしたら、堪ったものではない。
思わず、優希は自分の友人を取られまいと身を乗り出して騒ぎ出した。
「麻雀一筋の、のどちゃんに春が来た感じだじぇ……むうっ、京太郎、私の嫁は渡さんじょ！」
「ゆーき、変なことを言わないで下さい。私は一度も貴女のものになったことはありませんよ」
「酷いじぇのどちゃん。これは、浮気だじぇ……」
「浮気って……そもそも俺と和は初対面だぞ。和も、ただ恩を感じてアクティブになってみただけだろ？」
「うふふ……そう、かもしれませんね？」
意味深に笑う、和。普段の彼女を知らない京太郎は異性にも積極的な少女と勘違いしていたが、どうもそれは違うようで。
向けられた和の瞳に京太郎は思わぬ熱を覚えて困惑する。それに応じれば、何らかの展開があるのかもしれないが、流石に不安があった。いたずらに恥ずかしくなった彼には、話題を変えることしか出来ない。
「そ、それにしても清澄入学を控えた同士で、こんなことになるとは思わなかったなー。いや、奇遇だ」

「あれ、確か、私達が清澄に入るってまだ言っていない筈だじぇ。どうして知ってるんだ。ひょっとして、京太郎って私達のストーカーか何かか？」
「人聞きの悪い……合格発表の時に優希が大騒ぎしていたのを見て、覚えていただけだって！」
「あー、あの時に京太郎もいたのかー。でも、私は京太郎を見た覚えがないじぇ。でっかくて目立ちそうなのに」
「お前が気付かなかったのは、俺がその時同級生の面倒見ていて、ちょっと離れていたからだろうな。あいつは騒がしいのが苦手だったから、うるさいのが居なくなって人が捌けてから一緒に結果を確認したんだ」
「その友達は受かってたのかー？」
「普段の成績は俺よりもいい奴だったからな、当然のように受かってたよ。まあ、ちょっとおっちょこちょいな所があるから本人はケアレスミスでの不合格ってのを恐れて必要以上に緊張してたけれどな」
「ふぅん」
優希は、目の前の男が友人とやらのことを話すのに、妙に楽しそうな表情をしていることに気付く。先ほどから喜怒哀楽が表れやすいタイプだと思っていたが、それにしても分かり易い。
京太郎はその抜けたところのある友達を余程気に入っているのだろう。ただの友人というカテゴリーでは凡そ狭過ぎるくらいに。
興味の薄い優希でもそれが分かったのだ。隣でじっと見つめていた和には、それこそ敏に感じ取る事ができた。
「あの……そのお友達って、女の子、ですか？」
「ああ、そうだけれど……」
「なるほど」
「うん？」
京太郎は一人納得している和に対して、首を傾げた。どうやら彼女の考えが分からない様子である。そんな彼を見て、優希は呆れた。
どう見ても、和はその友人とやらをライバル視し始めている。一段、温度を上げた彼女の視線がそれをよく教えてくれた。友人がじり

と、更に京太郎との距離を詰めて自身をアピールする姿が、どうにも面映い。
しかし、これほどあからさまな好意に気付く様子がない辺り、極度に鈍い男なのだろうか。或いは敢えて無視している、という可能性も無きにしも非ず。どちらが正しいのか、優希には分からない。どうなのだろうと、思わず彼女は京太郎を観察する。
優希がただ見ただけで京太郎のその内まで察する事はなかったが、果たして、答えは後者だった。
京太郎も、一目惚れをされたということだけは何となく理解している。しかし、それを今受け取る気はない。
相手は自分好みの美少女。現在も京太郎は和のその豊かな胸元から目を逸らすのに必死である。
何しろ、和が転ぶ前に助けられたのも、その大きな胸の揺れに夢中になっていたがために、倒れ落ちる前に咄嗟に手を出すことが出来たからだった。
そんないやらしい自分を知らない和の一時の夢を利用していちゃいちゃしたいと、ここ最近彼女というものから縁遠くなっている京太郎も思わないでもない。
だが、それに頭の中で待ったをかける存在があった。目を閉じれば、熱心に本を読んでいる彼女の横顔が思い出せる。ドジで放っておけない幼馴染の姿が、どうしても京太郎には忘れられないのだ。
「友達って言ってるけど、本当は恋人同士だったりするんじゃないかー？」
「ああ、よく付き合っているのか、とか聞かれるけれど俺と咲……友人の名前なんだけれど、まあ、そいつとはただの腐れ縁だぞ」
「えー？」
しかし、それを認めずに京太郎は今日も自分に嘘を吐く。もっとも、それを皆が本気にする訳もない。優希は胡散臭そうに表情を変えた。
だが、和は頷いてそれを認める。そうしなければ、何も始まらないから、という部分もあるのだろうが。

「そうなのでしょうね……今のところは」
京太郎の気持ちを占めている少女の影。それを和は正しく理解していた。何もなければあり得るだろう未来の展開を予測し、つい出てしまった言葉を小声で濁す。
「何か、最後に言ったか？」
「ふふ。いいえ、何でもありません」
大好きな人には、自分の一番綺麗な姿を見て欲しい。だから、笑顔の下に恋敵への警戒心を隠して、和は一番上等な笑顔を作る。それが今、一番正しい選択だと信じて。

「それじゃあな、二人とも。掘り出し物見つけられるといいな。帰り……特に和は、気をつけろよ」
「ええ。ありがとうございます。気を付けますね」
「それじゃあな、京太郎ー」
和に優希は手を振って京太郎と別れた。方や小さく、方やブンブンと鳴るほど大きく振った手は、京太郎の姿が人混みに消えるまで続けられていく。
京太郎の帰宅を見送る二人は共に笑顔だった。そして、互いに大小あれども、どうにも惜しむような気持ちが湧いている。この頃になると、和のみならず、優希も京太郎のことを気に入っていたのだ。
喫茶店での一時間。最初は、初対面の男女らということもあって会話が次々と浮かんでくるということはなかった。何故か、和が京太郎の幼馴染の話を突っ込んで聞いていたが、そればかり。対話は次第に滞るようになっていく。
しかし、探り探りに話をしていく中で、三人に共通の趣味が見つかった。それは麻雀である。和のインターミドル個人戦優勝という目玉の題目。そして、更に高校入学したら皆麻雀部に入ることを望んでいることを知って、三人は一気に親近感を覚えたのだ。
まだまだ知らないことだらけの京太郎の質問を中心とした麻雀の話題でその場は盛り上がり、そのまま勢いでアドレス交換をしてから

は、最早三人は友人といってもいいくらいに気安い間柄になっていた。
　和にとってはまだまだ足りていないのだろうが、それでも一日にしてここまで仲を深められたのは、人との距離を計るのが巧い京太郎に、人懐っこい優希であっても珍しいことであって。
　ましてや人当たりが良いとはいえない和にとっては殆ど初めての経験であり、彼女が相性の良さを感じて自分の胸の中の熱が間違いでないと確信するに至るのも無理のないことだった。
　既に空は晴れている。丁度隙間の時間なのだろう、人気の減った通りに暑いくらいに陽光は降り注いで、辺りを輝かせていた。色鮮やかになった世界。和にはその全てが変化した自分を祝福しているように思えてならない。
　和は思わず腕を開いて、天と胸の奥深くから来たる熱を歓迎していた。つい、そんな彼女に優希は見入ってしまう。
「ゆーき。恋って、オカルトではなかったのですね」
「のどちゃん……やっぱりそうなのか」
「私は京太郎君が好きです。多分、これからもずっと」
「……そっか」
　果たして恋は人を美しくみせるのだろうか。もしそうだとしたら、ただでさえ綺麗であった和の美しさは天上にまで届いてしまうかもしれない。
　そして、目の前の存在を天使と錯覚させるような笑みが、優希の前で綻んだ。彼女はその背中に淡黄に光る羽根を幻視までし、ここまで和を変えた感情を、とうとう認めた。
　和は、確かに恋しているのだ、と。大切な友人は以前とは違う様子だけれども、仏頂面の普段よりも今の微笑みの方がよっぽどいいだろう。一度も経験したことがなかったけれども、もしかしたらそれは素晴らしいものなのかもしれない。
　そう、優希が一瞬恋に憧れを持った時、それを抑えるかのように声がかけられる。
「ゆーきは彼のこと、好きにならないで下さいね。親友同士で男の取

り合いなんて、冗談じゃないですし」
「……も、勿論だじぇ！　ほら、のどちゃん、一緒に服をさがそう！」
「ふふ」
直ぐに返事を返せなかったのはどうしてか。それは、想像もしなかったことだから。そういうことにしておいて、逃げ出すように優希は先行する。
意味深に笑み、そして優希の姿が遠くになってから、何を思ったのか表情を少し硬くして、和は独りごちた。
「それにしても、宮永咲、さんですか……」
饒舌に幼馴染のことを語る、京太郎の楽しそうな姿を思い出し、和は胸にチクリと刺さるものを感じた。語られた宮永咲という人物の殆どの姿は間抜けなものばかりであったが、しかし克明でもある。
余程互いの距離が近いのだろう。今からスタートを切ったところで、間に合わないかもしれないくらいに、和とは遠く差がついている。実際、自分のように心変わって一日後に彼らが付き合っていても、別に不思議ではないのだ。
しかし、それでも和は諦めない。最善手を続けていけば、何時かは届く。そう信じられた。奇しくも地道な努力を続けることに、彼女は慣れていたのだ。
「負けませんよ？」
和の宣言は、誰にも届かずに、雑踏に消えていく。

第三話　逆境の果てを待つ

竹井久という少女は、分の悪い賭けが好きである。それは、わざと自分を不利にしても、僅かな可能性の中から成功を手にすることの出来る自分を信頼しているからであった。

オカルト、とすら呼ばれることのあるその偏りを引き寄せる力。それは主に勝負事、特に大好きな麻雀においてよく活躍していたが、久はそれを日常に適用させてみることもある。

一人増えた高校二年を終えて最高学年を迎えた今まで、二人という念願の高校麻雀女子団体戦に出るには足りない部員数のまま。そんな麻雀部の人数を増やすためには、個人戦に出場したりして活躍し、活動の成果を示そうとするのが常道なのだろう。

だがそれを、久は止めた。そして、ほぼ無活動でもインターハイまで団体戦にて共に勝ちうる人材が自ずとやって来るという、あり得ないとすら思える都合のいい可能性一本に、不安の中彼女は賭けたのだ。

「なるほど、須賀君は約束通り入部、と」

「はい。後は知り合いの女子二人が入部するって言っています。竹井さ……いや部長、そうか、会長、とお呼びしたほうが良いですかね？」

「部長でいいわ。別に、これから一年同じ卓を囲むわけだし久、と呼び捨てにしてもいいけれど？」

「流石にそれは……」

「ふふ」

そして、そんな賭けの成就。その呼び水になると直感する人物が目の前で困惑している様を、久は楽しむ。

清澄高校麻雀部、記念すべき三人目の部員は、須賀京太郎一年生。入学式を終えて直ぐに旧校舎にある部室まで来てくれた彼が、共に団体戦に出ることが出来る女子でないことは少し不満であるが、久は内心大いに歓迎していた。

後に続く部員候補を報告すらしてくれるという良い幸先。それを

京太郎に見出すことで、久の機嫌はどんどんと良くなっている。
「そういえば、えっと、須賀君のお友達の確か高久田君だったかしら。あの子は入部しないの？」
「ああ……誠は、文化祭で一通り教わっただけで頭パンクさせて、今日も誘ったけれどちょっと俺には合わないって言って逃げちゃいました。アイツはたっぱがあるからって色んな運動部に勧誘されていたんで、そっちの方に行ったんじゃないかと」
「そう、それは残念ね……」
無念と、頭を押さえたポーズを取る久であったが、内心はその表ほどに残念がってはいなかった。
人に向き不向きがあるというのは自然なこと。短かった付き合いの中でも分かるくらいに頭脳労働が不得手でありそうな彼に麻雀は向いていなかった、ということなのだろう。苦手を無理にやらせようとまでは、思わない。
因みに、京太郎を筆頭に見た目はちょっと不良のような長身男子二人と久が時間を共にしたのは、文化祭の時。招いた責任を果たさんと気合を入れたまこが作った初心者用の教材によって行われた麻雀教室。二人しか集まらなかったその中で、まこと久を含めた四人はそれなり以上に仲を深めたのだった。
特に、京太郎とまこは著しく。
「今日は、まこさんは居ないんですか？」
「そうね。今日は家の手伝いがあるって言ってたわ。連絡、なかったの？」
「そういや携帯見てなかったです。ちょっと待って下さい……ああ、来てました」
スマートフォンを覗き込みながら笑顔になって、後で入学を祝ってくれるとも書いてあります、と伝える京太郎に、少しばかり久は面白くないと感じた。
部員同士仲がいいのは悪くはない。しかし、その中で明らかに片方が懸想している状況というのは、あまり良くはないだろう。男女関係で部活動に影響が出てしまうという可能性を、部長としては認められ

ない。
だが、まこの友人としての久は応援したいとも思っている。一人ぼっちを二人にしてくれた年下の友が幸せになるのを望まないことはありえない。
そして、個人としての久が京太郎に好印象を持っているのが、また困ったところだ。ただでさえ高身長に整った好みの顔の異性、とあれば、嫌いになるのは難しい。
またそれだけでなく、久は京太郎がとてもいい子であると知っている。そのため思わず抱きしめて可愛がりたくなるくらいの好意を、実は胸に秘めていた。だから、友に対する不義理であっても、ついつい彼女は彼を手に入れたいと思ってしまう。
「それにしても、貴方たちは仲良しねー。私の友達、取ったら嫌よ？」
「何か最近似たような言葉を聞いた覚えが……大丈夫ですよ。まこさんはしっかりしていますから、俺みたいな悪い男に引っかかることはないですって」
「悪い男？　あら、そういえば私達部室に二人きりね。ひょっとして、須賀君ったら私を食べちゃう気かしら？」
「そんな気はないですよ！　言葉の綾です！」
「うふふ……怖い怖い」
実は、既に久はこっそりと賭けている。そう、少し意地悪な先輩として、彼女は悪く待つ。

日が暮れ始め、清澄高校文化祭もその大体が終えた頃。新校舎の喧騒から少し離れた旧校舎の四階相当の部分。そこには事前に麻雀部と書かれた表札に気づかなければ、驚いてしまうくらいに広く過ごし易そうな部室にて、竹井久と染谷まこは話をしていた。
自ずと、話題は先程まで文化祭の出し物として共に麻雀をしていた人物らに集中する。特に久の興味を惹いたのが、まこ自ら来るように呼んだ男の子の方だった。
「あの金髪の彼が、ねぇ。確かに背格好に顔つきは良かったけれど、ま

こがそんなに夢中になるような子かしら？」
「夢中って、そがぁなことはないと思うんじゃが……」
「まこったら、最後に須賀君の連絡先を訊いてから顔真っ赤にして、直ぐに逃げちゃって。すっかり忘れられちゃった高久田君が可哀想だったわよ」
「あ、ありゃあ須賀君が恥ずかしいことを言ったからじゃって」
「これで何時でも麻雀のことを話せますね、っていうの、どこが恥ずかしい言葉なのかしら……」
「そりゃあ、まあ……ああ、そがぁなこたぁどうでもええ！　客に出して茶ぁ切れたことだし、買い出しにいかんといけん。わしが行ってくるけぇ、他に何かリクエストとかあるかの」
「ありがとう。そうね……今回板書するのにペン一本使い切っちゃったから、それも出来れば頼むわね」
「それじゃあ、売店を見てくるから、戻って来るまで待ちんさい」
「行ってらっしゃい……ふぅ」
逃げるように部室から出ていくまこを見送ってから、久は椅子の上にて背伸びをする。そして、雀卓の下で長めな足をピンと伸ばした。
全身に若干の疲れを感じる。文化祭において学生議会長――清澄では生徒会長に相当する――としての仕事はそれなりにあった。
会議など事前に終わらせられることはやっておいて、残りの雑務は副会長らに一任しているからこそ今はこうして休めているが、それでも就いて初体験の文化祭で気を張っていた今回、仕事は出来る方であると自認している久も少しばかりくたびれている。
麻雀講座の時にはこれほどの疲れは感じていなかったのだけれど、と思いながらも、それは一時的な高揚感によるものであるとも久には判っていた。
特別な日、とはいえ久方ぶりに部に麻雀目当ての人が訪れてくれたというのは部室で独りぼっちだった去年を考えると余計に嬉しいことだったのである。
「嫌ねぇ……ぼっちが長すぎた反動かしら？」
一人おどけてみるが、一度弾んだ心を誤魔化すことは出来なくて。

久は椅子から立ち上がり、舞い上がった自分を恥じ、照れくささを持て余す。疲労感で重かったはずの体は、先程までのテンションを思い出した心につられて軽く動かせた。
久としてはもう少し休んでいたかったが、立ってしまったからには仕方がない。今日教鞭を執るために色々と散らかした部室の片付けでもしようかと、彼女は辺りを見回す。
すると、久は自動麻雀卓の下、椅子の足元に何かが落ちていることに気付く。
「あら……これは、誰のかしら？」
屈んで、拾ったのは球技用だろうかカラフルな小さなボールの付いたストラップだった。
つい疑問が久の口をついて出たが、まこのものではなさそうだし、ましてや自分のものというのはありえない。昨日の放課後念入りに部室を掃除したこともあるし、ならば、今日唯一の来客者である二人のどちらかのものであると予想できた。
ストラップは永く付けられていたのだろう。その証拠に全体的に大分色あせていて、撚れた紐は千切れていた。久は大切なものである可能性も考えて、落とし物として連絡してあげたくなったが、しかし彼ら一方の連絡先を知っているまこは不在。
少し待たないと駄目かと、雀卓の上に置いてから片付けを続けようと思っていたその時に、ノックの音が聞こえた。
「どうぞ。誰かしら？」
「あのー。すみません。俺です。須賀京太郎ですが、ここにストラップが落ちていませんでしたか？」
「あら、丁度よかった。これでしょう？」
「それです！　良かったー。失くしたらどうしようかと思って焦っていたんですよ……うわ、紐、切れちまってる」
遠慮がちに部室に入ってからストラップを久より受け取って、その状態を確認した京太郎。彼は見つかった安堵と、直すためには繕わなければならない面倒を嫌がる素振りを共に表に出した。
矢張り、大事なものだったのだろう。しかし、どうして京太郎がそ

れを愛用しているのか、それが少し謎だった。久はストラップが最初贔屓のチームか何かのグッズかと考えたが、どうにもそれらしきロゴは見当たらない。

ならば、思い出の品、たとえば競技での結束を深めるためにチームメートと共に買った関連のもの、という可能性も考えられた。がっちりとした体躯に長身。京太郎が運動部であったと考えると、納得できるところがあった。

「須賀君ってひょっとして、バレーか何か分からないけれど、球技をする部活に入っていたの？」

「はい。俺はハンドボール部に入っていました」

「へぇ……そうなんだ。そういえばハンドボール部って、清澄には無いのよね。良かったらどういう活動をしていた、とか教えてくれる？」

「そうですね……」

語り始めばかりは流暢とはいかない。しかし、ハンドボールに関して、京太郎は実に饒舌だった。彼が嬉しそうに話す時の、その純な瞳を久は好ましく思う。

最初に部活動の大変さや顧問の厳しさ等を持ってきて、ポジションの話やライバル校との戦績の話に繋がり、そして三年目の最後の夏の結果を語るに至って、彼の顔は僅かに曇った。

「で、俺たちは決勝で負けちゃったんですよ。いやホント、後一勝で全国、ってところだったんですけどねー」

「それは……惜しかったのね。悔しかったでしょう？」

「ええ。人目もはばからず泣きましたよ」

京太郎は笑って、情けないとも取られかねない事実を喋る。だがきっともう、吹っ切れているのだろう。やるべきことは全部やって、既に心残りはない。そういった、清々しい表情をしている。

それを見た久は、努力の全てを行わずに、それを自分得意の悪い待ち方と取った自分に、覚悟していたが情けなさも覚えた。年下が全力で青春を謳歌したのに、自分はどうして燻っているのか、という気持ちもなくはない。

「何だか二年間も麻雀部に所属しておいて、何の成果も出せていない私が恥ずかしいわね」
「成果って言っても……ええと、さっき教えてもらった内容だと、確か麻雀の団体戦は最低でも五人必要でしたよね。部員が二人きりじゃあ、個人戦しか出られないんでしょう？」
「そうね」
「麻雀って運の要素強いみたいですから、幾らお二人が強くても相手が多いとすると上行く間に負けてしまうってこともあるんじゃないですかね……素人考えですが」
「慰めてくれてありがとう。でも、違うのよ。私は一度も個人戦には出ていないわ」
「へ？」
「ま、願掛けみたいなものね。ずっと私はただ待っているのよ。一緒に全国を目指すことの出来るような仲間が集まるのを。だから出るのを団体戦に絞って、必要な人が来るのに賭けているの。……須賀君からしたら、バカらしく見えるかもしれないわね」
喉から手が出るほどに、仲間が欲しい。そのための悪待ち。しかし久には、口に出せば出すだけ、自分の決め打ちが愚かしく思えた。
久の内では不真面目になにをやっているのだろう、という冷静に俯瞰している自分が常に存在している。一度そんな考えに帰ると、インテリアも実用品も過ごしやすく揃えた筈の部室に、居心地悪い空気が蔓延しているような覚えがした。
だが、部室に馴染んでもいない来訪者の京太郎は、そんな重い雰囲気を一蹴する。
「……何となくですが、分かります」
「そう？」
「願掛けとかは正直なところ分からないですけれど、仲間が大切で必要で、だから自分の一番の方法で得たいって気持ちは理解できます」
だって、あいつらと一緒だとすっごく楽しかったですから、と京太郎は言った。久もその感想には覚えがある。清澄に入学する以前、つまりまこと仲良くなるずっと前につるんでいたちょっと外れた友達。

その中で居心地良く過ごしていた自分。
　二人だけの今、ついそんな楽しみを欲してしまう、久のその感情に京太郎は真っ直ぐな瞳で確かな理解を示す。
「清澄志望っていうことで分かるかもしれませんが、俺、もうハンドやる気はないんです」
「どうしてか、訊いても良い？」
「はい。俺は勝てなかったあの試合の後、仲間ともう同じチームを組めなくなってしまったあの日、泣いた時に、気付いたんですよ」
　その表情を見た久は、相槌を打つことすら忘れた。悲しみを越えた達観、もう取り戻せない過去を懐かしむ思い。それらが表れた京太郎は、遠く憧れるような、久から見たらとてもいい顔をしていたから。
「ああ、俺はあの仲間と一緒に全国優勝したかったんだ、って。俺はそれだけの理由で、中学三年間ハンドに打ち込んでいたんですよ。だから、それがもう出来ないハンドをする意味なんて、感じられないんです」
　こんな考え競技者としては失格、ですよね。と笑う京太郎に、ろくな返答を考えられずに。ただ、久はポツリと本音を零す。
「うらやましい、な」
　団体戦でインターハイに出場するという夢を諦める気は更々ない。だが、似た目標に向かう素晴らしさを届かずとも既に味わい尽くしている京太郎の存在は、酷く眩いものであった。それこそ、遠く感じ、不安になってしまうくらいに。
　僅かに陰った久の心地、それを京太郎は察してすかさず慰めの言葉をかけた。
「今はまだ足りていないでしょうけど、竹井さんにもきっと、同じように思える仲間が出来ますよ」
「……なら、須賀君。貴方がその一人になってくれるっていうのはどうかしら？」
「そうですね……」
　京太郎が考え込んだのは、一瞬だけ。しかし久はその僅かな待ち時間にて、ドキドキと緊張し主張する胸元を実感した。

話している内に、この優しい青年のことをすっかり好きになってしまっていることを、今更久は実感する。
「清澄に受からなければそもそも無理ですけど……合格した暁には、いいですよ。麻雀楽しいですし。それに、竹井さんも染谷さんも……あの、いい人達ですから」
「……ふふ。そこは美人だからって言って欲しかったわねー」
久は笑って、捻くれたことを言う。だがその内心では、本当は泣きたいくらいに高まった思いを抑えるのに必死だった。
一緒に戦えずとも、共に歩こうとしてくれる三人目。それがこんなにも魅力的な男の子であるのが、嬉しくて。
「いや、確かに二人共、可愛いと思いますけれど……」
容姿のことはあまり考えていなかった京太郎は、しどろもどろになって本心を吐き出す。それは、久の心に届いて、感極まらせる。
「可愛い、かあ」
言われ慣れない言葉を受け取り、頬を紅潮させながら微笑んだ彼女は、確かに可愛いらしかった。

「そうだ、須賀君。仕事が残っているから、少し待って貰う必要があるのだけれど……一緒に帰らない？」
想いの契機を思い出して、今の竹井久は多少なりとも積極的になる。何しろ半年待ったのだ。共に居る時間を手にした今なら、そろそろ攻めに回ってみても悪くはないだろう。
そう自分に言い訳しながら、どこまで一緒できるかどうかも不明なままに、久は下校デートの真似事でもやってみたいと欲する。
「あの……すみません。ちょっと先約があって」
「あら、そう」
しかし、そんな久の誘いは素気無く断られた。途端、嫌な予感が沸き起こる。そして、意識が既に約束相手に向かっているのだろう、少し照れくさそうにしている京太郎を見て、それは間違いないと、理解した。

「道々、色々と教えてあげようと思っていたのに残念ねー。先に約束したのは誰か、訊いても良い？」
「咲っていう……まあ、友達です」
「女の子、なのかしら。須賀君が優先するくらいだから、よっぽど魅力的な子なんでしょうね」
「いや、あいつは見ていないと不安になってくるくらいのポンコツでしてね……まあ本人も分かっているんでしょうね。帰り道が不安だから待ってるって言ってましたし、多分今も校門の辺りで本を読んで立っていると思います」
「そう、なら早く行ってあげないとね」
「はい。それじゃあ入部届けは後で提出しておきますね。それじゃあ、さようなら。また明日」
「また明日」
　相手の待ち時間が相当に長くなっていることを思い出したのか、慌ただしく去っていく京太郎の背中を、久は笑顔のまま見送る。勿論、内心までも、その通りの訳がないが。
　せっかくの二人っきりでの下校。それを邪魔した少女に対し、久は敵愾心を持つ。また、それだけでなく距離の近いだろう相手に危機感も覚えて、一度聞いただけのその名前を確かに胸に刻み込んだ。
「咲、か」
　名前を呼んだ時の京太郎の表情を思い出し、久の作り笑顔は曇る。このまま、何もしないままでは、きっと気持ちは全てそっちに向かってしまうだろう。
　ただでさえ先輩後輩の違いがある。好きな相手には距離を縮める努力をしたり、アプローチをかけたりするのが、当然のこと。
「待っているわよ、須賀君」
　だがしかし、竹井久は慌てず騒がず。椅子に座って黒いストッキングに包まれた足を撫でながら、ただ呟くばかり。
　全てが全て、思う通りに進む訳がない。普通にしている方が確率高く、願いを成就させられるのだろう。それでも久はまた、自分の悪待ちを信じるのだった。

だってそれが、彼が自信を付けさせてくれた方法なのだから。

第四話　開花予想

宮永咲と、須賀京太郎は、小学校六年生からの付き合いである。それから高校一年目の現在まで長く続く仲が結ばれたのは、当時京太郎が通っていた小学校に咲が転校し、同じクラスになったことが切っ掛けだった。

京太郎から見ても、少し暗そうだが、可愛らしい転校生。彼を含めたクラスメイト達は、温かく咲を迎え入れた。しかし、彼女はそんな周りを見ず、本に目を落とすばかり。

次第に咲に話しかける人は少なくなっていった。それは、仔細あって京太郎も同じであり、何時しか彼女に対して遠巻きに見つめることしかなくなっていったのだ。

「宮永って、暗いよな」

「まあな……何かこっち来る前に、色々とあったみたいだけれど」

「話に乗らないし、本ばっかり見てるし、可愛いけどちょっとあれじゃあな」

京太郎は友達――中学にて共にハンドボール部で活躍するようになる高久田誠――と、同じ所感を抱いていることを確認する。

話題に出たように、転校してきたのは家が火事になったから、その際人が亡くなっている、等のその暗さの理由を裏付けるような無根拠な噂が咲の周りには付きまとっていた。

それがまた、少女を一人ぼっちにさせている。そんな現実が、京太郎は嫌だった。

「でも京太郎、お前は放っておけないんだろ？」

「そうなんだよなー」

それを誠は見抜く。それもその筈、この友人のお節介癖には、彼も助けられていたのだから。

誠には、成長期が早すぎて声が低く変わり背が誰よりも高くなって威圧感が出てしまったからか、クラス替えがあってからは周りが近寄って来なくなり、次第に一人になってしまった経験がある。

周りをつまらない奴らだと思い込むことで自分を守っていた誠に、

しかし背の順で一つ前の京太郎は積極的に話しかけた。中々認めることは出来なかったが、それがどれだけ救いになっていたことか。
淡白な反応しか返していなかったのに、仲良くなるまでよくそれに飽きなかったものだと誠は思う。生来のものか、或いは何らかの原因があるのかは誰にも分からないが、何にせよ京太郎は孤独を許せない性格だったのだ。
「で、どうするんだ？」
「今まで様子を見てきたけれどさ、ありゃあ自分の殻に篭っているみたいだからな。今までより積極的にいくしかないな」
「マジか……」
誠は京太郎の決断に思わず天を仰ぐ。その時彼は随分と天井が近くなったものだと感じた。
一度、京太郎は咲に拒絶されている。その理由は、話しかけられると読書するのにうるさくて邪魔だから、という至極単純なもの。
だがその分彼女の拒絶ぶりは強力なもので、近寄らない、逃げる、徹底されるそんな反応のせいで京太郎が見守るという選択をせざるを得なくなるほどだった。
その経験から馴れ馴れしく性急に近寄りすぎたのだという反省をせずに、足りなかったから逃げることを許したのだと判断した京太郎の単純さは、誠の予想を超えている。
「鉄は熱いうちに打て、だっけか。よし、行ってくる」
「……ああ、頑張れよ」
普通ならば糠に釘、ただ真っ直ぐにぶつかるより他にやりようがあるだろうと誠は思う。だが、彼は京太郎を見送った。
まず、京太郎の行動によって咲の鉄面皮が緩むのを見てみたくある。面白くなりそうだ、という予感があるのだ。
そして何より、誠は京太郎の真っ直ぐさを信じていた。あいつなら大丈夫と、敏感に接近を感じて逃げ出そう試みる咲を、そうはさせまいと走り寄るその背を安心して見つめる。
「宮永」
「……何？」

椅子から腰を浮かせたまま、目も合わせてくれない咲だったが、返事はしてくれた。それに京太郎は僅かながら手応えを感じ、ならば、と糠に強烈な釘を打ち込む。
「俺、お前を咲って呼ぶから。咲も俺を京太郎って呼んでいいぞ」
「どうして急に……」
「友達に、なろうぜ」
「はぁ？」
その宣言は、遠くで聞いていた誠を笑わせ、咲を驚かせた。
そして、これから二人の追いかけっこが始まる。逃げるのも追うのも、しばらく続き、やがてドジな咲は振り返って、京太郎に捕まるのだった。
手と手は繋がり、その瞬間に二人共、笑顔になりながら。

年若い京太郎は、孤独を愛する者も居るということを理解できない。下手な相手に無理に触れ合いすぎれば、自分と相手に火傷を負わしていた可能性がある。
しかし、咲は孤独に逃げたいだけだったのだから、彼女の独りぼっちを否定したのは間違いではなかった。
その証拠に、二人が二人になってから、咲はもっと一緒がいいと、今度は逆に京太郎のことを追いかけ始めた。追われる側がそれを許容したから、二人は大体一緒になる。
誠に嫁さんとからかわれるほど、京太郎に出来た彼女の殆どが咲の存在が原因で別れるようになったくらいに、彼らは時間を共にした。
最初は、大切だったものの代替として付き合い。そして彼が彼女の代わりにはなれないと分かった途端に関係は依存に変わった。
だが、それも長く続けば形も色も違っていく。何時しか咲の京太郎への想いは、正しく恋色に染まっていた。

人混み合う学食の中で、咲と京太郎は並んで昼飯を食べる。先に食べ終えていた誠が、今日も夫婦仲がいいな、等と呟くのを二人揃って

聞き流して。
　京太郎が頂いているのは日替わりのレディースランチ。それは一度食べてみたいという彼のために咲が頼み持ってきてくれたものである。代わりに、京太郎が月見うどんを頼み、交換する形で彼女はそれを食んでいた。
　流石に二つも頼むのは恥ずかしかったから止めたけれども、そっちも美味しそうだなと思いながら咲が太い麺を啜っていると、ふと思い出した疑問があった。
　京太郎が食べ終わるまで待ってから、咲は話しかける。
「ふぅ、ごちそうさま」
「ごちそうさま……あのね、京ちゃん」
「ん、何だ？」
「そういえば、昨日入りたい部活があるからってどこかに行ってたけれど。どの部活に入ろうとしてるの？」
「ん、まあ気になる部活があってさ。咲もその部の存在を意識してはいるはずだぞ？」
「ひょっとしてハンドボール？　でも、清澄ってハンドボール部ないよね。ひょっとしたら創部しようとしてるの？」
「そんな訳無いだろ。そもそも、そこまでしてハンドやりたかったら別の高校受けてるって」
「なーんだ。何か手伝えるかな、って思っていたのに。じゃあ京ちゃんは何部に入りたいの？」
　肩と肩があと少しで触れ合いそうな、そんな直ぐ近くで咲は首を傾げた。距離の僅かなその理由は信頼しているからだが、しかし当の京太郎は無防備さを少し心配に思うばかり。
　京太郎は、咲の好意の強さに今一つ気付くことが出来ない。それは、彼女が変わらず一緒であることを彼が希望しているためであったが、まだそんな本心を自覚することもなかった。
「……麻雀部」
「えっ？　本当に？」
「まあな。咲は相変わらず苦手なのかもしれないけれど、俺はちょっ

と前から結構嵌っちゃっててさ」
「ひょっとして、私に隠れてやっていたの？」
「……そうだな」
「ずるい」
むくれる咲に、京太郎は困る。それは、考えていた反応と違ったからだ。
友が自分の嫌いに触れたのを嫌がるのかと思いきや、まさか仲間外れにされた子供のような言動を取るなんて。京太郎は以前から思っていたほど麻雀を嫌うその根が深いわけではないのだと、今更になって気付いた。
これでは一人シリアスに構えていたのが、恥ずかしい。
咲は麻雀が嫌いだということを京太郎は長い付き合いの中で知っている。麻雀でお年玉を賭けさせられて、そして巻き上げられていたという話もついでに聞いていた。だから彼女が加減し、点数調整をして勝ちや負けから遠ざかるようになったのだ、という事までも聞き及んでいる。
話の全てを聞いた京太郎は麻雀から知らず距離を取るようになっていた。少女の憂いの一部である遊戯。それに彼が思わず隔意を持ってしまったことを、誰が責めることが出来るだろうか。
もっともそんな意識はあの夏の日から変化していたが、それを咲に知らせるのは今までためらわれていた。小学生の頃の傷心だった彼女のとつとつとした語りは本気の嫌悪を感じさせるのに十分で。そんな厭いを思い出させることすら、京太郎は嫌ったのだ。
だが時によって咲の忌みが薄れている今、気を回していたのは無駄だったと理解し、思わず京太郎は溜息を吐く。
「はぁ。そんなに怒るなって」
「のけ者にして……私だって麻雀出来るんだよ？」
「お前、麻雀嫌いだって言ってただろ……そんな奴に無理にやらせるのも、話題にするのもどうかと思っていたから黙ってたんだ。別に仲間外れにしてた訳じゃない」
「まあ、確かに私は麻雀好きじゃないけれど……」

口を尖らせたまま、咲は黙り込む。考え込んで、嫌いな麻雀をするデメリットと、京太郎と同じ時間を過ごせるというメリットとを彼女は脳裏の天秤にかける。

そして、秤はあまりに直ぐに一方へと傾いた。時間と共に嫌いは薄れ、好きは濃くなっていたのだから、それも当たり前のことだろうか。

「麻雀部って、どんな活動していて、どんな人が居るの？」

「咲、なんだ気になるのか？」

「うん。ハンドボールは一緒に出来なかったけれど、麻雀なら京ちゃんと遊べるでしょ。苦手意識も……実はもうあんまりないし。先輩が怖いとか、そういうのがあったら嫌だけれど」

「それなら大丈夫だ。どういう活動しているか具体的には分からないけれど、今居るメンバーは先輩だけだな。部長……咲に分かり易く言えば学生議会長か。入学式と部活説明会で挨拶していたあの竹井先輩と、まこさん……親が雀荘経営をしている一個上の優しい先輩の二人だ」

「そうなんだ。って、あれ……ひょっとして、二人とも女の人？　京ちゃんはどっちかが目当てで入部しようとしている、とかそういう訳じゃないよね？」

「バカ、そんな訳あるか。純粋に、麻雀がやりたくて入ろうとしてるんだよ。その証拠に男友達も誘ったんだけれどな……部活じゃなくても麻雀って出来るだろって、皆運動部にいっちまったよ」

「そっか。高久田君を筆頭に京ちゃんの友達の男の子って運動好きばっかりだからねー。それじゃあ、一年生は京ちゃん一人ぼっちなんだ……」

これは入った方がいいなと、咲は思った。周りが女子ばかりというのは京太郎の肩身が狭くなるかもしれないが、しかし上級生を除けば自分達二人になるというのはきっと一緒になる時間が多いだろうから望ましい環境で。それを考えた咲の機嫌はよくなる。

なら私が入部したら嬉しいよね、と笑顔で咲が続けようとするその前に、しかし京太郎は話し出した。

「いや、他にも和に優希、入部予定の同級生が二人居るぞ。両方とも経

験者で、特に和なんて凄くてさ。なにしろ去年のインターミドルチャンピオンで……」
「また、女の子？」
「……まあ、そうだな」
「はぁ……」
　しかし、割り込んで来るように更に別の女の名前が出てきたということで、咲の機嫌は急降下。ばつの悪そうな顔をする京太郎をじとっと見つめてから、彼女は溜息を吐いた。
　咲は京太郎が大きな胸の女性を好んでいるのは知っているが、それとは別に過度の女好きではないことも分かっている。だから、意図して女子が殆どの麻雀部に入ろうとしていることはないのだろう。
　それにしても、京太郎は部活する中で男一人というのを気にしていなさ過ぎではないだろうか。まあ、それは彼が女子に嫌われたためしが殆どないからだろうな、と咲は分かってはいた。
　困ったことに、目の前の思い人はモテるのだ。そして女に弱いところがあるのが、咲にとって面倒なところ。京太郎が告白されて、断った試しはあまりなかった。自分の隣の異性をまるで気に留めないというのに。
　だが今京太郎が付き合っている彼女はいない。自然消滅もあったが、彼にわざとくっ付く事で付き合った相手の邪魔をして、咲が破局に誘導させたことも何度かあり、次第に寄る女子が減ったからだ。
　そんなこんなで、京太郎の恋は今まで長続きはしないのが慣例である。けれども、これからも同じとは限らない。咲は無駄に恋敵が増えるのを黙って見ているほど大人しい性格をしてはいなかった。
　是が非でも妨害しないといけない。そして、そろそろ怖がっていないで自分の恋も成就させたいところ。ならば、苦手な麻雀漬けになろうとも、入部した方がいいのだろう。
「分かった。私も麻雀部に入る」
「そうか……そうしたら、咲が入ったら女子は五人になるし、女子団体戦にも出られるようになるな。これは部長喜ぶんじゃないか？」
「嬉しそうだね、京ちゃん」

「ああ。団体戦出場は部長の悲願らしいからな」
「へぇ……」
喜ばしそうに微笑む京太郎を、咲は白い目で見つめる。
京太郎は人がいい。だから、知り合いに感情移入をしているのも不思議ではなかった。不思議ではないが、その相手が見知らぬ女性というのは咲にとって面白い事ではない。
入学して二日目。普通に考えればその部長とやらとは出会って一日やそこらではないだろうか。それでここまで接近しているとは、侮れない相手だ。もしや人誑しというのではないかと、京太郎が久と半年前に出会っていたことを知らない咲は勘違い。
咲は思い違いしたままに警戒度を上げる。
「それじゃあ、後で部室まで連れて行ってね」
「かしこまりました、お姫様」
「何が姫だ」
「冗談だけれど、本当にそれらしく手を引っ張っていってやろうか？
何しろ、咲は行き方教えたくらいじゃあどこへ行くのだって迷っちまうような方向音痴だからなあ」
「そ、そんなことはない……と思うけれど」
「そうか。なら、今日から一人で帰れるな」
「それは無理」
真顔になって、咲は言う。単純に、帰り道をあやふやにしか覚えていないというのもあるが、そもそも京太郎と一緒出来なくなるなんていうのは彼女にとってありえることではない。
京太郎と帰路を共にするためだけに居座ったことで、ハンドボール部に入部せずに自然とマネージャーポジションに収まったこともある咲は、もう彼と帰りの時間を過ごせないことなんて、考えられないのだ。
しかし、何時までも拒絶されない今を楽しみ続ける訳にもいかない。幼馴染の位置にて胡座をかいていれば、トンビに油揚げをさらわれるというのは、もう何度も経験して理解したことなのだから。
「もう、京ちゃん。騎士を気取るなら、いたずらにお姫様の手を離すよ

うなことはしては駄目なんだからね」
「はいはい、そうだな。差し当たっては、食器の返却口まで案内してやらないとな」
「もうっ、バカにして……って、あれ。どこに返せばいいの？」
「……後ろを見てみろよ」
「あ、あった」
「本当に分かってなかったとは思わなかったな……」
流石は咲だ、と零す京太郎。彼が恥ずかしがる咲を見つめる目は完全に保護者のそれである。
そんな視線を受ける咲は、また心の距離が開いた、と残念がった。だが、それは自ら直すことの出来ないドジという悪癖のせいであるために、ぶつけることの出来ない憤りを持て余して、頬の紅潮も抑えきれずに、彼女はううと唸る。
その珍妙な唸り声がまた、京太郎の目を可哀想なものを見るものに変えてしまうのだが、咲がそれに気付くことはなかった。
「ま、いいか。ほら、トレイ貸せよ。返しといてやるから」
「いいの？」
「いいのも何も、俺は既に咲にレディースランチを持ってきて貰ってるしな。なら、持ちつ持たれつ、だろ？」
「そうかもしれないけど……」
咲が申し訳ないという表情を出す前に、京太郎はトレイを両手に持って背を向ける。無自覚に気を利かせられるのは彼の長所だ。ありがたいが、しかしそれが悪く使われることがないか、少し現友人として心配でもある。
部長さん達が小狡い人や甘えん坊だったりしなければいいのだけれど、と思いながら暇を感じた咲が周囲を見回すと、幾つか視線が集まっていることに気付く。それが何だかよく分からないままに、恥ずかしくなった彼女はへらりと愛想笑いをする。
咲には判別出来なかったが、周囲の視線は、主に彼氏彼女らしき二人を好奇心から見つめるもので。その大体は軽めな見ためでも優しい彼と可愛らしい文学少女のカップルを望む好意的なものであった。

「あれが咲さん、ですか……確かに須賀君の言葉通りの方のようですね……放っておけない、翻せば一緒にいて楽しい人。二人の距離は恋人一歩手前、といったところでしょうか」
しかし、それを認めず真剣に二人に目を向けるのもいる。たとえばそれは、昼食を採った後、デザートにタコスを食べたいと引っ張る優希に連れられてそれを目撃した和。彼女は、自分に恋情が向けられなかったその理由を察した。
和の推察の通りに、きっと部活を引退して二人で過ごす期間が密になってからだろう、京太郎は咲と一緒で楽しく充分だからと、他の異性をあまり欲さないようになっている。
心に巣食う咲の影は京太郎の感情の形を変えつつあった。もっとも、男女互いが憎からず想っているのだ、それが友情の範疇を次第に越えていくのは当然のことかもしれない。しかし、今現在の二人の距離は和の想像以上に近しいものだった。
「サルサソースがちょっと甘めだけれど、この学食のタコスも美味しいじぇ……ん、どうしかしたかー、のどちゃん？」
「いえ、ただ開花が近そうだな、と思っただけです」
「うん？　もう桜は満開だじょ？」
「もう、ゆーきったら、桜以外も花ですよ？　春の花に限ってもチューリップに菜の花、藤にガーベラ。他にも色々とあります」
「ちなみに、のどちゃんが見ていた花って何なんだじぇ？」
自分の後ろで京太郎が下膳を終えたことも食事に集中していたことで知らずに、優希は友人の表情に多少の憂いを覚え、心配になった彼女は完食手前のタコスを放置し会話をする。
そして、何だか誤魔化されているような感があるが、和がする花の話に乗っかった優希。しかし、彼女が純粋な疑問を口に出すと、親友は表情を変える。
悩ましげな顔から一転、和は眉尻を下げてから口元を歪ませて、微笑んだのだった。
「ふふ。開く手前で萎れる定めの花の名前なんて、私には分かりませ

ん」

和はそう呟いてから瞳を逸らし、窓の外から見える満開の桜を見つめる。何時かの幻想をその花に重ねて、彼女は彼を想った。

第五話　そして糸は撚られる

「さて、どうするか……」

京太郎は、十四の牌を前にして悩む。配牌の時点でタンヤオを中心として役を絡めていくという方針は出来ていて、その通り真っ直ぐに進んできたが、しかしここで彼は問題にぶつかる。

五巡目にして一向聴にまで漕ぎ着けたが、しかし周囲の様子がどうにもおかしい。別段聴牌気配の全てを敏に感じ取れるほど京太郎は麻雀に完熟してはいないが、それでも捨て牌や周囲の気配からある程度読み取る事は出来るようになって来ていた。

今は訳あって仕切り直しの半荘東場一局目。下家で親番の優希は一巡前に既に牌を曲げていた。彼女の河に置かれているのはヤオチュウ牌とまた一発でツモれなかったじぇ、と捨てた六筒のみ。

先に白を切っていたために現物は既になく、自分の手を進めるには八筒を捨てなければならないが、しかしそれは悪手であると京太郎は直感していた。

まずは明らかに機嫌の良さが伺える分かりやすい親の手の高さ、そして東を鳴いて最初から萬子に索子の中張牌を処理している上家の和が既に染め上げているだろうという予想もあって軽々とは切れずに。更に、一つ対面の相手の存在感にも問題があった。

ひと悶着起きてから静かに座す咲、その姿は京太郎から見ると何時ものものと一向に重ならない。

まるで、違う生き物と相対しているような感覚。怪物、魔物。人とは思えぬその麻雀の腕前は時に気配にすら表れる。京太郎は既にそれに覚えがあった。

「衣さんや靖子さんと同じ、だよな」

ぽつりと、京太郎は呟く。そして、師の教え通り、絶対に危ないと感じるこの八筒は切るまいと決め、対子になっていた二萬を半ば直感的に選んで河に捨てる。

誰からも和了宣言はなく、京太郎はそれにほっと一息ついた。そして、そのまま椅子に寄りかかり、優希の捨てた牌を流し見た、その瞬

間。
目の前の咲から溢れ出る威圧感が一段増した。彼女は小さく口を開き、呟く。
「ロン」
そう、優希が捨てた八筒は咲の当たり牌であった。整列した十三の牌は、静かに倒される。
「ピンフ、タンヤオ、イーペーコー、三色同順、ドラ1。跳満、一万二千点です」
「うわー……咲ちゃんもテンパってたのかー。やられたじょ」
点棒を受け取りながら、咲はじっと対面を見る。これでいいんだよね、という意味の篭った強い瞳に対し、京太郎はゆっくりと頷くことで答えた。

約束の放課後。咲と京太郎は、部活勧誘が盛んな新校舎から逃げるように出て、並んで旧校舎へと向かっていた。
京太郎が途中の川を覗き込む咲を急かしたり、緩い坂の上に建つ歴史ある元校舎を二人してしばし見上げたりしてから、彼らはゆっくりと麻雀部の部室へと行く。
しかし、その歩みは遅すぎたのか、いざ部室に入る前となって、その扉の向こうから聞こえる先着者らしき人達の話し声が複数あった。それら全ては京太郎には覚えがあるものだったが、咲にとっては初めてのものばかりで。
少し及び腰になった咲に気付いた京太郎は、先に言われた通りに彼女の手を引きノックをしてからノブを捻ってドアを開け放つ。
「失礼します、須賀京太郎です。部員候補連れてきましたー」
「わ、わっ。京ちゃん。手、手ぇ離して……」
「手を離しては駄目、とか言っていたのはどこのどいつ……いや、そんなに恥ずかしがるなよ。分かった、離すって」
「あっ……」
京太郎は四人の目が向いた中で、咲と繋いだ手を優しく解く。そし

て、笑顔を知り合いの皆に向ける。しかし、彼の視線は誰とも合わさらない。何故なら彼女達は、部室に入って来た少女を見定めていたのだから。
特に、三対の目に篭められた感情の強さを京太郎は不思議に思う。更には、自分達が入って、会話がぷつりと途切れてしまったことにも。
見られている当の咲はというと、恥ずかしさに負け手放したが、名残惜しく感じているのか没収されていく京太郎の掌をじっと見つめていた。
「ほ、ほら。急に目の前でラブな展開が始まって皆困ってるじぇー。京太郎、その女の子、誰なんだじょ？」
「……そうじゃな。二人して手ぇ繋いで入って来たけぇ、驚いたのう。しっかしその可愛げな子はひょっとして京太郎がよく話していた……」
「宮永咲さん、ですね？」
「へぇ……貴女が、昨日須賀君が話していた子なのね」
気味の悪い沈黙を嫌い、それを破ったのは優希。彼女の発言を呼び水にして、会話は繋がっていく。
だが初対面の相手が交わしているそれが自分に対するものになっていくことに咲は驚き、京太郎の背に隠れるようにしてから身を縮こまらせた。
咲のそんな些細な行動が三人の少女の心を乱していくのだが、そんなことには気づかずに、彼女は素直に京太郎に対して疑問を呈す。
「うぅ……京ちゃん、私どうして出会ったこともない人達皆に知られてるの？」
「悪い。俺、咲のこと結構話のだしに使ってたわ」
「もう、京ちゃん！」
あっけらかんとからくりを口にする京太郎に怒った咲は、彼の大きな背中をバシバシと叩く。笑顔で小さなその痛みを彼は受け取った。
喧嘩するほど仲がいい、その体現。そんな二人の気安さは、周囲に毒を生む。胸の中に湧いた嫉妬という名の猛毒に冒されるのを感じながらも、久は笑みを作って彼と彼女を引き離すために口を開く。

「それにしても、嬉しいことね。宮永さんが入ってくれたらこれで一気に部員が四人も増えることになるわ。ふふ、今日からは一年生だけで卓を囲むことだって出来るわね」
「……そうじゃのう。団体戦にも出られるようになるし、こりゃあ喜ばしいことじゃね。後は……京太郎からは聞いちょらんかったけれど、宮永さんが経験者じゃったりしたら尚嬉しいんじゃが」
「あ、それなら大丈夫です。咲は小学生の頃から打つのを止めているみたいですど、経験者ですし……聞いた限りだと多分強いんじゃないですかね？　ただ……」
「ただ、何なのかしら？」
「コイツ色々とポンコツなんで点数計算なんか忘れているんじゃないかって不安なんですよね……って抓るなって。流石にそれは痛いだろ」
「京ちゃん、だからそうやって初対面の人に悪いイメージを植え付けようとしないで！　麻雀なら昔散々やったからちゃんと覚えてるよっ！」
「へぇ……なるほど。それなら今直ぐ卓に付くのも不可能じゃないわけね。そうね……須賀君以外の実力を本当のところはよく知らないし、これから一年同士で半荘一回やってみる、っていうのはどうかしら？」
「はぁ……別に良いですけど」
久は一つ提案をして、激する咲から言質を取り、にやりと笑う。
その微笑みの薄黒さを感じ取れなかった咲は、麻雀部に入るということで闘牌する覚悟自体はとうに済んでいたがために、実に気軽に受諾していた。
勿論、丸々一年共にあったまこが、久のわざとらしい笑みから何らかの謀りを感じないということはあり得ない。自動麻雀卓の側に集まって場所決めを始めている一年生達を眺めながら、小声で彼女はこの場に一人の最上級生に話しかける。
「……悪い顔しとるのぉ。ひょっとしたらこのまま、和の実力を伝えて注意をせん気か？」

「あら。須賀君が詳しく言っていなかったらだけれど、和の肩書きに萎縮されないままに、伸び伸びと宮永さんの実力を見せてもらう、良い機会じゃない。それに……どうも和はやる気みたいよ？　出来れば牌譜だけではなく実際に彼女の実力も見ておきたいところだったし、一石二鳥じゃないかしら」
「京太郎は見違えるほどに上手くなっちょるが、それでもきっと和の一人勝ちじゃぞ。宮永さんに麻雀嫌いになられてもわしは知らんよ？」
「今もそんなに麻雀が好きなようには見えないけれど。それに、きっと大丈夫よ」
「そりゃあどういう……」
まこがは思わず繋げようとした言葉を失う。それは彼女がそっと、京太郎が西家に座ったことを確認している間に、久の笑みの質が変わっていたからだ。
先程までの表の黒さが薄闇だとしたら、今の笑顔はまるで暗黒を湛えているかのよう。余人には伺いきれない強い感情を隠して、久は笑んでいた。
「私はそんなに簡単に成果が崩れてしまうほど、程度の低い賭けをした覚えはないから」
彼に匹敵するくらいの結果が手に入れられていたとしたら嬉しいのだけれど、と零して久はそのまま笑みを深める。そして、彼女は大したことがなかったらどうしちゃおうかしら、という考えを内で転がした。

卓に着いてから京太郎は、咲に手加減をするなと伝えておくことを忘れていたことに気付く。彼は聞いていた。点数調整、即ち勝ちも負けもないプラスマイナスゼロを目指す麻雀を彼女がしていたということを。
もっとも、自分と遊ぶためだと言っていたが、部に入るということは麻雀に対するやる気が出たみたいであることだし、流石にそれを続

けるとは思えない。なら別にわざわざ口に出す必要はないかと京太郎が思い、南家の咲を見た時。
　途端、心の臓が凍りつくような思いがした。
「さ、咲？」
「どうしたの、京ちゃん？」
「そうか、咲だよな……」
「ど、どうしたんだー、京太郎。ちょっとおかしいじょ」
「優希も前からちょっと変だと思うけれどな」
「大丈夫ですか？　なら……始めましょう」
　しかし、咲から現在進行的に発せられている恐ろしい程の威圧感による京太郎の動揺は、誰にも共有されることはない。普段の印象すら歪みかねない程に強烈なそれが、錯覚である筈もなく。
　ならば、これは師によって強制的に磨かされた自分の感覚によるものかと、京太郎は理解する。今まで隣にあった相手が魔物であったことに今更ながらに気付き、彼は苦笑い。
　また、優希の態度が初対面の気安さから一歩引いたような風であるのも気にかかるが、しかしその理由まで解するには時間がなかった。
　卓に着いたからにはすることは麻雀ばかり。京太郎の様子を訝しがりながらも東家の和が南を捨ててから、この局は始まった。
「リーチ、いくじぇー」
　そして、三巡目。あまりに早く優希の牌が曲げられた。いかなるオカルトか、東場に強い彼女は南場に向かうまでヒキ等がすこぶる良くなるのだ。今も配牌の不要牌を三枚真っ直ぐ捨てることしかしなかったのだから、その程度が伺えるものである。
　京太郎はニコニコと機嫌よく笑う優希を見てから、早いだけではなくその打点が低くないことに気付き、これは調子づかせるのは危険だと感じて、鳴きを敢行した。
「ポン。すまないな。一発は消させて貰ったぜ」
「むぅ。小癪なやつだじぇ」
「どこ見て言ってるんだ？」
「えっとその子、そう咲ちゃんを見てたんだじょ」

「私？」
対決している者同士、視線のやり取りが行われるかと思いきや、どうしてだか優希はそっぽを向いている。実は彼女なりに京太郎を意識しないようにと振る舞っているのであるが、当人以外にはさっぱりその意図は分からなかった。
急に視線と水を向けられた咲などは困惑してしまっている。つい、場を混乱させてしまった優希は頭を振って前を向く。
「うぅん。まあ、飛ばされた訳でもないし、鳴かれてもツモればいいだけだじぇ……あ、これは」
「それもポン、だ」
気を取り直して、優希が引いて来たのは東。自分の当たり牌でなかったためにそっと河に捨てたそれも、鳴かれて京太郎に持って行かれる。
京太郎が晒しているのは、二萬三枚に、東三枚。河には一索に九筒、五筒に西が一枚。そして今もう一枚の西が捨てられた。
果たして染めているのか或いはトイトイにでも持っていっているのか。東のみで流そうとしているようにも取れる。
「何だか嫌な感じだじょ……またツモれなかった」
リーチをかけているのに及び腰になって来た優希は、次も自力で和了牌を持ってくるようなことはなかった。流石に三連続では鳴かれず、そのまま静かに東一局は進んでいく。
優希は二副露している京太郎が振り込むことを期待するが、意外にも彼から当たり牌が転がり出てくるようなことはなかった。
やがて、六巡目に優希が捨てた牌を見て、和が口を開く。
「ロン。ピンフ、タンヤオ、ドラ1。五千八百点です」
「うぅ。この待ちで和了れないなんて、不運だじぇ……タコス力が足りていないのかもしれないじょ」
「お昼に食べたばかりじゃないですか……」
言葉の通りに優希は一、四、七索の三面待ちを取っていた。対して、和は普通の両面待ち。恐らくは聴牌速度でも勝っていた筈なのに、負ける。それも麻雀であるといえばそうであるが、落胆は残った。

しかし、後ろで全体を俯瞰していた者には優希が和了れなかったのが、ただの不運によるものとは思えない。その原因を、久とまこは京太郎と咲に見た。小声で、彼女らは話し合う。
「それにしても、須賀君が鳴かなかったら優希が一発でツモっていたわね。代わりに一索が回ってきた宮永さんも、不要牌だったのにちゃんと最後まで抱えて回し打っていたし……二人には何か、確信でもあったのかしら？」
「さあのう。ただ、京太郎の守りは師匠譲りじゃが、知らん内に鳴きを何処かで教わってきたみたいじゃ。時折、一発消し以外にも妙に上手いタイミングで鳴くことがあるの」
「須賀君は多芸ねぇ。宮永さんは……一局ではまだ分からないか。でもまあ、あの二人が待ち牌の殆どを手放さなかったのだから、それじゃあ優希が和了れる筈もないわね」
そう、幾ら相手が多面で待とうとも、当たり牌の大体を離さず持っていれば、相手が和了る率はずっと下がる。だが、それは相手の待ち牌を確信するほど予期していなければならない。
京太郎と咲は、二人してそれほどの嗅覚を持っているというのだろうか。もしそうだとしたら、と考えると、久の笑みは深くなる。
「ひょっとしたら、麻雀部全員で全国に行けるかもしれないわ」
「どうじゃろうか……女子には龍門渕の天江みたいな規格外もおるしのぉ。京太郎一人を送り出すようなことになったら、笑えんぞ？」
「ふふ。そうね、気を引き締めないと……あら？」
二人して話に興じながら眺めていると、次の局に向かおうとする皆を手で制した京太郎の姿が見て取れた。何事かと手を止める三人に対し、京太郎は左隣の咲を見つめている。
その瞳の真剣さに、気持ちの向かい様に、近くでそれを見ている和などは特に気分を悪くしていたが、しかしその強い意思を無視することは誰も出来なかった。
「二人にはすまないが……大事なことなんで、ちょっといいか？」
「別に、構いませんが……」
「どうしたの、京ちゃん？」

よく分からずに、咲は少し怯えたまま首を傾げる。そこに、いや先からずっと喜色がなかったのが、京太郎は気にかかっていた。
そして、京太郎の師匠であるプロ雀士をすら越えかねない程の威圧感を放っておきながら、咲が持っている筈の誰からも判るくらいに鮮烈に映るだろう特殊な力を欠片も見せなかった、その有り様もおかしい。
スロースターターである可能性もあるが、それは違うと京太郎は確信していた。咲の感情の向きくらいは彼も判るのだ。何しろ、一番深く付き合っている、友人なのだから。
「あのな、咲。やっぱり麻雀、つまらないか？」
「え？　そんなこと……ないけれど」
思わず、咲は慌てる。こんなにも麻雀が大好きそうな面々の中で、楽しくないなんて口にすることはとても出来ない。しかし、真摯に向けられた京太郎の瞳に抗うのは難しく。そこから、彼女は目を逸らしてしまった。
京太郎は、それに苦笑いして、語る。
「なら、楽しもうとしてみてくれ」
「どう、やって？」
「簡単だ。本気になればいい。そうすれば負けも勝ちも悔しいし、面白いんだ」
俺は負けが多いけれど、咲ならきっと勝ちを楽しめるだろ、と京太郎は更に繋げた。
しかし、後半の言葉を聞き流し、咲は京太郎の表情に注目する。何故なら彼の表情は得意げでもあったが、例えようもないくらいに楽しさを湛えていたから。
それが、咲は羨ましくも思え、気づけば頷いていた。
「……分かった、やってみる」
「これで、仕切り直しかー、なら、最初からやってみようじぇ。本気なら半端に始めるのは良くないじょ！」
「ゆーき。負けているからってそんなこと……今、私が親の一本場なのですが」

「ま、まあ、のどちゃんがいいなら、だけれど」
「……そうですね。別に構いませんよ」
ついさっきまで京太郎に距離近く諭されている咲を睨みつけることを必死に堪えていた和だったが、しかしここで彼女はふわりと笑う。
美しい笑みを間近で見た三人は、それに驚き、特に一人は照れを覚えた。そして、その成果を受けて、上機嫌になった和は、更に笑顔を深めて頬を掻いて視線を逸らす京太郎を見つめながら、言う。
「楽しい時間が続くのは私も嬉しいですから」
良いですよね、先輩方、と言の葉紡ぎながら、しかし和は誰にも有無を言わせることはなかった。

半荘一回。されどもその八局は非常に熱の篭ったものだった。
東場で暴れる優希をそれぞれの力で御し、そして南場で疲れた彼女を抜き去り。そのまま三つ巴で争い続ける、その最後に和了ったのは、やはり彼女だった。
「三色同刻、嶺上開花自摸、四千、二千点です」
嶺の上にて花が咲く。本日三度目のそれによって、勝負は決した。
「ふぅ……やられたな」
「捲くられましたか」
「いや、二人共、咲ちゃんおかしいじょ。どうして当たり前のように嶺上開花なんて役で和了っているんだじぇ！」
「偶然ですよ」
「まあ、なんだ。そういうものだと思わないと後々苦労するぞ？」
「うぅ……誰も驚きを共感してくれないじぇ。部長に染谷先輩はどう思う？」
「彼女が味方で良かった、という一言しか思い浮かばないわね」
「同感じゃ」
余人の手届かない嶺上牌を支配して和了る、そればかりではなく素の運の強さも尋常ではない、その様子。今は俯いていて表情すら判ら

ないが、それでも咲は明らかに強者である。
　それを、この場の誰もが理解していた。悔しくも、彼女は誰よりも強く、そして彼に近い。嫉妬のように濁った昏い感情を、三人は覚える。
「あの、私、勝ったの？」
「……そうだな。咲。お前は勝ったんだよ。俺に勝つなんて、やるじゃないか」
「そう、なんだ。あ、あれ。なんだろ。涙が……」
「それが嬉し涙、だな。俺がハンドで決勝行き決めた時のと同じだ。あの時は京ちゃん泣き虫、とか言いやがって……」
「うう、そんな昔のことなんて忘れてよ……でも、そうなんだ、これが。嬉しいな、麻雀やって良かった」
「だろ？」
　涙を零しながら、咲は笑顔を作る。それに、京太郎は満足を覚えた。何しろ、彼は麻雀が好きだ。その気持ちを一番の友達と共有できたのが、喜ばしくないわけがなかった。
　だが、京太郎は咲の本当の想いを知らない。京ちゃんと同じ感情を味わうことが出来て嬉しい、という言葉は紡がれずに呑み込まれる。
「……今回は完敗、ですね」
「のどちゃん？」
「何だか妬けちゃうわね」
「本当に、のう」
　咲の涙をハンカチで拭わせる京太郎を三者三様に見つめながら、思いは言葉を吐き出させていく。
　負けを認めた和の言葉は震え、うそぶく久の視線はしかし強く、まこの感情は深淵に落ち込んだ。

　こうして、恋する彼女達が求めて伸ばした赤い糸は、互いにぶつかりあって錯綜する。
　それを知らずに撚り集める彼、京太郎は誰の思いも知らずに麻雀と親しみ続けていく。しかし、ふと目を上げた、その時に気付くのだろ

う。赤い糸から伝わる、清く澄んだ熱い想いに。
果たして誰の糸が、彼と繋がっていくのだろうか。
今日も、運命の賽は転がっていく。

第二章　混織

第六話　危機感

　秋の風に肌寒さを覚え始める頃。パンキッシュで露出度高めな衣服ではそろそろ寒い。しかしゆるりとキセルをふかし、空の青さを見飽きるほど眺めてから、藤田靖子は麻雀、ｒｏｏｆ―ｔｏｐに入店した。

　入店ベルを耳にしてにこやかにやって来るメイド服を着た少女の、その可愛さに癒やされるものを感じながら、靖子は薄く笑んで片手を上げる。

　少女は勿論、看板娘のまこであった。客との会話、ということで誰にも聞き取りやすい標準語に切り替え、彼女は靖子と言葉を交わし始める。

「藤田さん、いらっしゃい」

「まこ、久しぶり」

「ああ、確かに、お久しぶりです。そういえば藤田さんは、夏が始まってからいらっしゃらなかったですね」

「解説にリーグ戦で忙しくてね。私が来ない間に何か変わったこと、あったかな？」

「変わったこと、というと……ああ、新しい常連が一人増えた、ということが一番のニュースですかね」

　まこは僅かに考え込み、頬を少し赤くしながら言葉を紡いだ。それを見た靖子はおや、と思う。

　しかし、話をそのまま受け取ってしまうと、恥じる要素など何処にも感じ取ることなど出来ない。だから、靖子は少し勘繰って山を張った。

「なんだ、新しい常連っていうのは若い男か？　まこ、あんまり変なのに引っかかるなよー」

「っ、京太郎は変なのじゃありゃあせん……っとすみません」

「はは、いいさ。なるほど、本気なんだな。こちらこそ、からかってす

まなかった」
「いえ。どうにも、京太郎のこととなると、自制が難しくて……」
今度は明確に紅潮した頬を押さえながら照れるまこを、靖子はほっこりとした心持ちで眺める。彼女は可愛いものが好きで、そして恋する少女は押し並べて可愛らしいもの。
まこの、その恋慕を喜んで認めながらも、しかし靖子は少しばかり心配する。何故なら、ｒｏｏｆ―ｔｏｐが普通の雀荘であった頃からの常連である彼女にとって、目の前のメイド少女は最早自分の妹のようなものなのだから。
それこそ本当に、相手が変なのであったら嫌だ。出来るなら妹分に幸せになって欲しいと思うのは、自分が未だに異性と一緒になる幸せを掴めていないから、という訳ではないと思いたい。と、まあそんな風に靖子は考え相手を見定めようとした。
「それで、きょーたろーとやらは今日来ている？」
「ああ、京太郎なら、あそこで皆に揉まれているところですよ」
「ふぅん。あの人だかりの中の金髪の男の子が、そうか」
そして、京太郎を見つけた靖子は眉を細める。思っていたよりも彼は若く、そしてどこか可愛らしくもある整った顔に金髪がよく似合っていた。見た目は、正直なところ好みのタイプだな、と思う。
京太郎は、後ろに立つ何人かの常連さんにその闘牌を見つめられ、それを突っ込まれたり褒められたりしているようだった。きっと人当たりがいいのだろう、皆に好かれて知らず中心になっているような、そんな様を靖子はそれとなく見て取る。
なるほど、表情豊かに周囲を沸かす彼は悪い子ではない。しかし、それを望んでいると、どうにも気になるところが一つ見つかった。それは、空気の生温さ。
「メイド雀荘になってからも、常連の皆固くて、初心者お断りみたいな雰囲気醸し出していた筈なのに……何だか随分と緩くなったわね」
「確かに、麻雀を覚えたい、っていうような段階の人は来ても直ぐに居なくなってしまうのが頭痛の種でしたが……」
「それを彼の人柄が変えた、ってところか。面白いな」

そう、この雀荘にズブの素人が来ているというのは珍しいことだった。以前も全く来なかったという訳ではない。しかし、初心を楽しませるに、ここの常連客は手加減というものを知らず。
点数的にボロボロになった彼らは、慣れていないから仕方ないと慰められながらも二度とここではやらないと決意するのが通常のことで。
京太郎のように、容赦なく点棒毟られながらも、笑顔で通い続けるのは相当に珍しいことである。もっともそんな不屈な彼だからこそ、皆がこうして遠慮なく親しんでいるに違いなかった。
「お、丁度終わったみたいだ」
「そうですね……一人腰を上げましたけれど続けたいみたいですし、出来たら入りますか？　他にも空いている卓がない訳ではないですけれど、どうにも藤田さんは気になっているようですし」
「そうだなぁ。息抜きになるかもしれないし、ここは一つまこの思い人の腕前を見させて貰おうか」
「まあ、見ての通り京太郎はまだまだ下手ですけれど……って、思い人では……」
「違うのかな？」
「……違う、ということはない、です」
茹ったように赤い顔をして、すがるように眼鏡に触れながら搾り出すようにまこは答える。青春真っただ中の高校生らしいそんな反応を見て、靖子は思わず撫でんとするその手を抑えるのに必死になった。
やはり、可愛らしい。こんな反応を見せたら彼の少年だってイチコロであるに違いないのに、と靖子は思うが、しかし先輩風を吹かしているらしいまこにそんな乙女な部分を見せるというのは照れで出来る筈もなく。
だから、余計なお節介を口にすることなく靖子は思う存分眼福を楽しんでから、彼女は京太郎の方へと歩み出す。
「あ」
その時ふと、二人の目が合った。会釈する京太郎に、しかし靖子は

上手く反応を返すことが出来ない。何故なら、彼の瞳の奥に思わぬ才気を感じ取ってしまったのだから。
垣間見えたのは、心焦がすような熱い炎。種ほど小さなそれを感じ取って、靖子の胸は高鳴る。
麻雀の強い女子達において時折感じられる力の顕れ。それがまさか、麻雀に触れて幾ばくも経っていないだろう少年から確かに見受けられるとは。
「こんにちは」
「……ああ、こんにちは」
挨拶を返せたのは、偶然に近い。それほど、靖子は呆然としていた自覚がある。
ただの卵と思っていたその中身が果たして金であったことに気付いたら、皆同じ反応をするであろうし、それも仕方のないことだろう。対する金の少年は、未だ幼く可愛らしいもの。
しかし、これは芽吹いてすらいない才能に手を付けることの出来るまたとない好機であることに、彼女は気付く。果たしてこの小さな種火に自分という燃料を思う存分注ぎ込んだらどうなってしまうのだろう。
知らず知らずのうちに、靖子は笑んでいた。そう、まるで、獲物を見つけた猛獣のように。

「しかし、須賀君が麻雀を始めてから一年も経っていないっていうこと、誰が信じるのかしらね？」
「わしは事実と知っとるが、まあ、普通は嘘だと思うじゃろうな」
時は変わって、京太郎たち一年生が入部したての春の黄昏時。早くに彼らを返してから、久とまこはそんな会話を交わしていた。二人が話しながら目を通していたのはつい先ほどまで行なわれていた半荘の牌譜。
先程まで読み書きも何も分からなかった京太郎に、三対の視線の痛みを無視して和がそれこそ肌が触れるくらいの距離で懇切丁寧に教

えていたその内容は、彼の勝利で終わっている。
　京太郎のスタイルである捲くりの技が存分に表れた最終局。二人のリーチを掻い潜り、おまけにヤミテン状態であった咲の当たり牌を掴んでも回し打って和了に繋げた、その超能力染みた防御力には久も驚きを禁じえなかった。
「最近男子麻雀のレベルが下がっているってよく聞くけれど……ふふ、須賀君がこれから世に出たら、その常識も変わってしまうかもしれないわね」
「随分と入れ込んでおるのぉ……まあ、ミスもまだするけれども、最近成長著しいし、同年代の男子であれだけ打てるのは、わしも他に知らんの」
「ヤスコの指導が余程効いているのね。須賀君を弟子に取ったと聞いた時は驚いたけれど、これなら個人戦で戦う分には問題ないでしょうね」
「そうじゃな……」
　久とまこの評は概ね揃う。須賀京太郎は間違いなく県予選で落ちてしまうような腕ではない。それどころか、不可思議な打ち手など殆どいない男子麻雀界で、いまだ完成には程遠い力を持った彼がどこまで高みへ登れるのか二人期待すらしていた。
　このまま行けばインハイチャンプ、そして師と同じくプロの道へ進むのだろうか。そう、京太郎は藤田靖子プロの弟子。彼は二人の知り合いの中で最も麻雀が強い女性に見出されて師事を受けているのである。
　そのため、久達には異常なまでの上達振りに対する納得があったが、しかし先達としてもどう手をつければいいのか判らない程のその成長度合いに、好きな彼の力になれないもどかしさも共に感じていた。
　だが、どこまでも思いを同じくしているということを、まこに悟られないよう、悔しさも何一つ表情に出さないままに久はそっと話を変える。
「彼に比べると、他の一年生は教え甲斐があるわね。まずは、東場に爆

発する性質があっても、南場での集中力の低下が著しすぎる優希」
「そっちは一目瞭然じゃが、和もデジタルの完成度は高いが、時折失敗をすることがあるのぉ」
「後、どうにも宮永さんは波が激しいわね。気持ちが影響するタイプみたい。須賀君が面子に入っていないときはそれが顕著になるわ」
「偶然だとか和には否定されそうじゃが、メンタルが悪いとイマイチ運も良くならんかったりするからのう。あの子の場合特に思いに牌が応えてくれるみたいじゃけえ、勝敗の比重に気持ちによるものが大きくなるのじゃろうな」
「正しくオカルトだけれど、宮永さんの場合、きっとそれで間違いないのでしょうね」
　あの和了り方はとても普通ではないし、と繋げながら久は普通ならば手の届かない場所にある筈の、嶺上牌を自在に用いた咲の麻雀の特異さを思い起こす。
　咲の無茶なはずの打ち筋は、牌を透視し、丸裸にした上で和了りに向かって直進しているのだと言われてみれば頷けてしまう程に不可思議なもの。彼女の分かる牌が全てではなく、運にも陰りが出ることもあるから何とか皆が相手になれているくらい。
　京太郎が感じ取った、魔物の気配は当たっていた。咲は、明らかに常識では考えられない手合いだったのだ。
「まあ、あの娘はこのままでも充分強いじゃろうが、しかし人間不完全だと知ると欲が出るというものじゃ」
「そうね。磨き上げればどれだけのものになるか。可能ならば龍門渕高校の天江に競り勝つことが出来るくらいになって欲しいわね」
「ほお。久、われは嶺上っ子をあの化け物に当てる気か？」
「ええ。感受性の高い宮永さんが天江と戦ってどうなるか、正直分からないけれど、もしかしたら壊されてしまう可能性まであるのかもしれないけれど……でも、私は私の夢のために魔物には魔物をぶつけるわ」
　それは、大小あれども同じく特異な力を持った、久にはこと明確に想像できてしまうこと。自信を支える全力を持ってしても抗えない

という恐怖を植え付けられてしまえば、トラウマにだってなるだろう。最悪、牌を握れなくなることだってあり得る。
久の発言には勿論、部長として勝とうとするための冷静な判断があった。だが果たして、それだけか。京太郎に最も近い咲がどうなってしまっても構わないという、そんなことを考えてはいないか。
それはまこが頑なに咲を名前で呼ばない隔意より尚、酷いのではと思わなくもない。幾ら自分を誤魔化しても、内心に全く他意がない、とは、口が裂けても言えなかった。
しかし、眼前に並んだインターハイ出場の夢を叶えるための鍵は、上手に用いなければ機能しないということは明確で。だから、久は自分の非情を認めなければならなかった。
「まあ、わしにゃあ久の考え過ぎと感じなくもないが……それでも、大会まで僅かじゃぞ。その間にあの子を天江と食い合えるまで実力を上げるにゃあ、どうすりゃあええんじゃろうか？」
「危機感、かしらね」
一言、久は口から出す。まこの疑問は幾度も内で転がしたもの。先に、その答えは出せていた。
そのためには、他力を借りることになるけれども仕方ない。決心した久はスマートフォンを取り出して、メッセージアプリを起動させる。
「ん？　何をしようとしちょるんじゃ？」
「ちょっと約束を取り付けようと、ね。そう、プロアマ親善試合で……直接対決ではない特殊なルールだったらしいけれど、唯一天江を破ったことのあるヤスコなら、現状の厳しさを教えてあげられるでしょう」
そう、仮想敵を既に地に這わしたこともある靖子ならば、咲を負かせることが出来るだろう。更に知り合いであるからには、加減も可能。
再び這い上がれる程度の敗北を咲に味わわせられる適任は、彼女しか居ないと、久は確信していた。だから彼女は深くは考えずに、危機感を植え付けさせたい子が居るの、と文を送った。

「藤田さん、か……」
策謀の成功を間違いないと思い微笑んでいる久とは対象的に、まこは一人、憂いを顔に出す。表に違いはなくともどこか変わってしまった姉貴分の、その全てを信じることが出来なくて。

「すみません。ちょっと、今日は部活を休ませて貰っても構いませんか？」
久が約束を取り付けたその直ぐ翌日。京太郎は部に顔に出してから早々に、そう切り出す。
部活を誰より楽しんでいた京太郎のその言葉に、しかし驚いた様子であったのは、和と優希だけだった。事前にそれとなく聞いていた咲だけでなく、久とまこは、靖子への依頼の交換条件として京太郎を共に向かわせることを既に承諾していたのである。
「どうしてか、聞いてもいいですか？」
「……いや、ちょっと靖子さん、いや師匠から呼び出しがかかっちゃって」
「京ちゃん。休むとは聞いてたけれど、私そんな理由だとは知らなかったよ……靖子さんって誰なの？」
「いや、あの人は俺の麻雀の師匠で……プロなんだ。まあ、不思議で、凄い人だよ」
「ふぅん」
急に不機嫌になった咲に、京太郎は自慢げに師匠を説明した。上手い賛辞の言葉になっていないのは、ご愛嬌である。
京太郎の師匠がプロであることに少し驚いたが、それ以上にまた知らない女の名前が出てきたのが咲には許せない。後で一度交友関係の全てを聞き出さないと、と彼女は決心する。
「後、出来たら咲と和を連れてきて欲しいって……知っているのは俺から聞いていたからとしても、どうして二人を呼んでいるんですかね」
「さあ。でもプロからの要請なら学べることもあるでしょう。優先し

た方が良いわね。二人、連れて行っちゃっていいわよ。そしたら、私達は空いた時間優希に付きっきりで計算ドリルを解かせるようにするから」
「ええ！　いやだじぇー。それなら皆と一緒がいいじょ！」
「わしらじゃって、点差計算すらでけん後輩の面倒を見るなんて嫌じゃよ。先輩が我慢しちょるんじゃから、わりゃあ、大人しく覚悟せえ」
「そんなー」
　つい先日、団体戦にて特に重要な点差計算どころか、試しにやらせた小学生用の計算ドリルすら間違えてしまう程である優希の低学力が皆に発見されていた。
　親友である和ですら擁護できなかったそれは、目下最大の問題であるとされ、上級生総出で問題プリントを作って数字に強くさせるようにしている最中なのである。
　そのため、少し事の推移を気にしていたまこが京太郎達に付いていくことは出来なかった。
「それでは、今日の午後私は京太郎くんとのお出かけとなりますか。その師匠さんは何処に？」
「ああ、それなら染谷先輩の親が経営している雀荘に……」
「む、原村さん。私も一緒なんだけど」
「ああ、すみません。宮永さんのことを忘れていました」
「そ、そう……」
　あっけらかんと、謝られたそれに悪意の欠片も感じずに、咲は困惑した。それもその筈、和が一度京太郎を意識してしまえば、その他の諸々の優先順位は極端に下がってしまうのだ。
　実際に、父親に東京の高校への転校を求められた時も、ただ自分は長野に残るということを訴えて、それを和は通した。後に電話で会話した母親には何か察されたが、そんなことも彼女は気にすることはない。
　未だに咲のことを目に入れながら、しかし真っ直ぐ和は京太郎を見つめていた。

「それじゃあ、行くか。そういえば、咲と俺は歩きで通ってるんだけれど、和も同じか？」
「ええ、そうですね。お二人とは家の方角が違うので帰りまでご一緒出来ないのが残念ですが」
「どうして、原村さんが私達の帰る方向知っているの？」
「春休みに聞いた大体の家の位置からの推定です」
「そ、そうなんだ」
そして、中々感情噛み合わない三人は、ｒｏｏｆ―ｔｏｐへと向かう。そこで待っている人物がどんな思いを抱えているか誰も知らずに。

雀荘への入店。最初は少し恐れていたそれを、咲は京太郎にその安全さを語られたことで問題なく出来るようになったはずだった。
しかし、その足は止まる。和は知らずに先行していったが、同じく特別な感覚を持つ京太郎は咲の顔を青くさせているそれに気付いてその場に留まった。
「大丈夫か？　何か今日はちょっと靖子さん、気合入ってるのかもな。何時もより気配が強い」
「京ちゃん……こんな人に麻雀を教えて貰っているの？」
「ああ」
「お姉ちゃんと対局した時よりも、怖い……」
「ん、お姉ちゃん？　……そうか。今まで訊かなかったんだけどさ、ひょっとして宮永照ってお前の……」
「二人共、どうかしました？」
「……なんでもないよ、原村さん」
多くはない宮永という名字、そして麻雀強者という符号。またよく見れば見た目にも似通っている。宮永照という麻雀好きなら誰もが知っているインターハイチャンピオンが、友人と姉妹であると、何となく京太郎も感づいてはいたのだ。
しかし、京太郎が疑問を解決するには、少しタイミングが悪かった。

戻ってきた和の言葉によって気を取り戻した咲は、既に問いを忘れて前へと歩き出している。
　京太郎も続いて、馴染みの店内へと進んだ。
「久しぶり、京太郎。後の二人は初めまして、かな」
「靖子さん、半月ぶりですね」
「初めまして、私は原村和です」
「……宮永咲、です」
「ふぅん。これまた二人共、可愛らしい」
　そして、奥の卓にて座していたのは、藤田靖子その人。この場においては咲と京太郎にばかりに感じ取れる筈だった威圧感は、そういったものを無視できる和を除いた他の客にすら察させる程に高まっていた。
　しかし、固唾をのむ周囲の沈黙を他所にして、靖子は微笑んで制服を着込んだ三人を認める。細められた視線を受けて、思わず咲は身震いした。
「あの、今日はどうして俺だけじゃなく、咲達を……」
「それは後で教えてあげるよ。先に二人に説明をしたい。そのためにもちょっと、京太郎は席を外してくれないか？」
「はぁ……まあ、いいですが」
「丁度いいから、何時もの出前、頼んでおいてもらえる？」
「またカツ丼ですか……まあいいですよ、まこさんのお父さんに挨拶ついでに頼んでもらいます」
　カツ丼ばかり食べていると太りますよ、との言葉を残して京太郎は、レジ打ちをしていた執事服の中年男性の方へ戻っていく。
　デリカシーのないそんな一言を、しかし靖子はにこやかに受け取って、その背中を見つめ続けながら、口を開いた。
「さて、京太郎が戻って来る前に、説明しておこうか。実は今日、私は久から君達に危機感を植え付けさせて欲しいと、そう頼まれているんだ」
「危機感、ですか？」
「恐らく久は、一番の敵になるだろう天江衣の恐ろしさを、私を通して

知らせたかったのだろうが……それよりも、もっと貴女達に危機感を抱かせるやり方を、私は思いついたよ」
「な」
「ひっ」
そして、靖子が二人を見つめた途端に、彼女から発される圧力は最早身体に直に働きかける程に極まっていく。流石に和も異変を察し、そして咲は涙目になって怖がった。
そんな少し情けなくもある様子の二人を見下げず真っ直ぐ見つめ、靖子は言葉を続ける。
「宮永咲に原村和。貴女達は京太郎のことが好きだね？　……でも、私はもっと大好きなんだよ。愛している」
咲に和が何か言う前に、靖子は間を置かずに独白する。頬を染めることもなく淡々と告げるその様に、彼女達は何一つ口を挟むことは出来ずに、次の言葉を待つばかりになった。
「京太郎は、強いだろう？　私は愛を持ってあいつを育てた。そして、その愛にあの子は応えてくれたんだ」
嬉しかったよ、と靖子は語る。それが、本気であるのは、その表情を見れば一目瞭然。
童女のように笑む靖子は、しかし途切れぬ威圧感もあって、異様でもあった。
「だから、私も強くなった。誰よりも、とはいかずとも以前よりもずっと、ね。京太郎が居なかったらそのままだっただろうから、感謝しているよ」
種火程度であった京太郎の焔は、その身を薪としその炎上を助けた靖子をすら燃え上がらせていた。
藤田靖子は最早、ただのプロ雀士ではない。今や、その中でも上澄みに位置する、怪物となって君臨し始めている。
「京太郎は私にとって目に入れても痛くない、我が子と同じ存在だ。まあ、京太郎の気持ち次第で一つになっても、別段構いはしないが……」
靖子は少し考え込んだかと思うと、ぽんと手を叩いて顔を上げた。

浮かんだその表情は、どこか清々しいものに変化している。
「ああ、そうだ。それがいいかもしれない。京太郎を私のものにしよう」
「何をっ」
「それだけは、駄目！」
まるでこれから散歩に出かけると口にするのと同じように、気軽に靖子はそう言う。
流石にそれは認められないと、激憤した二人は声を上げるが、しかしそんな一切を気にせずに、靖子は続ける。
「今すぐにといきたいが、それでは久やまこに悪い。夏が終わるまで待っていてあげよう。それに、そうだな……それまでに、貴女達のどちらかが、私に勝てるようになったら取りやめてあげるよ」
「それはつまり私達が今のままでは、貴女に勝てない、と？」
「勿論」
靖子は片目を瞑りながらただそれだけ呟いた。
幾らプロが相手とはいえ、腕に覚えがある彼女達はそんな言葉を認められるはずもなく、撤回させようと二人何か言葉にしようとする。
しかし、丁度そんなタイミングで、割り込むようによく通る声が響いた。
「靖子さん、そろそろ大丈夫ですか？」
「……京太郎も来たところだし、丁度いい。証明するためにも、さあ、打とうか」
実力を教えてあげるよ、と靖子は言う。毅然とした表情が二つ彼女へと向き、そしてそれは彼が来ても変わらなかった。
そう、咲と和は天敵として、目の前の女を見定めていて、最早敵愾心を隠すことすらない。
「ん。なんか皆、やる気だな」
そして、一人取り残された男は空気を読み違えて、ただその目を麻雀という楽しみへと向けた。

第七話　勝つよ

藤田靖子にとって、須賀京太郎は希望の光である。彼の中で燃え盛る炎、それは彼女の内まで飛び火し、溜まっていた澱を焼き尽くし、軽くなったその身を高みへと押し出してくれた。

教え与えるだけ伸びる彼の為に悩めば悩むほど、靖子の力も着実に伸びていく。それは、ずっと燻っていた過去が思い出せなくなるほどに、健やかなものだった。

得意は捲くり。そのための技術は誰よりもあると信じていた。しかし、他に対する自信はどうであったか。それはプロの世界に浸かれば浸かる程になくなって、幽かにしかないものだった。

だが、何も知らない京太郎は、靖子の全ての力を認めて褒め称える。それが、本気であることは疑いようもなく、また、彼女が卑下したところでそれを認めず彼は持ち上げ続けた。

すると、現金なことであるが、無根拠にも自信が復活してくるものである。そして、教授しながら冷静に見つめ直せば自分の不得手の理由も自ずと見えてきた。後は、試合の中で直していけばいい。

それが可能なのは、藤田靖子が一流の雀士だからということもあったが、京太郎という原石が放つ眩い光にその熱の影響も大きかった。あんなに早く成長し輝いている弟子に、無様な姿は見せられない。そんな矜持も確かに靖子を強くしていた。

そして努力は直ぐに実を結び、今までの実力では勝る事は難しいであろう相手に直接対決ではなかったとはいえ大量に稼ぎ勝つことに成功したのである。

それはコクマが終わってふた月近く経った冬の日。温い室内から出ることで感じる、抜けるような青空の下の寒さに、着膨れした姿で抵抗している小さな少女を見つけた靖子は彼女に声をかけた。

「あんたが天江衣か、お疲れ様。いや、強いね」

「……藤田靖子。衣も夜郎自大だったか。相手が千軍万馬な輩ばかりと分かってはいたが、どこか侮りがあったのかもしれない」

「難しい言葉を使うんだな……まあ、これでもプロの端くれだからな。

牌に打たされているような相手には負けれられなくてね」
「衣が、打たされている？」
「ああ、そうだ。細かく教えてあげてもいいが……今は時間がないか。気になるならここに連絡先が書いてあるから後でメールなり電話なりするといい。ほら、名刺」
「わ……にゅ、何だか可愛い黒猫とゴールデンレトリーバーが……」
「……それは気にしないでくれよ」
指摘され、少し恥ずかしくなった靖子は頬を掻く。名刺にデザインされたその犬猫のモデルは自分とその弟子であり、いまだに何故どうしても京太郎の影を自分の隣に入れたいと考えてしまったのか、彼女は疑問を持っている。
まあ、あいつも可愛いといえばそうだからな、と考えながらこっそり目の前の衣という卓上では魔物であっても下りた今は幼気なばかりの耳当てとコートでふわふわな少女を靖子は眺めて機嫌を良くしていた。
「衣ー。どこへ行きましたの？」
「トーカか。それでは仲間が探しているから、衣は帰る。フジタはどうするんだ？」
「もう少し、ここに居るよ」
「そうか」
そして、靖子をその場に放って、メイドを侍らせた金髪の少女の元へとウサギのカチューシャをした金髪少女は走り去る。
こちらを睨みつけている恐らくは透華というだろう少女に、靖子は笑顔を返してから、空を眺めた。着物も気温も違えども同じ晴天の下。しかし京太郎と出会ったあの時、それと比べてどうにも身体が熱くて肌寒さが殆ど感じられないな、と考えながら。
原因となっている、先まで牌を握っていた掌を開いて閉じる。そこに未だ残る熱は、錯覚ではない。今まで毛先も触れることのなかったオカルトを今や掴んでしまった、その感覚を靖子は思い出す。
「あんなことを言ったが、しかし、今日は私も打たされていたのかもしれないな……」

ここ最近、毎度ではないが大事な時に限って必ず誰かの当たり牌を掴んだその時、指先に炎が燃えあがってそれを離さぬようにと靖子を促すようになっている。幻の火炎はその色も熱もまるきり京太郎の瞳の奥にて燻っているものと同じ。

つまり、師弟の絆か何なのか、靖子は京太郎の力の影響を受けて、事前に危険牌の察知をすることが出来るようになったのだ。勿論、そんなものが無くとも彼女は強いが、それでも百発百中の熱い感覚に頼ればその防御力は正しく無比。

今試合、つまりはプロアマ親善試合においてその力は猛威を奮い、半荘十八回を戦って一度たりとて振り込むことなし、という結果になったのであるから、恐ろしい。

「ま、京太郎の助けだと思って有り難く使ったが、別に今回は頼らなくても良かったかな」

だが、力の助けが無くともこの試合にトッププロは出場しなかったこともあり、普通に打っても勝ちをおさめられたのは間違いなかった。炎に頼らず何度か振っていたとしても、靖子は悠々と一位を取れていただろう。二位の衣を引き離して。

天江衣は確かに強い。完調ではなくとも、彼女は正しく魔物で、只の人の手に及ぶものではなかった。

しかし、競った相手は、普段からプロの世界で魔物と争い続けている靖子。もっと言うならば、その実力自信を磨き直して絶好調のプロ雀士。そんな彼女が、不完全な魔物等に負けることなんてまずないのである。

「ふ、藤田プロ！」

「確か、君は三位の……」

「あの、これにサインしてもらえませんか？」

「プロ雀士カード……しかも私のか。いいよ、書いてあげよう。ペンはあるかな？」

「あ、忘れていました……」

靖子がキセルを吹かしながら、自分の闘牌を振り返っていると、そこに束ねられた黒髪を跳ねさせながら、凛とした顔立ちの少女が表情

を崩してやって来た。
思い返せば彼女は高校一年生ながら今試合にて三位になったプロの某が見出したという期待のホープであり、そんな子が何用かと思えば、ねだられたのは己がサイン。
快くそれに応じようとした靖子であったが、しかし如何せん試合を終えて直ぐにふらりと外へ出たがために、筆記用具等は手持ちになかった。
故に、カードを用意する余裕があったのならば、と書くものも持って来ていないか尋ねたものの、少女が忘れていたために、それはなく。
思わぬことに顔を朱くした少女を見、どうしようか考えていると、ぽつりと彼女は呟いた。
「うむぅ、失礼しました……あの、失礼ついでに、一つ聞いていいですか？」
「何かな？」
「藤田プロは、京太郎と、どういう関係なのですか？」
「ほう」
靖子は思わず唸る。恥から下を向いていた少女が、顔を上げて京太郎と口にした瞬間、先までが嘘のように切り替わった。その能面の様な表に黒く光る両の瞳に宿るのは粘っこい、敵意。
麻雀で散々に負かした相手からだってそうは伺えない強い意を受けながら、しかし靖子の口の端は弧を作った。
「どうして、彼の名前が出てくるのかな？」
「先輩みたいにどんなものでも臭いで分かる、という訳ではないですけれど……京太郎の臭いならば私は間違えませんから」
「今日一度も会っていないのに分かるとは、全くオカルトな嗅覚だな。それで、京太郎と私がどういう関係かというと……」
「なんですか？」
「からかおうかと思ったけれど、冗談で刺されたら困る。ただの師弟だよ」
ふざけることは許さない。そんな強き視線に音を上げて、靖子は正直に関係を話す。すると、少女はポニーテールを跳ね上げ、驚きを見

せた。
「師弟、ということは……京太郎、麻雀始めたのですか！」
「まあ、その通り」
「あれだけ誘っても乗らなかったのに、どうして……」
灰吹きに吸い殻を落としながら、困惑する少女を靖子は観察する。卓上での達者振りと異なって、右往左往するその様子は年相応で可愛らしい。
表情を様々に変えられるのは、最早羨ましいぐらいだと思い、もう一つその顔を驚きに変えることの出来る言葉を思いついて、そのまま靖子は口にした。
「それは知らないが……なるほど君は京太郎のことが好きなのか」
「ええ。何よりも」
しかし、少女は何一つ驚きも恥ずかしがりもしない。決然とした表情を作って、そして真っ直ぐに靖子を望む。
「……まあ、頑張るんだな」
それに圧されることなく靖子は笑い。彼女は適当に応援しているよ、と口にしようとした。
「あいつは私のものだが」
しかし、口は勝手に動いてそんな言葉を発し、更に酷薄に歪んだ。未だ熱を孕んだ手を確認するように強く握り。そうして、靖子は近い自分を確認してから、遠い少女を嘲笑ったのだった。

「それにしても、京太郎の師匠ってどんな奴なんだじぇ。藤田プロってあまり知らないじょ」
「ほら、口だけじゃのぉて手も動かしんさい。……まあ、最近じゃのお。藤田さんがテレビで騒がれるようになったのは」
「和了りの派手さはなくても、捲くりというスタイルに守備率一位ともあれば、人気が出ないわけもないわよね。でも、ヤスコ自身はプロ雀士カードでレア度が上がったことばかりを喜んでいたわ」
「随分と気にしとったからのぉ……」

小学生高学年相当の部分の計算プリント、ちょうど分数の割り算に差し掛かった辺りで飽きたのか疲れたのか、優希の手は完全に止まってペンから離れる。そして、数字溢れる脳裏で考えていた疑問を言葉にした。

まこはそれを問題視したが、しかし久は休みに丁度いいと話に乗ってあげてとアイコンタクト。またその題目が知り合いのことであるからには、すらすらと話は続いていった。

しかし、京太郎の師匠が二人と既知だとは知らない優希は目をぱちくり。驚いて再び質問をする。

「先輩たちとも、知り合いなのかー？　随分と清澄麻雀部と縁がある人だじぇ」

「と、いうよりもまこの家の雀荘と縁があるのよ。そこから私達、須賀君と面識が出来たの」

「へぇ。染谷先輩の家って雀荘だったのかー。どんな感じの雀荘なんだじぇ？」

「ノーレートの、メイド雀荘じゃ」

「メイド……雀荘……訳が分からないじぇ！」

優希は至極もっともな驚き方をする。しかし、現実にそんな訳のわからない雀荘は存在するために、彼女の発言はそのまま流された。

「まあ、そんなことより、私はヤスコがちゃんとあの二人に危機感を味わわせられるかどうかが心配ね。変に仏心を出す性格じゃないとは思うけれど」

「隠しとるようじゃが、どうも可愛いものに弱いところがあるからのぉ……和に咲を可愛いと思ったら果たしてどうなるのじゃろうか」

「むぅ？　何か先輩たち、悪巧みしていたみたいだじぇ。でも、あの二人に危機感って……そんなの、京太郎に恋人が出来た、とか嘘つけば一発なのに」

何気ない優希の一言。しかし、それは現状を彼女なりに理解しているが故の言葉だった。

思わず上級生二人は驚いたが、しかしその目がこちらにまで向いているようなことはない。特に久はほっとしながら、そっとまこの方を

見た。その際に目が合わなかったことに、また少し安心をして。
「……それは駄目じゃ。そもそも、この話は麻雀に対する危機感じゃからのぉ」
「そうね。……そろそろ、休み時間はお終いにしましょうか。ほら、ペンを持って」
「うー、仕方ないじぇ……」
そして、補習は再開される。少し落ち着かない雰囲気のままに、しかしその日、優希はもう二度と京太郎の名前を口にすることなく、嫌々ながらプリントの全てを平らげた。
先輩に頑張ったご褒美とタコスを奢って貰った優希は笑顔で先程までのことなど忘却の彼方にしてしまっていて。だから、意図的に黙していたのかどうかは、最早彼女にだって判らない。

それは、圧倒。京太郎という炎によって焚きつかれた靖子の力は最早学生程度では及びのつかない位置にあった。
ただでさえ運が太い上、相手の当たり牌をその手から零すような真似は殆どせず、更には多少点差付けられたところで捲くる技術まで持っている。
隙というものがまるでない。それでいて、靖子は今のところ別にオカルトな力には手を付けていないという事実。そう、彼女は単純に運と技術のみで三人を圧倒していた。
「通れば、リーチ……」
「ロン。流石にそれは通らない」
「また、ですか……」
高めを狙って捨てていけば、大抵の場合余り牌を狙い撃たれる。その繰り返しが和を脅かす。
牌の出し入れ、理牌の癖。プロの眼力からすれば、上品に牌を並べている相手の手牌は透けているようなもの。対戦者の中では京太郎のみが、理牌せずに挑んでいるが、練習せずに中々そんな真似をすることは出来ない。

勿論、それだけではなく、経験から来る勘に、来る牌に対する理解が靖子の早和了りを支えている。理論理屈は全てその補助にすぎない。

故に、余人には理解の及ばない打牌等頻繁にあって。そんな相手に勝てない、更には恋する人に近寄る毒婦に及ばないという苛立ちによって和の闘牌にも乱れが出てきていた。

「槓」

「ふぅ」

「嶺上開花、ツモ、タンヤオ。三千二百、千六百です」

「こっちは中々、か」

反して、機械のように咲は打っている。その内は冷静とは程遠いが、しかし怒涛も過ぎて呑まれてしまえば凪と影響は変わらなくなってしまうものであり。

苛立ちを通り過ぎた先にて、メンタルに依存しがちな咲の闘牌は皮肉にも安定していた。だが、それでも届かない。捲くりの女王は、最早役満を和了られたところで捲くられることのない位置で安堵していた。

そして最後に、視線の矛先は愛すべき弟子へと向く。

「しかし京太郎。お前はひょっとしてヤキトリで終わる気か？　幾ら捲くりを教えたとはいえ、最終局まで和了りを我慢することはないんだぞ？」

「はい。……って言っても正直この面子の中ではキツいですが、何とか和了ってみせますよ」

「差し込み一度しか振り込まず二位と僅差というのはまずまずだが、それだけじゃあ、褒めてやれないぞ」

「同級生の前で何時もみたいに撫でられても困るだけだから別に……はい、分かりました。頑張りますから睨まないで下さい」

思わず会話を楽しんでしまったが、京太郎の中の炎は変わらず健在。それを確認できただけで、靖子にとっては十分である。

最後まで気持ちが死ななければ、捲くる可能性は消えないのだ。それを教えずとも知っていた優秀な弟子に、送る言葉はさほどない。

靖子はただ可愛らしいその反応の一つ一つを愛で、京太郎の格好いいところを期待する。彼と共にあれる悦びから、嫉妬なのか入り混じってよく分からない強い感情の篭った二対の視線は努めずとも無視できた。
「咲、それロンだ。タンヤオ、七対子、ドラドラ。八千点」
「はい……」
そして、愛弟子は見事に言を叶え、そして咲と和の二人を下すことまで成功する。点数的には靖子の一人浮き。しかし、その下に京太郎が付いてきてくれたことが嬉しく、彼女の挑発的な笑みは満面のものとなった。
「ふふ。私の勝ち、だな。夏が終わるまで、と言ったが……しかしこれだと個人戦はともかく団体戦だと夏のインターハイも県予選で終わってしまいそうだな」
「そんなこと……」
「いや、客観的にみて、非常に厳しいと言わざるを得ない。天江衣率いる龍門渕高校。あのチームは強い。何より衣は群を抜いている。京太郎なら、分かるだろう？」
「まあ、そうですね……龍門渕、特に衣さんにはちょっと俺じゃあ敵わないしなぁ……」
「京ちゃん、その衣さんに会ったことあるの？」
「まあ、靖子さんの縁で、ちょっとな」
咲の問いに応えながら、京太郎はあの日の闘牌を思い出す。支配と蹂躙。衣と靖子の対決に巻き込まれた彼が和了れたのは一度、千点ばかり。
その奪った千点棒一本が衣と周囲の見る目を変えさせたという自覚はあるが、しかしそれっぽっちの傷跡しか残せなかったという無念は未だに京太郎の胸の中にある。
自分の力量は恐らくは咲たちと同じくらい。ならば、確かに今彼女達が戦えば勝てないだろうと京太郎は思う。しかし、それでもまだ県予選には時間があった。
己が力を高めるのにそれほど時間は必要としていない。ならば、と

京太郎は希望を持って言葉を紡ぐ。
「でも、まだ時間があるし、咲や和ならひょっとして……」
「京太郎。県予選の大将戦は、満月の夜の辺りに行われるんだよ」
「ああ、それは……ちょっとヤバいな。衣さんが本気を出せるシチュエーションじゃないか」
衣と出会った日、一度きりの半荘。夜半に行われたそれが、どれだけ彼女の強さを京太郎に深く刻んだことか。
正しくオカルトの塊のような、牌に愛された子。それが衣である。
「京太郎くん……その人に私達では勝てない、と？」
「いや……なんて言ったらいいか……って、うわ、靖子さん、頭撫でないで下さいよ」
「よしよし。こういうのは、はっきりした方がいいぞ京太郎。言えないなら私が代わりに伝えてあげようか。――天江衣は私に及びかねない力を持っている。とてもじゃないが、今のお前たちでは勝てないよ」
「っ、そう、ですか……」
「……でも、あの時靖子さん勝ちましたよね」
「最後に捲くるのが上手く行かなければ、私が負けていたよ」
京太郎の頭を抱えながら、靖子は少し物憂げに語る。実際、掛け値なしに衣の全力で向かわれたために、炎の力を借りても僅差だったのだ。
気楽に戦えた今回なんて、その時のプレッシャーからすれば及びもつかないもの。靖子にとって、最早二人は敵ではない。見るべきところはそれぞれにあるが、それだけである。
自分のものを狙われていたからとはいえ、大人気なく威圧してしまったのが今や恥ずかしく思えてしまうくらいだった。
「勝つよ」
しかし、一言。それを皮切りに靖子のそんな考えが覆される程の圧が周囲に振りまかれていった。

その中心にいるのは咲。眼光灯しらせ、感情のままに魔物の気配を発させる彼女を、ここで初めて靖子は直視する。
「強くなって、その人にも勝つ。立ちふさがるもの皆倒して……貴女にも勝つ！」
その一言に篭められた思いはどれ程か。気炎を上げる咲は瞳から焔溢れさせて、普段の小動物のような姿は何処へ行ったのか、今や恐るべき魔物として靖子の前にて立ち上がる。
「ふふ。楽しみにしているよ」
そういう手合いに慣れている筈の京太郎すら竦ませる程の圧力を、しかし笑い流して、靖子はそう答えた。

「まあ、久との約束はこのぐらいで守れただろうかね」
カツ丼を頂いてから黙って支払いをし、三人を置いて先に帰った靖子は自宅のアパートの中でそう独り言ちる。一人暮らしの彼女の部屋は、衣装と同じくパンキッシュな内装に、可愛らしいぬいぐるみが目立つ。
そんな部屋の端にある古びた麻雀の本で埋め尽くされた本棚に近寄って、その上にあるものを靖子は手に取った。
「だが、果たしてあの二人との約束を私は守れるのかどうか。夏の終わりまで、か。自制できるといいのだけれど」
また一言口にした靖子の手元でジャラリと鎖の擦れる音がする。
その根本、パンク風ですらない、まるで大型犬の首に取り付けるためのもののようなシンプルで大きい首輪を手にしながら、靖子は一人衝動と戦っていた。

第八話　お姉ちゃんだから

津山睦月と須賀京太郎は幼馴染だった。異性とはいえ一つ年上のご近所さん。親同士の仲がよくあれば、自然と共にある時間は増えていく。

睦月の兄とは年が離れすぎていたためか、それほど構ってもらわれることもなくて。京太郎が幼稚園に通っていた頃、まだカピバラの飼育をしていなかった分子供には広過ぎるくらいの須賀家の中で、二人はよく遊んだ。

しかし、コレクター気質で見た目ほど運動が得意ではない睦月と、むしろ身体を動かしていないと気が漫ろになってしまう程に元気の塊であった京太郎の趣味が合う事は中々ない。

そうであるなら、どちらかが片方の意見に沿わせるか、或いは一緒に遊ぶのを止めるのが自然なことであるだろう。

だが果たして、何時も京太郎が渋々睦月のままごと、お姫様ごっこに付き合うことになるのである。それは、彼が一人を嫌がる彼女の泣き顔を嫌ったがために。

普通ならば、睦月が姉貴分として年下の京太郎を引っ張るのだろう。だが、彼女は少し内気で泣き虫で、年長者の自覚なんてろくに持ってはいなかった。

そのため幼い睦月は、一人は嫌と泣いて、京太郎の後をくっ付いて回ったのである。それは、遠くから彼女を見ていた兄が少し心配に思ってしまうくらいに。

やがて、京太郎がこの幼き先輩の面倒を見ていく内にその表情が刷り込まれて、誰かが孤独になっているときに、彼女の泣き顔が浮かび、そのためにその孤人に干渉したくなるようになっていくのだ。

この時の睦月のわがままが巡り巡って、幾人もの心を救うことになるとは知らず。ただ、幼き二人は小さい世界にて共にあることを当然のこととしていた。

「ぐす。きょーたろー、きょーたろー」

「なかないでよ。むつきおねえちゃん」
しかし、時が経てば変わるものもあった。京太郎が幼稚園を卒業したその年、定年を迎えた祖父母の老いや仕事の都合も併せ、津山家が転居を判断する、という二人にとっては大きなことが起きる。
同じ県内とはいえ、子供の足ではとても気楽に会うことなど出来なくなるということを知ってから、睦月は延々と泣いて京太郎から離れなくなった。
それは困るが、大好きな睦月お姉ちゃんのためとあれば、胸を貸すことを厭うことなど有り得ない。京太郎も悲しくはあったが、それでも笑顔で別れたいと思っていたがために、彼は最後までぐっと我慢をしていた。
歪んだ笑顔からそれを察して笑んで、兄貴分は今更になって二人に時間を裂かなかったことを少し後悔しながら、そっと彼女と彼を引き離す。
「じゃあな、京太郎。ほら、睦月、行くぞ」
「う、うん……」
「さよなら、みんなー！　むつきおねえちゃーん、またあおうね！」
「うぅ、きょーたろー！」
桜散る中で、望まずとも二人は別れる。求め合っている心は同じであろうと、方や泣き顔、方や笑顔で。春風が目に塵を運んできたりもしたが、それでも京太郎は最後まで涙することなく車に乗って去っていく幼馴染の姿をその目に焼き付けていた。
それが男の子の強がりであることを理解していた睦月の母親は、上を向いて涙ぐんでいる兄を見てから、後部座席から身を乗り出し、泣きながら届かぬ手を伸ばす妹に対して、声をかける。
「京太郎君は最後まで泣かなかったわね……強い子。睦月はお姉ちゃんなんだから、これからはしっかりとしないと駄目よ？」
「ぐす。しっかりしていたら、きょうたろーとまたあえる？」
「そうね。きっとまた会えるわ」
「そうなんだ……ならわたし、しっかりする」
「ふふ。三日坊主にならないといいけれど」

しっかりする。母親の予想とは異なり、睦月が放ったその一言は、彼女の内に深く刻まれることとなった。
自分が立派になれば、京太郎が近づく。己の内にそんな考えを染み込ませた睦月は、次第に泣き虫から脱却し、そして自立心を持つことで大いに変わっていく。
「睦月お姉ちゃん、俺と外で遊ぶことに反対しないの？」
「うむ。だって、私は京太郎のお姉ちゃんだからな」
「そ、そうなんだ……」
兄を手本に、少し男勝りに以前と違えて。
その成長ぶりは、年何回かしか会えない京太郎が驚くほどで。思わず彼がべったりと付きまとわれていた以前を思い出して、寂しさを覚えてしまったくらいだった。
「カード麻雀？」
「そうだ。むっきーもやってみるかー？」
そして、睦月は京太郎より先に麻雀に触れ。
「むつきちゃん、かー。いい名前だねっ☆」
彼より先に、プロに見初められたのだった。
その間もその後も、京太郎のことが一番に好きな、そのままに。

やわらかな春の日差しによって空気まで蕩けているような、そんな過ごしやすさを感じながら、京太郎はバス停にて先んじて、あと五分も経たずに訪れるだろう誰かを待っていた。
思わず、あくびを一つ。かみ殺せなかったそれに京太郎は弛みを感じながらも、休みの今に気を引き締めてかかるのも良くはないとも考える。ましてや、相手が相手。
殆ど身内の姉貴分。そんな彼女が久しぶりに来るというだけのことに一々緊張していてはおかしいだろう。
「それにしても、俺には部長の課題なし、っていうのはなぁ。咲達は随分頑張っているみたいだから気が引けるんだけれど……まあ、それで休まないというのも馬鹿らしいことだし、今日ぐらいはゆっくりする

か」
　しかし、今の気の緩みが、県予選の特訓、個々に出された課題をクリアするために張り詰めた雰囲気を醸し出していた部の面々のことを思うと、京太郎には怠惰そのものにすら感じられていた。
　とはいえ、言葉の通りせっかくの休みに要らぬ気を揉んで疲れるのは阿呆らしい。
　鬼気迫る表情でパソコンに向かってネット麻雀に勤しんでいた咲や、機械の様にツモ切り動作を繰り返していた和等には悪いが、今日の再会も麻雀に匹敵するくらいに京太郎にとっては大事である。
　ちなみに、最近休みに何をするかよく聞いてくる咲に包み隠さず予定を話したところ、睦月先輩なら大丈夫だね、と何故か笑顔で言われる羽目に。京太郎に真意を理解することはできなかったが、元々幼馴染に会うのは誰に憚ることでもない。
　お前に管理されるいわれはないぞ、と京太郎は咲の額にでこぴんをしたら、それを見ていた優希に馬鹿ップルだじぇ、と言われ、そして和にあれは友人の範囲内での親しさの顕れですねと評されたりしていた。
　そんなこんなを思い出していたら、目の前にバスが停車した。開いた扉から真っ先に出てきたのは、髪を後ろで一つに束ねた凛とした美人。その顔が自分のために柔和に変わったことを京太郎は喜ぶ。
「京太郎！」
「久しぶり、睦月姉さん、っと」
　飛びついてきた少女をそれなりに鍛えてある身体で受け止めることで、その華奢さを認めつつ、京太郎は柔らかな感触から確かな成長ぶりも感じ取る。
　なに睦月姉さんに異性を感じているんだと、思わず緩みそうな頬を引き締めてから京太郎が彼女を降ろすと、視線が集まっていることに気付く。
　バス停から追うように降りてきた女性達四人が、自分等をそれぞれ驚きも顕にこちらを見つめているのに、居心地の悪さを感じた京太郎は、満面の笑みを見せる睦月に質問をした。

「睦月姉さん。あの人達は、誰なんだ？」
「ああ……あの人達はただの、お邪魔虫だ」
「ワハハ。お邪魔虫とは酷いなー」
「私が京太郎に会うことを知ったからって、こっそり後をつけて来た人達なんて知りません。全く……皆が慌ててバスに乗って来なければ気付きませんでしたよ。それにしても、加治木先輩まで一緒しているとは思いませんでした」
「すまん、津山。蒲原がそこの、須賀君とやらをひと目見てみたいと言ってきかなくてな。そこにモモが乗ってしまってはどうしようもない。せめて蒲原達が粗相をしないように付いていく他になかった」
「はぁ。やっぱり加治木先輩は貧乏くじを引かされていただけですか……」
バス停前で塊になっていたのは、女子四人。苦笑いを見せながら、睦月はその面々を紹介する。
まず挙げた笑顔が似合うどこか大らかそうな女性は蒲原智美というそうで、現在運転免許所得に邁進中らしい。
そして、次に京太郎に睦月が教えたのは、どこか堅そうな女の人。加治木ゆみという名前で、彼女も部の先輩と聞いたために、なるほどこの人が部長なのかと勝手に彼は確信する。実際は智美が部長なのであるが、その間違いは当分正されることはなかった。
あと残り二人という段になって、京太郎は視線を下げないように苦労することとなる。何故なら、後の二人は随分と彼好みの体型をしていたのだから。
何時もより尚気を遣ったその態度は和にあまり女性の胸元を見るのは感心しませんよ、と釘を刺されていたのを思い出してのことだった。その後私は別に嫌ではないのですが、と言われたのに上手く答えられなかった記憶がまだ新しかったために。
「次は、私の同級生の妹尾佳織。麻雀初心者で目下勉強中だ。そして……あと一人は……」
「ん？　睦月姉さん、何キョロキョロしてるんだ？　残ったのはこの人だけだろう？」

「なっ」
　その驚きの声は誰があげたものだろうか。最低でも、京太郎と睦月ではなかった。彼にとっては当たり前のこと。そして、彼女にとってはどんな特異があろうとも彼のことを受け入れているために。
　反して、京太郎が平手で指し示した彼女は、この場の誰よりも驚いていた。
「むっちゃん先輩、この人私のこと見えているっすよ！」
「それがどうしたんだ？」
「いや、だって……私ステルス状態だったんすけど……」
「京太郎なんだ、モモの姿くらい見えていてもおかしくない」
「むっきーは相変わらずの京太郎びいきだなー」
　ワハハと笑う智美の言葉にお姉ちゃんだから当然です、と返す睦月を他所に、京太郎と彼の手が未だ向けられているショートボブの少女、東横桃子は混乱する。
　京太郎は彼女のステルスという言葉が理解できず、桃子は自分の特異体質が通用しない相手に初めて出会ったがために対応に困って。
　そう、桃子は人に気付かれにくい。それこそ騒がなければ隣にいても見つかることすらない、という程の影の薄さを持っていた。そしてそれはただの隠形ではなく、日常生活に支障をきたす程の異能だったのだ。
　意図して隠れて脅かそうとしていた今に見つけられることなんて、桃子にとってあり得ることではない。正しく驚天動地の事態であった。
「桃子さんのことを気づけるって凄いね。私なんて、今日智美ちゃんに連れてこられて紹介されるまで、部室で一緒にいても気付かなかったのに」
「えっと、妹尾さん。彼女はそんなに……っていうことは能力か何かが関係しているのか……」
「私が見えてるんすよね。なら、見えないことが分からないはずなのに……こんな信じがたいこと、理解してくれるっすか？」
「まあ……色々とおかしい人知ってるからなぁ……ハギヨシさんなん

て技術で忍んでいるみたいだけれど、近くに居る筈なのに見えなくなるからな。それと比べたら、能力で見えないなんてそんなにおかしなことではない、と思うぞ？」
俺も色々と麻痺しているのかな、とメガネと自分の同色の髪色が目立つ佳織と、俯き表情を前髪で隠してしまった桃子等の豊かな胸元から努めて目を逸らす京太郎は、麻雀に関わってからこの方世の不思議とまで縁を持ってしまったことを遅まきながら解す。
京太郎が糸を結んできた摩訶不思議の一端の少女は、急に顔を上げたかと思うと、大きく笑った。
「あはは。なんだか気になって付いて来てみて正解だったっす！　私は東横桃子っすよ。須賀君は面白い人っすね！」
「桃子さんか。よろしく」
「同じ一年同士、呼び捨てでいいっす！」
「分かった。なら、俺も京太郎でいいぞ」
「な、なんか男子を下の名前で呼び捨てするのはハードル高い気がするっすね……京太郎君、で勘弁して欲しいっす」
久方ぶりの同年代の異性とのまともな付き合いをするのがどこか恥ずかしく、桃子は思わず隠れたくなったがしかし目の前の相手にそれが通じることはない。
目と目をきちんと合わせてくれる男の子に、思わずその端正な顔つきをまじまじと見つめてしまい、一体全体好みのタイプであることを自覚し、桃子は顔を朱くした。
そんな二人に置いていかれたその他四人。智美と佳織は暢気に、良かったと語り合う。
だが、ゆみはせめぎ合う内心が出たかのように複雑な表情をして、京太郎達を観察していた。それをちらりと見た睦月はそれを嫌気とみて質問する。
「加治木先輩、モモの関心を奪われて、ちょっと不機嫌ですか？」
「いや……ちょっと違うな。私にべったりだったモモが誰かに興味を持つのはいいんだが……それに、見つけられる相手が出来たのも喜ばしいことだが……それが津山の想い人であるのが拙いと思えて、な」

「なんだ、そんなことですか」
ゆみの憂慮は見当違い。それを一番良く知っているのは睦月である。安心させるためにも、硬い表情を緩めて、彼女は言う。
「一番に好きな人を好きになってくれる人が増えたことなんて、お姉ちゃんとしてはただ嬉しいばかりですよ」
モモは変な虫ではないと知っていますし、と繋げて睦月は笑った。

場所は変わって京太郎の自宅。彼の両親に挨拶をし、カピバラを撫で可愛がった一同は、リビングにて麻雀マットを広げて学校違えども同じ麻雀部として鉾を交えていた。
ただ、半荘終わって、相手の鉾が少し痛すぎたためかテーブルに伏してしまった物も居る。それは経験を積ませるためにもと、優先的に卓に着かせてもらった初心者の佳織であった。
「うぅ……皆強いよお」
「いや、妹尾さん、先々局なんて一歩間違えれば役満和了っていたじゃないですか。初心者と聞いていますが、運の太さは俺なんかよりずっと強いものがありますよ」
「鳴いてズラしてツモらせず、その役満を対々和三暗刻に落とさせたのは誰だったかなー」
「まあ、俺ですが……って、全部が俺のせいじゃないですよ」
「うぅー」
唸って涙目で見つめてくる佳織に対して、京太郎は困る。麻雀で手を抜くというのは彼にとって禁忌に近いことであり、だから惜しげもなくその才能を駆使して初心者相手にも全力で当たった。
それは、ｒｏｏｆ―ｔｏｐで受けた過去の洗礼の覚えもさることながら、師の教えもあり、更には京太郎本人の性格もあってのこと。役満気配を感じ取った京太郎が、鳴いて佳織がツモ和了ることを防いだのは間違いない。
だが、他家へと渡った当たり牌がその後溢れたのを喜んで、四暗刻すら判らない初心者の佳織が役満を知らずに捨ててロン和了りした

ことの責任まで負わされてはたまらなかった。
　困る京太郎を見て、思案していたゆみは納得した様子になってから口を開く。
「やはり先の鳴きは狙ってやっていたのか……雀頭の筈の一つの対子をあそこでポンするのは、意図がなければおかしいとは思っていたが……いや、後ろから見ていたから蒲原と私には狙いと効果が分かるが、俯瞰せず直感のみであれをやってのけるとは」
「それどころか、半荘一回終えて、一度もロン和了りされていないぞ。ダマに取っていたモモの当たり牌をどうやって判断して避けたんだろうなー。私なら臭いで何となく分かるかもしれないが」
「臭いで分かるんですか……まあ、俺の場合靖子さん、師匠に感覚をここまでかというくらいに磨かされましたからね。外れたら手痛く思うだろうけれども、それでも感性を信じなければお前は絶対に勝てない、とよく言われました」
「出来ればその感性の鍛え方を教授願いたいものだが……流石にそれは無理かな？」
「あはは……教えたくても、ちょっと直ぐに用意説明が出来るものではありませんね。おまけに何か、適正みたいなものもあるらしいです。それに何より師匠に黙ってろと言われていますし」
「残念だ」
「うむぅ……師匠か……」
　苦笑いする京太郎と、言ほどに残念そうでない表情を見せるゆみを見ながら、睦月は彼の言葉の中に嫌なものを見つけて、一人悩む。
　何人かはそれに気付くが、一人知らずゆるゆる笑いながら、智美は睦月に水を向ける。
「ワハハ。それにしても、やっぱりむっきーは流石にウチのエースだなー。そんな強い京太郎に稼ぎ勝つんだから」
「ステルスも京太郎君とむっちゃん先輩には最後まで及ばなかったっす。二人して当たり牌出してこないし、かおりん先輩の対々和三暗刻に振り込んじゃったから、最後満貫ツモれなかったら私最下位だったっすよ……」

「私は京太郎よりも麻雀歴が長いし、主にネットでとはいえプロの指導を受けているという条件は一緒だから……それに、お姉ちゃんだから、負けられない」
「おお、何かかっこいい」
勝ったことではなく、姉の面目を保てたことに喜びクールに薄く笑んで胸を張る睦月に、一人っ子の佳織は憧れじみた感情を抱いた。
しかし、当の睦月は内心京太郎の一番の目標となれていないこと、更には力の差が思っていたより狭かった、ということに内心少し残念な思いをしてもいる。
弟分の努力が報われる、それは嬉しいことだけれども、自分よりも随分とその割り合いが多いというのは困ったものだと睦月は思う。

睦月は、あまり師の名は公言しないように注意されているが、事実教えを受けている瑞原はやりと同じく防御と和了スピードに重点を置いた麻雀をしている。
それも、京太郎と違って感性には頼らない理詰めのもの。どれ切る問題を二人に解かせたら、大差で睦月が勝利するくらいに、彼女は学んで濃い経験を積んできていた。
ネット麻雀界隈では、のどっちと並んでむっきーの名は有名である。中学三年生のインターミドルでは上位に食い込んだことだってあった。
そんな、睦月の麻雀人生。負けばかりで辛い時期も勿論多々あって、勝てないことに折れそうになったことも一度や二度ではない。だが睦月は一度も、諦めて牌を投げるようなことはしなかったのだ。
中学一年生の時分に智美に教えられて、睦月は麻雀にはまり込む。けれども中高一貫校であり、そのどちらにも麻雀部が無かった鶴賀学園。部を立ち上げるにも、卓を立ち上げることにすら彼女は難儀した。
だがそれは、丁度同時期に弟分である京太郎がハンドボールで青春を謳歌している頃であり、睦月は負けていられない、しっかりしなければという思いで牌に触れ続け。やがてある日プロの目に留まる程

に、長じたのだった。
「しかし、それでもちょっと努力が足りなかったか。もっとしっかりしないと……」
「……津山、モモが休み時間に記念に皆で写真を撮りたいと言っているんだが……」
「あ、はい。分かりました」
少し悩んでいる間に、知らず時は過ぎていく。気づけば、皆は卓から離れて外に出ていた。ゆみに呼ばれてそれに気付いた睦月は慌てて京太郎の後を追わんとする。
睦月の独り言を聞いていたゆみは、思わずその背中に声をかけた。
「……あまり、無理をし過ぎるなよ。お前が倒れて悲しむのは家族や須賀君だけじゃない」
「すみません……約束は出来ないです」
「そうか。だが、私の言葉を忘れないでおいてくれ」
「はい」
果たして自分の言の葉は確かに受け止められたのか。ゆみは肩肘張りすぎている様子の後輩に対して不安を覚える。
睦月の想いは強すぎて少し歪んでいやしないか、そう感じ取ったのが未だゆみ一人でしかないことに、彼女はまた一つ心配を募らせた。

「これで京太郎コレクションがまた一つ増えたな……」
「睦月ちゃんにも写真送れたかなー……ってうわ、凄い。京太郎君との写真が沢山！」
「うむぅ。これはほんの一部なんだけれど」
「あはは……本当に睦月ちゃんは京太郎君が好きなんだね」
「お姉ちゃんだからな」
帰り道、バスの後部座席に皆座って適当に会話を交わす。
夕焼けが朱く全てを染める中、一時中断した後も麻雀を続けた面々は少し疲れを覚えているのだろう、大会などで何時間もの闘牌に慣れている睦月と、これ以上続けても頭が回らないようとあまり卓に着か

なかった佳織以外は一様に眠そうだ。
そんな中で、元気にお決まりの台詞を口にして自慢げにまた胸を張った睦月を、皆で撮った写真をメッセージアプリから送った佳織は微笑ましそうに見つめている。
睦月が自宅のパソコンに見られたら暢気な智美すら引いてしまう程の量のデータをこっそりと収集していることを、佳織が知り得ないのは、幸いなのだろうか。
「いい子だもんね。私も好きになっちゃった。桃子さんも気に入っているみたいだし……でも、本当に好きになっちゃうのは睦月ちゃんに悪いよね」
「そんなことはない。私は佳織が京太郎を好きになってくれるなら、嬉しい」
「……それがライクではなくラブでも？」
「勿論だ。きっと、佳織や桃子ならば京太郎を幸せにしてあげられるだろうと思うから。弟の幸せを願わないお姉ちゃんがいる筈もないだろう？」
「そうなの、かな……睦月ちゃん、自分を誤魔化していない？」
「そうか？」
迷いなく、京太郎を愛していると信じているのだろう。自分のおかしなところに気付かずに、睦月は首を傾げる。
それを口にしていいのか、少しだけ佳織は迷う。言わなければ、本当に自分と京太郎がもし結ばれたとしても睦月は笑って認めてくれるのだろうから。
だが、睦月の友達でもある佳織は、彼女に今一番必要だろう言葉を伝えることを選んだ。
「……だって、睦月ちゃん、お姉ちゃんである前に女の子でしょう？津山睦月という女の子の幸せを、睦月ちゃんは忘れてるよ」
「私の幸せ？　それは……」
睦月は自問する。すると、答えは簡単に出た。自分の幸せは一番大好きな京太郎と共にあることだ。そして、彼が幸せであることが望ましい。

だがそう、京太郎の幸せは次点であるはず。一番の望みは、彼とずっと一緒にいるということではないか。
「あれ、何か、おかしいな……」
「睦月ちゃん？」
思わず、睦月は頭を押さえた。自分がしっかり立派にお姉さんをやっていれば、京太郎との距離は近づくのではないか。頑張った成果か、確かに心の距離は前よりも近くなった。しかし、考えてみると関係は一向に幼馴染の姉弟分から変わっていない。
むしろ、睦月は姉らしく幸せを望んで誰彼関わる相手の目利きをして、充分な相手とくっつくことをよしとしていた。それは、明らかに手段を大事にしすぎた間違いだ。おかしい、笑ってしまう。

ああ、そういえば、笑っていたではないか。確かに、宮永咲は、そんな睦月を嗤っていた。

睦月は、そう一重に考えてから、再び思考を混濁させて不明にする。
「でも……私はお姉ちゃんで……しっかりしないと……」
「睦月ちゃん……大丈夫？」
自業を認められない、そんな睦月を佳織は哀れみながら見つめて、具合悪そうにしている彼女の背中を擦った。
黄昏れに包まれた紅き世界は影を深くし、次第に闇に溶けていく。バスは沈黙のまま、須賀家から離れていくばかりの帰路を進んでいった。

第九話　たべる

彼女は孤独ではなかった。何時も一人きりではなく誰かが近くに居て、笑顔泣き顔共にする。そのため日々が楽しくあったことは間違いない。

しかし、並べて同じく扱われ、同じく行動させられる、それが嫌になったのは、どうしてか。それは、純粋無垢な彼女には分からなかった。ただ、衝動のままに少女は皆から抜け出し、あえて孤独になる。

そして、遊んだのはデパートの中。誰に倣うことなく、誰に真似られることもなく。思う通りに彼女は楽しむ。独りも面白いものだと、存分に満喫したのだ。

だが、次第に一人きりの寂しさをも味わうようになった。好きな皆を探そうと何処にも居ない。それは酷くつまらないことで。知らず知らずの内に、彼女の眦は湿潤していった。

「大丈夫？　誰かと逸れたのかな？」

そんな彼女を見咎めてくれた人。高い目線を低く合わせて、そして怖がらせないように柔らかく笑んでくれた彼。

後で聞いた名前は須賀京太郎。大きくて格好良くて、何より優しい。そんな彼と出会えたことが嬉しくて、彼女は一緒の筈だった皆とそれを共有する。

しかし、今一つその気持ちを同じくすることは出来なかった。幾ら語っても、彼女ほど二人に熱が点ることもなく。やがて、少女は気付くのである。

ああ、この気持ちは私だけのものなのだ、と。だからその初恋を大切に、彼女は今日も京太郎を想うのである。その深みに周囲の誰も気付くことなく。

風越女子高校麻雀部は長野県内随一の強豪として有名である。

昨年龍門渕高校に敗れたという瑕疵が広く認められていても尚、全

国大会常連校としての認識変わらず人気に溢れており、部員数八十を越える大所帯は県下に類を見ない程のものだった。
　そんな風越麻雀部の目下の目標は昨年覇者の龍門渕に団体戦でリベンジを果たすこと。そのための闘牌には各々熱が入っており、三年生でキャプテンの福路美穂子の自らの練習時間を削ってでも行う献身もあって皆の士気高いものだった。
「だが、それだけじゃあ足りねえ……」
　外が宵闇に覆われる中、自動麻雀卓の数々によってどこか狭くすら感じられるがその実広く取られた部室の中にて釣り目をキツくし、ロングの金髪を苛立たしげに掻きあげながら、部のＯＧでコーチでもある、久保貴子は独り呟く。
　その手には、校内ランキングや牌譜、そして対戦相手毎の得点の出入りが一目で分かるように纏められたグラフ等の資料が握られている。
　最近の部員の成績を俯瞰すると、二年生が台頭著しく、そして一年でも相当に伸びてきているものが少なからず見受けられた。
　しかし、三年は並べて大して変わらず。そして、一・二年が幾ら強かろうともキャプテンでランキング一位でもある福路美穂子に敵うというようなこともなく。このままでは、美穂子一強としてチームの組み合わせを考えざるを得ないだろう。
　それこそ、龍門渕に負けた前年と同じく。
「まあ仕上がり次第だが、相手が変わらないっていうのに、正直なところ去年よりむしろ劣ってるんだよな……」
　そう、順風満帆な以前から、去年に予選敗退という逆風を受け、どれだけ奮起し皆が力を上げるか貴子は多少なりとも期待していたのだが、粒揃いだった昨年と比べてむしろ今年は全体的に弱くなってしまっていた。
　貴子はあえて強く当たっているが、しかし彼女等が強豪風越麻雀部として恥ずべき腕前であるという訳では決してない。比較対象が悪いといえばそうだった。
　風越麻雀部の念願である全国制覇が今年こそ叶うのではないかと

思えた程に戦力が整っていた去年。そしてそんな彼女達をすら軽々と上回って行った龍門渕。それと比べたら、今の麻雀部の面々は何と小粒なことだろうか。

また悪いのは、去年全員が一年だったために、現在は二年生で龍門渕のメンバーが揃って健在であることだろう。もし彼女等が去年よりも腕前を上げていたとすると、このままでは勝ち目など殆どないため、また全国行きを逃す事に成りかねなく。

自らが手をこまねいていれば、その未来が訪れる事は間違いないために、貴子も四の五の言っていられなくなっていた。

「仕方ねえ。何もしないであいつ等をむざむざ負けさせちまうこともないからな」

教導時には、優しさを滅多に見せずに鬼コーチとして部のメンバーの育成に当たっていたが、その実貴子は余所の誰よりも一人一人を想っていて、何よりも彼女達の努力を認めていたのだ。

教え子の奔走が成果として誰からも認められるために、コネクションを使ってより良い指導者を皆に当てることだって、少し自身の力不足が痛感されるが、ためらうようなことではないと貴子は割り切る。

そして、貴子はスマートフォンをタッチして、今一番の成長株とされるプロ雀士、藤田靖子へと連絡を取ったのだった。

「ど、どうして雀荘に藤田プロと一緒に、須賀が居るんだし！」

「そういえば、華菜さんって風越の麻雀部でしたっけ……」

「質問の答えになってないし！　須賀って藤田プロの関係者なのか？

結構付き合い長いのに、あたし一度も聞いていない……ひっ」

「池田ァ！　藤田プロの前で恥かかせるんじゃねえ、大人しくしてろ！」

「は、はいぃ……」

翌、日曜日。花曇り、僅かにどんよりとした空気を引き裂くように、大声が続いて響いた。

怒号の前に響いた声の主は池田華菜という少女のものである。彼

女は風越麻雀部の団体戦にて一年生の時から大将を任されていた部員であり、今回修行のチャンスとして靖子の弟子として当然のように居合わせている京太郎とは、既知の間柄だった。
　そんな様子は傍からも伺えたが、だからといって、目上の前での無礼を黙認できるものではない。礼節を意外と気にする池田にしては珍しいと思いながらも、貴子は分かりやすく激した。
「その体育会系な指導、相変わらずみたいだな」
「藤田プロもお変わりなく……という訳ではないですね。リーグでの躍進、拝見させていただいています。そして、その少年が電話で話していたお弟子さん、ですか？」
「まあそうだ。勉強させるためにも今日は同席させてもらうが……君達は構わないかな？」
　コーチと仲良さそうに話していたプロの瞳が自分らに向く。そのことに一瞬緊張する風越の選抜メンバーらであったが、一人少しも臆せず視線を交錯させる者もあった。
　片方だけ開かれた茶色の瞳は、自信と許容を大いに湛えている。美穂子は両手を顔の前で閉じ合わせ、嬉しそうに笑った。
「ええ、藤田プロのお弟子さんと同卓出来るなんて、光栄です」
　つられるようにして、皆、頷く。キャプテンの彼女の言うことなら倣うのが当たり前ということもあるが、そもそもこの場において靖子の意向を否定できる者などいない。
　皆、内心男子でどれだけの腕前を持っているのか半信半疑ではあったが、認めざるを得なかった。だが、そんな中、再び華菜は京太郎に突っかかっていく。
「キャプテンが言うのなら……でも須賀、お前ってまともに打てるのかー？」
「まあ、俺はまともに打つ、っていうタイプではないですけれど……師匠の面目を潰さない程度には頑張ろうと思っています」
「ちゃんと打てよ、とは思うけれどその意気はよし、って感じだし……うわっ！」
　何が気に食わないのか、或いは何を気に入っているのか、先の言い

つけを守らず華菜は京太郎に気安く当たる。教育充分、自身が下に置かれているような場では、常に猫を被ったかのように大人しくなる彼女にとって、これは本当に珍しいこと。
溜息を禁じられずに、手近な位置にある頭を鷲掴みにして貴子は華菜をこちらへと向かせた。
「はぁ。池田ァ……どうしたってんだ。前に出るなって、さっき言ったよなぁ……」
「あ……す、すみません、コーチ！」
「まあ、いいじゃないか。最近男子麻雀のレベルは落ちているからな、その池田とやらが不安に思うのも仕方ない。――――だがしかし、私の京太郎がそこら辺の連中と同じだとは思うなよ？」
その言葉が発された途端、一様に強い風が通ったような覚えを感じる。その啖呵に篭められた思いは、存外威圧感というものを受け取る能力に欠けている華菜以外の全ての人間に感じ取れた。
プロの圧力を風越メンバーの若干一名を除いて影響を受け恐れている中、達者であると評されている当の京太郎はどこ吹く風と、苦笑いをする。
「あんまりハードル上げないで下さいよ。ただでさえ慣れない場所、慣れない相手ということで緊張しているのに」
「まあ、大丈夫だろう。この中でお前の相手になるのは精々二人くらいだ」
「……それは流石に聞き捨てなりませんね。こいつらの殆どが、力不足だと？」
旧知の仲とはいえ、それは認められないと貴子は眉をひそめて靖子を見つめた。顔に険が出やすいために、彼女は意図して抑えているのだが、それでも怒気を感じさせる表情となったコーチに周囲は僅かに息を呑む。
だが、むしろ靖子はその贔屓の気持ちを引き出せたのをよしとして、笑んだ。好んで嫌われ者をやっている物好きから、悪役を取り上げてしまうのは、バランスというものを考えていないだろう貴子のためでもある。

そして、後はせっかく来てもらった風越の面々と京太郎のために、直ぐ後ろに空いた自動雀卓を靖子は指し示した。
「まあ、それは直ぐに証明してみせよう。京太郎に、池田と、そこのキャプテンに……私も入ろうか。それほど時間は要らない、半荘一度で充分だろう。他はちょっと後ろで勉強してもらおうか」
促す靖子に、皆は従う。しかし、その言に疑問に思うものも多々あった。
通常ならば、半荘一回程度でそうそう実力が発揮されるものではない。その際に、余程の異能が顕にでもならなければ。しかし、男子でそんなものを持つものなどまず聞かない。
訝しげな様子の貴子の視線を受け流し、靖子は場決めのためにも先に席へと着いた。

「テンパイ」
「テンパイ」
「……テンパイ」
「ノーテンです」
三人が牌を広げ、最後の一人は裏返し。最終的な手牌の状態は、靖子、京太郎、華菜、美穂子の順に説明された。
美穂子が皆に千点棒を配る間に、靖子と京太郎が理牌しそれぞれ晒した十三牌を見つめた華菜は、苦い顔をする。
「やっぱりバッチリ持ってるし……」
靖子が跳満をツモ和了りしたために起家の京太郎から変わって親となった東二局もこれで二本場となる。先から続く、テンパイまで持ってきていても、一向に和了れない状況。その原因が再び目の前で顕になったことで、華菜は困惑すら覚えた。
前回はリーチをしたから警戒されても仕方ないが、今回は二面待ちで、五巡目からヤミで待っていたというのに、当たり牌が出てこなかったのは、師弟の二人と恐らくは笑顔で牌を戻している美穂子が掴んで離さなかったからだったのだ。

表情にも出していなかった筈のテンパイ気配をどうして三人揃って察せたのか。観察眼に優れた美穂子とプロが自分の手牌を見通すのは理解できる。だが、年下の男子にそれをやられたのは屈辱よりも驚きが勝った。

そして、前回に京太郎が周囲の表情を変えさせた、鳴きも何だか怪しいと華菜は思う。自分のリーチ後二巡経った時に行われたあのポン。あれにどうもツモとともに流れをズラされたような気がしてならない。

ギャラリーの反応を鑑みるに、それは一見おかしいが、しかし後で見回せば納得できるようなものだったようだ。美穂子が引いた華菜がツモる筈だった牌は場に最後まで出なかった。それも考慮すると答えは自ずと分かる。

無理に鳴いてまでツモ順をズラす理由はそう多くない。華菜は、京太郎が自分のツモ和了りを何らかの理由で察してそれを意図して邪魔したのだということを解していた。

信じがたいことだが、プロの弟子ということを考えると多少の特別があっておかしいことはない。自分が以前敗北した天江衣と比べたらそんな小手先の技術など可愛いものとすら思えた。

「面白くないな」

誰にも聞こえないように、ポツリと華菜は呟く。そんな特別な存在が、須賀京太郎という少年であることを彼女は今一つ受け入れることが出来ない。

華菜にとって、京太郎はでっかい弟。自分の下に置いて安堵するような、そんな存在だった。彼は自分の妹たちに大人気のお兄ちゃん。身近だからこそ、下に見てしまうのも自然なことなのである。

二年生にして強豪風越の部内ランキング二位。ＯＧとの練習試合ですらトップ率三十パーセントを上回るその腕前は確かなものだ。そんな華菜は、自分の実力を京太郎に見せびらかして、彼に褒めてもらおうと思っていた。

しかし、現在点棒的には多少勝っているが、いいところなどまるでなしの状況。未だ続く親番にて、京太郎の目も覚めるような実力差を

見せつけてみたいところである。
　そして、その念通じたのか、先より一巡早い四巡目。そこにて華菜はテンパイにまで辿り着く。形としてはピンフに三色同順が確定。ダマで待つのも良いだろうが、しかしどうせ避けられてしまうのであれば、リーチしても構うまい。
　そう思って千点棒を取り出し準備してから、華菜は二索を河に捨てて曲げる前に宣言をした。
「リーチ……」
「ロン。タンヤオ、ピンフ、赤一。二本場で四千五百点です」
「なっ！　……くっ、はい」
　しかし、それは京太郎の当たり牌。華菜がリー棒として使うはずだった千点棒は、支払いのために彼へと渡る。
　早い段階でのダマテンにしてやられた華菜は苦みばしった顔をしているが、反して供託棒を入れても原点に僅か届かない状況ということで京太郎は喜色よりもやる気に満ちた面構えをしていた。
　二人共に、メンタルが打牌に作用するような打ち手ではない。だが、次第に互いの表情はそのまま深まり。最終的に京太郎は靖子に届かず、華菜は誰にも及ばず最下位となった。

「はぁ。凄いですね、彼は」
「ん。そうだろ？」
　土曜の午前を、記録をとらせつつ入れ代わり立ち代わり打ちに打つことに使わせてから、部員たちに与えた休み時間。昼休みになって出前のカツ丼を食んでいる靖子の隣の椅子に座って、貴子は嘆息しながら話しかける。
　ここのは揚げがイマイチだな京太郎に作らせた方がよっぽど旨い、と呟く靖子は貴子の言葉に無関心なようでその実少し自慢気だ。それもそうだろうと、彼女は思う。男子で、全国の頂点を目指す女子の上澄みに及ぶというレベル。
　それはつまり、男子高校生では最強格といっても過言ではないのだ

から。
「切り間違いは多いですしハッキリ言って、未熟ではあります。しかし、それを補って有り余るくらいにヒキが良く、場況を察して動くのが余りに巧い。またあの鳴きずらしの正確さ、そのための対子順子が集まってくる強運は真似出来るものではありません」
「ごちそうさま。……まあ、京太郎も全部ではないとはいえ上手く自分の能力を使えているとは思うよ。そのために感性を磨かせたが、それでもアイツが自分の力に見せているものの大体は人の劣化コピーだったりするからな」
「劣化、コピー？」
　贔屓目抜きにして、貴子が連れてきたこの選抜メンバー達は全国クラスの打ち手である。その相手を十分以上に務められて大概を負かせられる、その力が下手なモノマネでしかないというのは、最早悪い冗談としか思えない。
　確かに、絶対強者たる小鍛治健夜や新進気鋭の藤田靖子らプロの闘牌と比べたら京太郎の麻雀も霞んで見えてしまうかもしれないが、それでも一般的な見地からでは十分強い。果たして彼は何の真似をしているというのか。
　鳴きで流れを操る、という辺りに龍門渕の先鋒を思い出したが、しかし彼女に京太郎が負けているとも思えない。そして、貴子が目下最大の敵手である小さな魔物のことを苦く想起し始めた時に、靖子が続けた。
「ああ、そうだ。正確には、縁という細い糸から伝わってきたものを使用しているからその全てを受けて使うことが出来ていないということなのだろう。端的に言うと、京太郎の主な能力は糸紡ぎのようなものだ。それでアイツは良縁から相手の力の影響を受け入れてヒキを良くしたり流れの把握をしたりしている」
「糸紡ぎ？　それに流れの把握はまだしもヒキは操れるもの、なのですか？」
　貴子は靖子の言葉から、カラカラと周る紡錘を思い出した。目に浮かぶのは繋がった繊維を撚り集めて糸としてその体に巻くだけの、そ

んな装置。
　目の端に映る、挑み負け続けて落ち込む華菜を、美穂子と一緒に表情豊かに慰めている京太郎は、そんな味気ないものではないだろう。だが、何となく、彼が縁を集める人間であるということには、納得できていた。
「牌に愛された子、とかみたいに私が呼んでいる造語だから少し恥ずかしいが、大体合っているだろう。まるで糸を紡ぐかのように、京太郎は深いところまで干渉した相手の力を受け取ることが出来るんだ。その逆もな。勿論か細く得るため、全てではないが」
「なるほど……完全ではないから劣化、と呼んだのですか。それでは、ヒキを良くするとは？」
「……場を支配するまで、それこそ能力といえるくらいの力を持った高校生は少ない。しかし、自分に場の流れを引き込む程度の力を持ったもの……一般にヒキが良いと呼ばれる域に居る打ち手は殊の外多かったりするんだよな。お前の所の池田って奴もその類だ。あれは大成するタイプだな……話が逸れたか。まあ、京太郎はその数少ない能力持ちの、更には魔物クラスの打ち手達と深く繋がっているから、その影響を受けて自身への流れくらい変えられるようになって、ヒキを良くすることが出来ている。後は、真似ているのが場に作用する力でその劣化だから、他家の流れも何となくは判るみたいだな」
「オカルトな話ですね。でも確かに、そう言われると腑に落ちる部分が多い……しかし、もしそうだとして、京太郎君はその能力を厭ったりはしないのですか？」
「確かに、知った時は勝つための近道へだと教えてくる感覚が他人頼りっていうことを嫌ったりはしていたな。それでも、出し入れ出来るものではない。受け入れさせるのに、私も少し苦労したよ」
　守破離の大事を知っている貴子でも、その昔力を上げるためとはいえ人真似をするというのには僅かながらも抵抗があったのだ。思春期の男子が他力本願を嫌うのはおかしくもなんともないと彼女は思う。
　しかし、京太郎は縁にて手繰れた力の一部を行使して麻雀をしてい

る。過去そこに苦手があったことは知れたが、しかし今この場で誰よりも麻雀を楽しんでいるのは彼だろう。
笑顔で勝ち負けつくことを喜んで、そしてどんな相手にも礼を持って全力で当たる。競技に真剣に成りすぎると忘れがちになるものを、京太郎は何より大事にしているようだった。
「靖子さんは何と諭したのですか？」
「それでも勝つのも負けるのも選べるんだ、とは言ったな。糸は勝手に紡がれても、結果を織るのは自分なんだと語ったら、後はただ真剣に勝負に当たるようになったよ」
愛玩を眺めるが如くに京太郎を見つめている靖子の視線を追いかけて、目を逸らしている間に何があったのか恥ずかしがる華菜を話題にして未春と仲良くしている様子の彼を貴子は認める。
確かに靖子の言葉の通りなのだろう。能力の優位があろうとも、手を抜けば負けることなんて簡単なこと。それに、勝負を楽しむに、油断や慢心、迷いは要らない。ましてや自分の生来の武器に疑問を持つなんてナンセンスである。
能力に麻雀を打たされるのではなく、自ら力を使うことを選んで勝負に挑む。それが本気で楽しむということ。受動能動、小さいようで大きな違いがそこにはある。それを師匠の言葉から知ることが出来た京太郎は幸運だろう。
「須賀君が出会ったのが藤田プロで良かったですね。感覚を言葉に出来る方はそう居ませんから」
「別に、貴子でも京太郎を導けたと思うぞ？　その場合少し、苦労しただろうけれどな」
言われ、貴子は自分がくよくよする京太郎を都度叱り飛ばす姿を頭に描く。怒声は直ぐに悩みの解決に繋がらない。けれども、無理にでも頭を下げて一時考えさせるのには一役買うだろう。
果たして京太郎は貴子の教育方針でもその力を開花させられただろうか。もし、靖子の言うとおりであるのならば苦楽を共に出来たのに違いなく、そうして犬のように笑って寄ってくる彼を撫でる自分をまで彼女は想像した。

「それも、悪くはなかったかもしれませんね」
普段なら、似合わないと唾棄すべき自分の姿。しかし、それが思ったよりも快よさそうであって。興味深そうに視線を向けてくる靖子の隣で、貴子はそう零しながら口角を上げていた。

「いたー。きょーたろーおにーちゃん！」
「えっと、緋菜ちゃんかな？」
「菜沙も城菜もきょうはいっしょのかっこうしているのによくわかったし！　やっぱりあたしたちはあかいいとでむすばれているんだねー！」
「いや、二人共居ないし、ここまで懐いてくれているのは緋菜ちゃんくらいだからね。それと、どうしてここに来たのかな？　華菜さんから聞いていたのかい？」
「んー。なんとなく！」
入り口辺りから騒動の気配がしたと思えば、そこから抜け出てきたのは、少女一人。自分の年齢を教えるのに片手で三つと見せるのが好きな彼女は池田緋菜。先ほどまで負けてしょげた後に褒められ照れていた池田華菜の三つ子の妹の内の一人である。
唐突な幼子の乱入に、店の人もお客も風越の面々も驚き慌てるが、その間を縫って緋菜は京太郎の下へと辿り着いて、足元にて抱きつく。
小さな小さな包容を受け止めて、よじ登られながらも京太郎は緋菜に優しく幾つか尋ねた。返ってきたその答えは幼さゆえに不確かで。しかしそれは、実は誰にとっても都合のいいことだったのだ。
少女がそれこそ赤い糸とも取れるくらいに強く結ばれた縁を感じて、危なげに近所の雀荘へとやって来たのだということを知るのに、今の京太郎は少しばかり覚悟が足りていなかったから。
「緋菜、どうやって来たんだ！　菜沙と城菜はどこなんだし！」
「おねーちゃん！　おにーちゃんがちかくにきたってこともわからない、あのふたりとおかーさんはおうちにおいてきたし！」

「……おい、池田。やっぱりそれってお前の妹なのか？」
「コーチ。は、はい……どうしてかあたしにも分からないんですけれど、一人でここまで来ちゃったみたいです」
「……はぁ。仕方ない。私が連絡を入れておく。家に帰るまで、お前が確り面倒みるんだぞ？」
「わ、分かりました！」
　京太郎の胸元にへばり付く緋菜を問題にして、華菜と貴子は何時もよりも気安めのコミュニケーションを取る。それも当然のことだろうか。教授している麻雀のことでもないし、そもそもわざわざ幼児の前で怒声を張ることもないのだから。
　貴子は緋菜と京太郎の親子のような姿を見て、ついその隣に自分を置く想像をしてしまったが、頭を振ってそれを遠ざけ、連絡のためにも携帯電話を取り出した。
　忙しなくなった貴子を横目に、可愛い物好きな靖子は小さく愛らしい緋菜に近寄り撫でて、思わず笑んだ。しかし、果たして京太郎の胸の内の少女はその愛撫を嫌う。
「なんだなんだ。これは随分と可愛らしい池田だな。緋菜ちゃんっていうのか？」
「さわるなだし！」
「おっと、これは嫌われたな……どうして、そんなに嫌がるんだい？」
「だって……おばさん、おにーちゃんをみるめがこわいし。てれびのらいおんさんとおなじだから……」
「……はは、京太郎は人気だな。後、おばさんじゃなくて、お姉さんだぞ？」
「おばさんはおばさんだし」
「こら、緋菜！　すみません、藤田プロ。後で言って聞かせますので……」
「いや、まあ正直なところそう見えるのかと落ち込むが、本音ならば仕方ないだろう。池田……お姉ちゃんの方は気にしなくていい」
「ありがとうございます」
「ふん、だし」

「はは……」
謝罪するお姉ちゃんの意思を無視してそっぽを向く緋菜に、京太郎は苦笑い。何時もは天真爛漫な姿しか見せない彼女のそんなひねた様は、むしろ可愛らしいもの。
ごしごしと自分の胸元に頭を擦り付けてくる幼児を、彼女が持つ愛情の強さを知らずに、京太郎は微笑んで認めて撫で付ける。その愛撫は、喜んで受け入れられた。
そんな二人を、靖子は変わらずライオンさんの瞳で見つめる。

「文堂もすーみんも、緋菜の面倒を見てくれてどうもありがとう……助かったし！」
半荘を戦い抜き、牌譜の検討を終えてから、華菜は緋菜が後輩と同級生と一緒に遊んでいた所へと戻る。
華菜の低頭な感謝に驚き慌てている細目の少女は文堂星夏。彼女は一年ながら校内ランキングを勢い良く駆け上がっているホープである。
そして、のんびり構えている、ちょっと太めの二年生は深堀純代。彼女は緋菜の両脇に手を入れ高い高いをして楽しませていた。
「頭を上げて下さい！　毎回全員は卓に付けませんから、余った時間緋菜ちゃんと遊ぶことで、気を張らずによく休めたくらいですよ」
「緋菜ちゃん、須賀君のことを気にしてばかりだったけれど……確かに、私も見た目は好みなんだけれどね……」
「すーみんの面食いが出たし！　まあ、須賀は悪いやつじゃないけれど……いや、妹達に悪影響を及ぼすあいつは悪人だ！」
「悪影響、って何です？」
「まだまだ恋愛は早すぎるっていうのに、緋菜達を誘惑して……」
「ゆうわく、ってなんだしー？」
「華菜の軽口の方が悪影響だと思うけれど……」
華菜が発した知らない言葉に小首を傾げる緋菜に、純代は何でもないよと言いながら、普段はいいお姉ちゃんやっているのに須賀君のこ

とが絡むと駄目だな、と思う。
純代が溜息を呑み込んでいると、急いで来た華菜に続いて一緒に卓を囲んでいた美穂子と、未春がやって来た。二人は少し、興奮気味だ。
「こんにちは、緋菜ちゃん」
「みほこおねえちゃん！」
「私も居るよー」
「みはるん！　あれ、きょーたろーおにーちゃんは？」
「ふふ。須賀君は、牌譜の読み書きに苦労しているみたい。あれほど麻雀が上手なのに、そこら辺はアンバランスね」
「そうですねー。彼が麻雀を始めて半年くらいだって聞いて、私、びっくりしちゃいました」
「えっ！　みはるん、本当に須賀ってそれだけしか麻雀やっていないの？」
「華菜ちゃん……確かにそう言っていたけれど……」
「あたし、初心者に負けたのかー。うー、自信なくすし……」
再び塞ぎ込む華菜。せっかく、さっき恥ずかしい言葉まで使って皆で気持ちを復活させたのに、と眼鏡のつるを弄くりながら未春はげんなりする。その横で、しかし美穂子は笑顔だった。
「須賀君、本当に強かったわ。彼が全国に出たら、私達も一緒出来るかしら。男女長野で全国制覇、とか出来たらいいわね。それを抜きにしてもいい子だったし、交友を結ぶ切っ掛けが出来て良かったわ」
「全国制覇か……そういえば、キャプテン、料理の話題で盛り上がっていましたね。私は華菜ちゃんのお話とかで笑わせて貰いましたけれど」
「……みはるん。そういえば全部聞こえなかったけど、アイツなんて言っていたんだー？　もしかして、言っちゃいけないって言ったあの事とか喋ったんじゃ！」
「あ、元気になった」
今泣いた烏がもう笑う、ではないが京太郎に感情をかき混ぜられて、華菜は機嫌をまた違う方に損ねる。怒った華菜は猫のように、貴子に牌譜のことを教えて貰っている京太郎を睨みつけた。

しかし、そんな様子はユーモラスで他人を和ませるところがある。目尻を下げる純代の腕の中で、緋菜は思わず身じろぐ。そして京太郎が皆の中心になったことを確認し、彼女は笑った。
「ふふ」
「あ、緋菜ちゃんが笑ってる」
「ん？　どうしたんだ、緋菜」
「きょーたろーおにーちゃんがにんきでうれしいし！」
並ぶことのない程の恋は孤独である。どうして何でそこまで。その答えはきっと、どこにもない。理解者など、何処にもいないのだ。
それでも、程度が低かろうが近くに好意を認められれば、少しは慰められた。ああ、きっとこの想いは間違っていないのだろうと、そう考えられたから。
「緋菜ちゃんはそんなにも、須賀君が好きなのね。凄いわ」
「だいすきだから、みんなそうだとうれしー」
「でも、藤田プロは駄目なんだよね。どうしてだろう……」
「らいおんさんにすきになられたらたべられちゃうし！」
「なるほど」
その言葉に、皆少しは納得する。多分、緋菜は自分と違う大人の女性を知らず恐れているのだろうと。そして、大好きなお兄ちゃんが取られてしまうことを怖がっている。
しかし、当然そんなことはなく。緋菜は同じものを持った相手を強敵として睨んでいるばかりに過ぎない。だから、次の言葉は彼女らの度肝を抜く。
「だって、あたしがおにーちゃんをたべるんだから！」
緋菜は皆の中心で、そんな爆弾発言をしたのだった。

第十話　月が綺麗です

「あ、そうそう。京太郎、明日遊びに来るんだって」
「なんだ、急な話だな国広くん。もう夜になるぞ？　少し早く教えてくれたら、歓迎の準備でもしてやれただろうに」
「……確かに、ちょっと遅いタイミング」
「はぁ……純くんも、ともきーも分かって言ってるでしょう。透華がギリギリまで渋っていたから、話が決まるのが今まで遅れたんだよ。本当だったら衣の一声を嫌がるなんてあり得ないんだけれど……」
龍門渕、それは長野県内どころか全国的に広く知られた名家の一つ。その本家の広き邸宅の一角、大きめに取られた女性更衣室にて、三人の少女が話をしていた。
話を振った、メイド服から着替えてなにやら露出過多な私服に身を包もうとしている、小さめで頬の星型タトゥーシールが似合う女子は国広一。彼女はその口から出た、龍門渕家の一人娘、龍門渕透華その人専属のメイドである。
そして、応えた二人、順番に背高で銀髪ショートカットでマニッシュな服装の井上純と、対照的に艶やかな黒い長髪を流し眼鏡が似合う見た目の沢村智紀もまた、龍門渕のメイドだった。そして、この三人は年同じくして龍門渕高校麻雀部の一員。
親しいのは自然なことで、そして元々三人はとある少女の友達となるために集められたが故に、それは必然でもあった。
一が言葉を濁したその時、カチャリとドアが開く音が響く。ドアノブを握って開けきらずに、気になる話を盗み聴いていた少女は、金髪にウサギの意匠をしたカチューシャを乗せていてまた小柄でもあったが、しかしただの可愛らしい子供の様子ではない。
見るものによれば、どこか威風すら漂わせているように映る彼女は天江衣。牌に愛された子とすら語られる、とびきりな雀士の一人であった。彼女は、一達が集められた件の目的でもある。
「とーかは衣には日取りが中々決まらないのだと口にしていたけれど

……やはりきょーたろーを嫌忌しているのは変わらないのか。きょーたろーは煙でも蛇蝎でもないのに」
「衣。いや、あれは嫌っていると言うよりも拗ねているだけ……それを本人が嫌っていると思いこんでいるからややこしいんだよね」
「自虐を随分と荒誕に拗らせたものだ。……でも、それが衣のためというのには、やはり呵責を感じる」
　衣は、ついつい表情を歪めてしまう。透華は彼女の両親亡き後引き取ってくれた龍門渕家の娘で、元々従姉妹という関係性あるがそれだけでなく、異常と排斥されがちな衣をおそらくこの世界で一番気にかけてくれた人である。
　そんな数少ない理解者である透華が、恩人である須賀京太郎のことを疎んでいるというのは衣にとって心苦しいところだ。それが、自身を巡ってのことであるならば、尚更のこと。
　救いがあるとするならば、むしろ京太郎は透華を人間的に好んでいる様子であることだろう。嫌い合っているわけではない。そのため、衣も幾ばくかの希望を持っており、明日の遊興にて二人仲良くなる、というのが彼女の理想だった。
「まあ、確かに衣も人が悪いよね。ずっと近くにいたボク達より先に、京太郎の手を取っちゃうんだから」
「それに関しては、衣が悪かった……特別な自分は皆と違うのだと捻くれて、頓馬な勘違いをしていた衣が」
「でも実際、オレらみたいに見守っているだけ、ってよりも京太郎みたいに積極的に手を伸ばした方が分かりやすくて良かったのかもしれないな」
「そうだね。私達も間違っていたから、お互い様。……ただ、彼に手を繋がれて、真っ赤になった衣の姿は見ものだった」
　智紀は反省の連なりを断ち切り、揶揄して微笑む。それは一の言葉を受けて落ち込む衣の気持ちを変えるためであり、案の定表情を変えて乗ってきた彼女を見つめて、薄い笑みは深まった。
「むっ。ともき、そんなことを言うお前がきょーたろーを一番に懸想しているだろうに」

「衣には分かるんだね。……でも、それは違う。衣の好きも、純の好きも、私の好きも、変わらないよ」
「そう、なのか？」
「重くても恋。軽くても恋。大小あったとしても、この想いが生み出す苦楽は一緒だから」
「なるほど……恋は闇と聞くが、そうでもないようだ。想い募らせていながらもともきは周囲に明るい。しかし、鴨く蝉よりも鳴かぬ蛍が身をこがすともいう。或いは、ともきは訥言敏行な君子ではないのか？」
「そんなことはないと思うけれど……でも、明日は頑張るつもり」
　ぐっと拳に力を込めてガッツポーズを取る智紀。珍しい彼女の動的な姿に、ユーモラスさを感じ取った衣はくすりと笑う。
　しかし、楽しげな二人に対して、内容が符丁合わせのような会話を横で聞いていた純は、一と共に取り残されていた。
「なんか、あいつら難しい話をしてるな……」
「言い回しだったり言葉が難解だったりするから、恋バナしているだけってちょっと分かり難いよね。後さ、京太郎を好きな人に、純くんも地味に入れられているんだけど」
「まあ、それは本当だから別にいい」
「京太郎、モテるなぁ……透華も良くも悪くも意識しているし。ホント、あの日から皆変わったよね」
「そういう国広くんは他人事みたいに構えているけれど、どうなんだ？」
「いや、どうも、ボクには色恋はまだ早いみたいだ。京太郎のことは好きだけれど、きっと皆とは違う種類のものだろうね」
「そうか。しかし、オレは誰の想いを尊重したらいいのかねぇ？」
「自分の気持ち、と言ってあげたいけど、最低限透華に恨まれないようにはしないとね」
「確かに、あいつを敵に回したくはないな」
　恋思う相手のことを語るにしては、純は気を引かせている様子。想いに急くような風ではない。それもその筈、瞳に映る恋敵達も、彼女

にとっては彼と同等以上に大切なのだから。
ぴったり一つのように、透華によって集められた龍門渕麻雀部の面々は仲が良く、だから一人を奪い合うようなことにはならないだろう。
しかし、だからこそあの日出会った彼は、誰の運命だったのか。それが、未だに彼女達には判らない。

天江衣は孤独だった。それは、両親の早世により一人親戚の家に引き取られた中で、その能力のために僅かな者以外家中の皆に疎まれたという経験、それだけによるものではない。
確かに、衣は驚く程に禁忌されている。牌に愛された子、その言葉は彼女の持つ天才性を超越した異常性の一部を指す言葉でしかない。
持ち前の豪運は元より、衣の感情に共鳴して、例えば勝手に動かぬ筈の機械が反応を起こすことすらままあって。やがて彼女の持つ超常性は次第に恐れられて、閉じこめられる。
そして、家とは名ばかりの豪勢な箱の中、衣は遊興に耽るようになる。自分の天賦を存分に暴れさせられる遊び、麻雀。感覚が導くに任せて打牌することに彼女は親しむ。相手させられている者達を自分の麻雀で恐れさせていることを知りながら。
まともに打つことを選ばず、力に振り回され続けて。暴れる力が彼女ではないのに、それを誇示し続け過ぎ。だから、衣は孤独になったのだった。
「衣様は学校でお友達が出来ないみたいで……」
「問題ナッシング！　友達の百人や千人、私が集めてみせますわ！」
故に、友達、つまりは魔物天江衣ごと受け入れてくれる人間探しに奔走していた透華は、少し間違えていたのだろう。
「県予選、全国……そして世界！　貴女と楽しく遊べる相手が――――必ず何処かに居るはずですわ！」
透華は、衣をただの独り法師の少女と見なかった。彼女は全てを呑み込み愛していたのだから、当然のことであるかもしれないのだが。

しかし、その実衣は得意（特異）を活かすことの出来る麻雀をやらない自分など誰も必要としないのだと勘違いしていたために、事態はややこしくて。

だから、孤独を許せない京太郎が、ただ一人寂しさに震える衣を見つけられたのは、僥倖だったのだろう。

「こんにちは。今日は失礼します、龍門渕さん」

「……ようこそいらっしゃいました。一日よろしくお願いします。皆はこちらですわ」

それは暦の上での春が過ぎ去り一月以上経ち、寒さも穏やかになってきた頃。優希らと出会う前の、春休みを控えたとある休日。京太郎は龍門渕家に訪れていた。

京太郎は手土産やらと請われたペットのカピバラ、カピーの写真が沢山入った紙袋を持つ手を思わず、強く握ってしまう。それは、緊張からであった。前回来たのは、夜中。そして、主に靖子の背中を追っていたために周囲をそれほど望んでもいなかった。

そのために、これほど広大でありつつ精緻さを受け取れるお屋敷に美しい庭木、歪みない真珠、上等な西洋絵画のようなそんな風景の中に自分がこれから入っていくのであると思うと、少し広いばかりの実家を持つ京太郎が気後れしてしまうのも無理はない。

「どうかしましたの？」

「あ、すみません……今行きます」

「……そうですか」

しかし、そんな小心を知らず、よそ見をしながら遅れた京太郎に、透華は注意を促した。その際に、手を引いてあげましょうか、等という冗談が思わず出そうになったが、別段相手の心和ませる必要はない筈だと意地張って半端に開いたその口は閉ざされる。

そして、そのまま黙して先導する透華の後に京太郎が続くという構図がしばらく続いた。広大な敷地内、長い道中にて彼が沈黙に苛まれなかったのは、景観の素晴らしさに拠る。

詰め込まれ、しかし華飾でない造形自然の全ては、多面から見てこそ真価を発揮するもの。ダイナミックな美しさの連続で京太郎の開いた口が乾いて来た頃に、ようやく二人は行き止まった。
「あれは離れ、ですか？」
「……これが衣のお家ですわ」
「なるほど……」
敷地の先、京太郎の言の通りにどの建物からも離されるように造られた一軒。これまでの威風すら感じる建築からするとどこか小ぢんまりとすら感じるその家は、衣の住居。
衣の孤独の一端。それがよくよく感じ取れる、閉じ込めるために特注された閂のように厳重な鍵を開けてから、二人はその中へと入る。
「どうぞ」
「失礼します……うわっ」
「きょーたろー。よく来てくれた。感無量だ！」
「衣さん、お久しぶりですね。今日はご招待、どうもありがとうございます。あれ、前回入れてもらった場所と違ってここには雀卓……ないですね？」
「前回は麻雀で遊んだが、衣とてそればかりしか遊興を知らないという訳でもない。今日はきょーたろーに万夫不当なだけでない衣を見せたいと思う」
「そうですか……それは嬉しいですね。麻雀をやっている時の迫力ある衣さんも好きですけど、普段の衣さんも気になりますし」
「にゅ。好き、気になる、か……ふふ。きょーたろーは時に乙女心をくすぐるのが上手い」
「そんなつもりはないんですけれどね……」
「むぅ」
入るなり京太郎の胸に飛び込んできた少女は、家主たる天江衣。赤いリボンのカチューシャが、京太郎の目の下で大いに揺れた。子供のように想い人に甘える彼女の天真爛漫な様子を、一らは遠くから黙って見守っている。
しかし、我が子のように想っている衣が、今ひとつ気にくわない相

手と親しくしている様を見せつけられるのは、透華にとって嬉しいことではない。また恋する瞳で流しみる少女を男が全く意識していない様子なんて、彼女には特に気に食わないものだった。
何しろ、龍門渕透華は、目立つこと、ひいては見つけられることが大好きなのだから。男の不明で鈍感な様なんて、見ていられなかった。
「こほん……衣、貴女だけでなく一達も再会を楽しみにしていたみたようですから、そのくらいで……」
「そうだな！　きょーたろー、今日は歩が少し用事で遅れているけれど、ここには純に一に智紀、ハギヨシも居るよ！」
「皆さん、衣さんにも言いましたが、ご招待、どうもありがとうございます」
「おう。久しぶりだな」
「来てくれて嬉しいよ、京太郎。でも、そんなに畏まらなくてもいいよ。もっとフレンドリーに行こう」
「そう、もっと仲良く……」
「分かりました……あ、智紀さん。ちょっと渡したいものがあります」
「何？」
紙袋の中を少し漁った京太郎は、そこから購入してそのままの様子である透明プラスティックでパッケージされた機器を取り出す。角がなく、手に収まりやすく造られているそれを、間近の衣は何だか分からず。
しかし、近寄ってきた一に純、そして差し出された智紀は判ったようで、大勢が納得の表情をしたのを確認してから、京太郎は口を開いた。
「遅くなりましたし、誕生日プレゼントにしてはどうかと思ったのですけれど……前に持っていないとチャットで仰っていたので……これです。トラックボール、っていうんでしたっけ。そのタイプのマウスです」
「おー、何だかちょっと未来的だね」
「そういえば、京太郎もネット麻雀やってるって言ってたな。機械越

しだと流れが見えないからイマイチ肌に合わなかったんだが……これは、オレもやっていた方が良かったか？」
「一も純もどいて。……ありがとう。でも、そんなに安いものではないでしょう？　大丈夫？」
「友達と電器店を見に行ったら安売りしていて……まあ、後にネットで確認したらそんなに割引されてもいなかったですけど……その時に智紀さんの顔がふと思い浮かんだんで、即決しちゃいました。誕生日、おめでとうございます」
「そう……」
　何時も感情を薄く表現する、そんな智紀が明確に笑んだ、そのことに周囲が驚きを見せる中、彼女はずいと京太郎の方へと近寄る。それは顔が彼の胸に打つかりそうな程の近距離。
　一気に恥ずかしくなった京太郎を気にせず、更に寄った智紀は、彼の背中に手を回す。そして、彼女は身体が密着するくらいに強く抱きしめたのだった。
「えっと、智紀、さん？」
「嬉しかった。これは、お礼」
　突然の抱擁を受けて戸惑う京太郎に、追い打ちとばかりに豊満なその身を智紀は押し付ける。衆人環視の状況下のやや冷たい視線、それ以上に覚える柔らかな感触。
　あまりに嬉しい触れ合いに、思わず抱きしめ返しそうになってしまったが、しかしその手が下心に動かされる前に、京太郎の耳に衣の寂しそうな声が届いた。
「むぅ……きょーたろー、衣の時とは随分と違う反応だな。やはり、衣では不足だったか？」
「い、いや。そんなことはありませんよ。今回は意外で驚いたというか何というか……智紀さん、どうもありがとうございました」
「……喜んでもらえたようで何より」
　気落ちした衣の前で、特別な応答をすることなど出来ない。ぎこちなく離された両腕を、名残惜しげにじっと見つめる智紀を知りながら、ゆっくりと退いて感謝を述べてから京太郎は人心地つく。

その間に、再び衣は京太郎のパーソナルスペースに割り込んでいく。そして、今度は右手に抱きつき身を擦り寄せた。
「衣もお礼だ！」
「ええと……何の、ですか？」
「決まっている。衣と友誼を結んでくれた、そのことに、だ」
「ああ、そのことなら、俺の方からも、お礼したいくらいですよ」
「ふふ、そうか！」
「ええ」
向けられた、太陽のように陰りない笑顔に、京太郎は思わず似通った笑みを返す。大小似合いの金色番。そんな二人には、智紀との抱擁の邪魔をしようとしていた透華ですら割って入れる気がしない。
「でも、どうして急に？」
「急じゃない。衣は何時だってお礼を考えていた。それくらい、きょーたろーが友達になってくれたことは嬉しかったんだ！」
自然離れた大勢に認められながら、笑顔で衣は言い切った。
衣は恋する瞳のままに、互いに結ばれた縁の形が友情となっていることに喜びを見せている。心の内ではその先を求めておきながら、臆病にも彼女は現状に満足したがっていた。
それは、幸せは頂上でいとも容易く壊れるものだという過去のトラウマからの間違った確信に依っている。だからこそ、先んじようとする智紀の邪魔をしたのだろう。明らかに衣は、中途半端な今を守ろうとしていた。思慮浅くはない智紀はそれを解す。
横入りに対する怒りを危惧したのか、気遣わしげな一の視線を、首を振って拒否してから智紀は金髪おそろいの兄妹のような二人を目映げに見つめる。愛すべき衣のちょっとした勝手。それくらい飲み込めずに、友達なんてやれはしない。
「昨日はああ言っていたのに……衣はずるいね」
しかし、奪われたものが胸中を占めるその割合の大きさから、呟きが口から零れるのを止めることまでは出来なかったが。

「やっぱり、結局はコレに落ち着くんだな」
「そうですね……身体動かすのも好きですし、他のテーブルゲームも嫌いじゃないですけれど、やっぱり麻雀をやりたくなってしまいますね」
「……ハギヨシと貴方以外は全員麻雀部ですし、それも当然といえばそうですわ」
京太郎が訪れたのは空が白む頃、という程でもないが朝方ではあった。暖房なしでは少し肌寒く輝く日差しがありがたい、そんな時間帯。
昼時までたっぷり三時間はある、その自由時間を龍門渕メンバーと京太郎は外で遊ぶことに使った。
やはり衣が端を発し、そして優秀な執事であるハギヨシが準備を済ませていたグラブとボールを使って始まったのは、キャッチボールに軽い野球の練習。
最近、皆がはまっているのだという運動に参加した京太郎は八面六臂の大活躍をした。その肩の良さは運動神経に自信のある男勝りの純をすら驚かせ、ノックではファインプレーを連続する。
年下が目立つことを嫌った透華が大人気なくノッカーにハギヨシという規格外を起用しても、京太郎は食らいついてきた。むしろ、男二人熱い会話を交わしながら、用意されていた運動着を泥んこにしてまで苦戦を楽しむ始末。
汗に汚れた京太郎は彼女らにとって眼福でもあったようだが、交じることの出来ない女性陣からブーイングが出て運動は中止。着替えてから後は純が用意したのだという見事な弁当を皆で食べてから、衣が飼っているカエルに京太郎が餌をあげたりなどして。
そうして午後から歩と合流し、皆は様々なボードゲームに手を出して遊んでみたが、今度は大概衣が圧倒してしまう。運が影響大きいものだけでなく、将棋やチェスにおいても彼女は強者であり、まずルールすら覚束ない京太郎ではまるで歯が立たず。
あまりの一方的展開に京太郎から実力順に次々と脱落していったが、次点の強さを持つ透華が音を上げてしまっては衣の相手もいなく

なり。彼女はつまらなそうにし始める。
ならばせめて麻雀なら、と皆が思ったその時、ハギヨシが何時からか用意が済んでいた自動雀卓を指し示した。そして、誘蛾灯に惹かれる虫のように、麻雀好きな彼女らはそこに集い、自然と麻雀を始めたのである。
お客さんの京太郎以外は半荘終了毎になるべく入れ替わるということで始まった対局。
一半荘目は彼女のオカルトを高める満月の月が出ていなくとも、豪運任せの高い打点を持ってして衣が一位を掻っ攫っていった。二位は透華で三位のハギヨシを捲くりきれずに、京太郎は四位。
さて今度こそはと現在京太郎が挑んでいる相手は一に純に智紀。彼女らは明確なオカルトを持った手合いではないがそれぞれ素晴らしき打ち手であり、三人と競合しあえることに喜び集中し始めた彼は背中に感じていた二対の視線をすら忘れた。
京太郎は確かに能力と呼べるものを持っている。絆を糸として縁者から影響を受ける、そんな力。繋がった相手を孤独にはしない、そんな彼の想いが形になったようなものであるが、しかしそれ自体は決して強い武器ではない。
天江衣や宮永咲等魔物に好まれているからこそ京太郎は麻雀において、ツモの改善、流れの把握までが可能となっているが、そこまで止まり。地力が足りなければ、平凡にすら負けうる。
「ツモ。タンヤオ、ドラドラ。二千オールだ」
「……はい」
「どうぞ」
「嵌張の三萬引いちゃったかー。それにしても、後ろに居た歩の様子がちょっとおかしかったし……これは純くん、やっぱりただ鳴いて和了りを速めただけじゃないね？」
「国広くんは目ざといなあ。ちょっと、随分と京太郎に流れが行っていたからな。少し無理に鳴かせて貰ったんだよ」
「……四萬、五萬、六萬の一面子が既に揃っているのに、七萬に無理に飛びつくとは思いませんでした。そしてシャンテン数を減らすどこ

ろか、鳴いて受け入れ牌を減らしていましたし……やはり純さんの麻雀は私には理解し難いです」
「あはは。真面目な歩にとってはそうだろうね」
その証拠に、幾らツモが良くて、相手に向かう流れが読めたところで、同じく流れを読める上に試合巧者でもある純には中々敵わない。
ツモる筈だった有効牌を鳴きでズラされ、手の中の牌が相手の和了牌であると解して離さず持っていたところで純のそもそもの運の強さからツモ和了りされる。
そも、技術知識経験不足の京太郎は手の内での最速を上手く選択できず、運で勝ろうとも一や智紀に速度で負けることすらあった。そして、流れを気にし過ぎて鳴くべき場面で手を伸ばせない。堅実、というよりもどこか臆病なところすら垣間見えてしまう。
後ろで見つめていた衣と透華には、その辺りの弱点がよくよく把握出来ていた。
「うむ。きょーたろーの麻雀は金城鉄壁な様子だが、どうも一擲乾坤を賭すようなことがないから、猛者相手には稼ぎ負ける傾向にあるようだな」
「リバーサルクイーンと呼ばれる藤田靖子の愛弟子ですから、そちらの技術にも期待していたのですが……初心者然とした部分の方が目立ちますわね。あの夜の和了りはどうしたのでしょう？」
思わず辛口に語ってしまう二人の言葉を受けて、京太郎は苦笑するしかない。降って湧いた能力を誇示する気は彼にはなく、だから己の力は低いものと彼は元々規定している。未だ牌に親しみ始めた程度。勝とうと思うが、勝てるとまでは考えられない。
しかし、京太郎の弱い気概を、対面の純はよしとしなかった。
「おい、京太郎。観客に好き放題言われているぞ？」
「いや、でも俺がまだまだ駄目なのは自覚していますし……打ち方を変えて直ぐに上手くなるってこともないでしょうし、どうしようもないですよ」
「いや、そんなことはない」
「え？」

「オレみたいに、一度流れに逆らって鳴いてみろ。そうしたら分かるはずだ」
そして、この一言が、京太郎の麻雀を劇的に変えることとなる。果たして、純のその言葉は薬か毒だったのか。変化の階は、智紀が一索を捨てた、その時。
「ポン」
辺りに響いたよく通るその声に、京太郎以外の誰もが身動きを止める。たった二言。それだけで、周囲の温度が上がったような錯覚を皆に覚えさせた。彼から発される気配が鋭く変わり、魔物のそれへと近づいていく。
真剣味を増した京太郎の目の奥にて、ちろりと炎が燃える。向かいの純は、体震わせながらそれを歓迎した。
「チー」
やがて、鳴き、副露を恐れなくなった彼の打牌に迷いは消える。非効率すら、オカルト的なヒキによって最善手に変わっていった。
段々と燃え盛る瞳の炎が熱を増していく。そして、それが更に周囲の流れを乱して変えていくのだ。純にはもう、目を瞑っていても、結果は分かる。この局は、京太郎が和了ることで終わるのだ。
「ふっ」
京太郎が纏う流れは最早、自分が鳴きズラしたところで大差ないくらいの激流。予想通りに化けた相手が想い人でもあるという幸運を純は喜び。敗色濃厚の中でも良いところを見せようと、笑顔で打牌する。

「ツモ。タンヤオ、三色同順、ドラ一。二千、千です……」
東三局、その時点で一万点以上凹んでいながらも、純の言った通りに一鳴きしてからまるで別人のように落ち着いた京太郎は、最終的に龍門渕のメイド三人全員を捲くりきった。終局、その後しばし辺りには沈黙が降りる。
皆を黙させた、件の京太郎は右手を確認するように開閉し、一言も

口にしない。場に落ちた、何かが燃え尽きた後のような空白を嫌って、まずは衣から口を開いた。
「……正に驚天動地だ。純の言った通りに、鳴いてからきょーたろーの麻雀は別物に変わった。何故だ？」
「素地は元々整っていたのでしょうが、まるで足りないピースが嵌ったかのように、鳴きを中心とした戦術を得た彼は、別格でしたわね。同じく流れが読める、というのは知っていますが……純、どうして貴女は彼に足りないものを見抜けたのです？」
「ん？　そうか……真似られている衣に基本デジタルの透華には、分からないか。京太郎が流れを読めるっていうのはオマケだ。本質は別にあるんだよ」
「あれがオマケ……それに別、ですか？」
「何だろ。本人も判ってないみたいだけれど、純くんと一緒に卓に着いていたボクも分からないな。どういうことだい？」
一は京太郎を見てから、純へと視線を移す。そして、二人が見つめ合っていることを確認した。
助けを求めるように視線を向ける京太郎を、純は椅子の上にあぐらをかいて座りながら見定める。その瞳に嘘がないことを解し、溜息と一緒に彼女は答えを吐き出す。
「はぁ……本当に、自分で判らないとはな。なあ京太郎、お前の力って要は他人の真似だろ？」
「そう、みたいですけれど……」
「オレが見るに、衣の強いオカルトにお前の麻雀は強く引っ張られている。そして衣のオカルトは場の強い支配だ。なら、同等でなかろうが、切っ掛けさえあれば、場は無理でも流れくらいは支配出来るだろうと踏んだ。そこで目を付けたのが、鳴きだった」
鳴き。その行動にはリスクとリターンがそれぞれ多くある。その全てを都度量れる程に京太郎は達者ではない。しかし、そもそも相手の河から捨て牌を奪うという行為が、流れに触れることと同じであるとしたら。
「支配力は、近づけばより増す。それは当たり前だよな」

「つまり……京太郎は、鳴けばそれだけ強くなる、っていうこと？」
「その鳴きに理がなきゃ流れはそうそう来ないだろうが、まあ間違ってはいないな」
「はあ。俺にそんな力が……」
鳴けば、得点が落ちることもある。流れが気になってしまうこともあったが、主にその経験からくる悪印象から京太郎はあえて多くは手を出さなかった、鳴き。それに要所で触れてから、自身に集まっていく流れを感じて。
京太郎は終局前にはある種の万能感すら抱いていた。それが、嘘でないと純の説明で知り、思わず高鳴る胸元に掌が向かった。次に思うは、芽生え始めた自信を確かにしたいと思う欲求。
次の対局を始めたい、そう思った時に、直ぐ後ろから色の違う二つの声がかかる。
「京太郎は見事、龍門の滝上りを成したんだな！　衣の物真似とはいうが、魚目燕石というわけではないだろう。いざ力比べだ！」
「私も――――お願いしますわ」
「分かりました、衣さんと……龍門渕さん……ですよね？」
しかし、力を確信したいと思った時に、差されるのは、極めて冷たい水。やる気を帯びた本気の衣に、そして強い氷の如き気配を漂わせる透華の二人が、京太郎に対する。
何時も通りに覇気を発している衣は兎も角、普段の活発な印象から比べて何も伺えないようにすら思えるほどの明度の透華を前にして、京太郎は困惑を覚えた。
そしてそれは、周囲の皆も同じことである。いや、むしろその実が判っているだけ、戸惑いは大きく広がった。
「あ、京太郎の目覚めに触発されて、透華が冷えちゃってる……純くん、どうしよう？」
「あちゃあ……これが、国広くんが言っていた冷たい透華、か。ゾクゾクするな。出来るなら京太郎がどれだけ衣に食らいつけるか見てみたかったんだが……今の透華は衣すら喰いかねないぞ？」
「そういえば……卓に着いていないのは歩だけだったね、頑張って」

「ええ！　私、あの三人の中に放り込まれるんですか？　絶対に直ぐ飛んでしまいますよ……あ、今回は箱下なしでしたっけ。でも、そうしたら際限なく狙われちゃいます！」
「嫌なら、私が代わりましょうか？」
「……ハギヨシさん。あの、私の居ない午前中に、女性陣を差し置いて京太郎君と二人の世界を作っていたって聞いたのですが……今も喜々として彼の隣に入ろうとしていましたね。ひょっとして、あの噂は本当だったでしょうか……」
「ただの野球練習が、随分と語弊のある伝わり方をしていますね……分かりました。何も含む所はありませんので、どうぞ存分に衣様、透華お嬢様、京太郎君と存分に卓を囲んで下さい。噂とやらは、聞かなかったということにしておきます」
「うむむ、君付け、ですか……これは智紀さんの説が真実味を……」
「――歩、席に着くなら、早く着きなさい」
「っ、はい、分かりました！」
　混乱し熱を帯びた場を、冷たい言葉の刃が一刀両断する。普段のお嬢様をしている透華ではなく、龍門渕の一人娘としての彼女の声は下々に有無を言わせることはない。
　目立つ目立たない、どころではない圧倒的な存在感。場決めによって透華が近く下家に座ることになったのに、京太郎は身震いすら覚えた。
「ははっ、よろしく、お願いしますっ！」
　しかし、その程度で気持ちを萎えさせてしまうほどに、京太郎の内に篭った熱の温度は低くない。自分の弱さを笑い飛ばし、負けるものかと、声を出す。
　だが、その気合の篭った一礼を、透華は一瞥もしなかった。それも当然である。彼女は冷え切っているのだ。一度凍えてしまったその内を溶かすことの出来るものなど、今のところは時間以外にない。
　京太郎でもそれは変わらないということを確認した一は安堵を覚えながら、そのほの暗い内心を隠すために純へと話しかける。
「……そういえば、純くん。自分との対局中にコツを教えなくても良

かったんじゃない？　対戦が不利になっちゃうだけだったじゃないか」
「いや、正直、あれほどまで京太郎が手強くなるとは思わなかったし……まあ、それに、だな」
「それに？」
「出遅れたのが大きかったな。あれで、オレだって京太郎のことが好きでちゃんと見てるんだって、早く伝えたくなっちまったんだ」
「そう、なんだ」
　だが軽く現状から離れた話題を投じてから、直ぐに返って来たのはとても明るい恋心だった。その眩さに自身の独占欲が醜く照らされたような気がしてしまい、一は何時もみたいに器用に笑うことが出来ずに。
　ただ、冷気と熱気が入り交じる中で、手枷を弄くりながら黙していた。

「よく覚えていない、ですか……」
「ええ。私としては、少しの間眠っていた、それだけのつもりでしたが……どうにも、違うようですわね」
　美は多く影に隠れても損なわれる様子もなく、龍門渕の誇る建物に木々、オブジェは威容も変わらず屹立し、影を長く伸ばす。しかし、月光によってそれらもいささか角が取れているように、京太郎の目には映った。
　満ちる月の下、朝の時とは違って並んで距離近く、京太郎と透華は話している。彼と彼女は異能によってチグハグになっていた互いの認識を正し合っているところだった。
「何というか、急に冷たくなったというか……気配だけでなく、闘牌もどこか静かになって。そして対戦した俺らは、河が凍ってしまったかのような鳴く隙間もない麻雀を強いられました。結果は、龍門渕さんの圧倒的勝利でしたね」
「そうですか。確かに、目覚めた時に一が目の前で眦に涙を浮かべて

いて……私は貴方がたと戦って勝ったのが夢オチかと思ってしまい、失意から強引に皆を離し、片付けを任せて置いてきてしまいましたが、悪いことをしてしまいましたわね」
「少しの間でしたが、龍門渕さんは気を失うように椅子に倒れ込んでいたので皆さん随分と心配していた様子でしたよ。戻ったら元気なところを見せてあげて下さい。その後で説明を……その、変化の件に心当たりはありますか？」
「血、ですかね……何時か貴方にも教えることがあるかもしれませんわ。それと……」
「それと？」
　少しの間隙。勿体振った様子の透華を気にして、京太郎は僅かに寄った。果たして、その接近は過ぎたものであったのかもしれない。彼は眼前にて僅かに綻んだ、月下美人に惑わされる。
「私のことは、透華、と呼んで宜しいですわ。京太郎」
　小さな頷きは返事となったかどうか。しかし、身じろぎにも見えたそれに透華は満足し、笑みを深めた。そして、思いついた言葉をとつとつと続けて語る。
「あの冬の日。確かに貴方は言っていましたわ。歩み寄りが足りていない、と。実際に、その後衣に触れた貴方が彼女の心を溶かす様を見て、私は思いましたわ。……悔しいと」
「それは……」
「分かっています。底冷えるほど冷静になってから、ようやく分かりましたわ。私が間違っていたのだと。私は怖がって歩み寄ることをしなかった。それは今も、同じことです」
「今も、ですか？」
「正直なところ、私には京太郎、貴方という人が判らない。おそらくそれは、浅はかにも距離を広げすぎたためでしょうね。それなら、私も一歩を踏み出しますわ」
　その、ただの一歩は、揺れる京太郎の心の余裕を失わす。息のかかる程度の距離を近寄ることで更になくして。そうしてそっと、透華は彼の頬に触れた。

青白い月光の下に、二つの金色が揺れ、輝く。やがて、間近で京太郎の頬に赤みが差すのを確認してから、透華は一言。
「あら、意外と可愛らしいのですわね」
殿方はもう少し厳しいものかと思っていました、と続ける透華の言葉に、呆けた京太郎はハギヨシさんだって厳しくないのではないかと、間抜けに考えるばかり。
だから、透華が相手は年下だからと羞恥心と心の枷を無理に振りほどいて、生まれて初めて気になる男子に触れてみたのだと、そんなことは想像もつかなかった。
「ふふ。なんだか、今日は月が綺麗ですわ」
周囲に溢れ、目の前で際立って咲く高貴な絢爛を前に、京太郎は沈黙する。彼は夜空を仰ぎ見る彼女に何と返事をしていいか、思いつかずに。
月より美しい花をただ、見つめて愛でる他には何も出来なかった。

第三章　浸染

第十一話　私より弱ければ

片岡優希は、出会ってからこの方須賀京太郎という青年に振り回されっ放しだった。

真っ先に親友の心を奪われ、そしてついでに自分の心も揺り動かされ。気持ち新たに入学した清澄高校で待望の麻雀部への入部した後も、周囲に落ち着きの無さを感じ取り。

京太郎を巡ってざわめく彼女等を動かしているのが形の違う恋達なのだと、気付いたのは何時のことだったろうか。もしかすると、胸元でチクチク痛む想い、それを参照に比べてみた時からだったのかもしれない。

理解したその後も日々麻雀で負かされ、そして落ち込む度に優しくされて。そして此度の件。和に請われて自制していたがもう、優希は限界だった。

「――――大好きだじぇっ。京太郎！」

「はぁ？」

唐突にも強烈な春風が二人を襲う。耐えきれないように胸元にて握り込んだ小さな手の平は、僅かに震えていた。だが、抑え込まれた挙句に爆発した恋心はもう、止まらない。

春雲一つすらない快晴。前日の雲天から一転して開けた天から降り注ぐ陽光は暖かく、土曜の日ということも相まって、絶好のお出かけ日よりと相成っていた。

天気予報通りの春日和に気を良くしながら、優希は清澄から少し離れた市街を歩む。今日のお出かけの目的は、彼女がブックマークしているグルメサイトに最近になって取り上げられた、メキシコ料理のお店でタコスにありつくこと。

最初はバスから降りた後にちょっと歩くのは難だなと優希は思っ

ていたが、学校の先生に部活の先輩から出される宿題の消化に追われて最近は出歩きが減っていたために、心地よい春の陽気の中滅多に来ない所を見て回るのが楽しくなり始めた。
思わず出てしまった鼻歌に乗っかって、緑萌えてきている街路樹を見上げながらスキップをしてみたりして。
「何だか、今日は良い日の予感がするじょ！」
赤信号の元にて、ストップ。止まる前に一度跳ね、着地してからにへりと優希は笑んだ。彼女のその陽気は対面から見ていたそれまでご機嫌斜めだった老夫婦ですら、つられて微笑みを見せてしまう程のもの。
日差しをその全身に浴びながら輝く幼気な少女は、今日も明るく周囲を照らす。でも、それだからこそ誰も、それこそ本人ですら、その心にある陰りに気付くことが出来なかったのかもしれない。
「おおっ、この店かー。意外とおっきいじぇ！」
しかし胸中の靄などすっかり忘れて、優希は大好物を味わえる今に大喜びをした。ご丁寧にもタコスのポップが出ている目当てのお店は非常に判りやすく、駆け寄るに迷いなんて出ない。
それでも、明白な異常があれば、流石に喜色に浮ついた彼女であっても気付くことが出来るもの。寄ればそれだけ、優希の満開の笑みは萎れていった。
「あれ、何か匂いがない……それに中に誰も人がいないじょっ」
最初はよく利く鼻、そして次はその大きな瞳で休日昼頃の繁盛店でなければおかしいものが確認できないことを理解する。慌てた優希は駆け足の回転を早め、茶色いツーサイドアップな髪を弾ませた。
そして、辿り着いた入り口には、臨時休業の張り紙が。思わず、優希は肩を落とした。
「そりゃないじょー……」
どうして。楽しみが消えることを嫌がり、優希は悪足掻く。しかし、近寄ってよくよく紙を見ても、達筆具合がよく判るばかりで、休業理由は判然としない。
このまま居ても実りはないだろう。だからといって、早々に立ち去

ることが出来るほど、未練がない訳でもなく。所在なさげにその場に立ち尽くしていると、少し弾んでいるような声がかかった。
「どしたー、ちびっ子？」
「この店、どうしてお休みしているんだじぇ……」
「あー、食べに来てたのか、残念だなー。昨日買い物の時にここの奥さんに会ったんだけど、その時旦那さんが腰を痛めて大変だって聞いたぞ。多分そのせいだな」
うんうんと頷きながら、通りがかりの近所の少女、池田華菜は優希に事情を伝える。元々機嫌よく、更にいいことをしたと思った華菜はどこか満足そうだ。
反するように、自分の目だけでなく、他人の口から語られたことによって、美味しいお昼を食べ損ねたことをやっと実感した優希は気持ちを落とした。
「うう。……タコス、食べたかったじょ」
「そんなに落ち込むなよー……ん、電話だ。もしもし。どした、京太郎？」
「京太郎？」
「何だお前、京太郎の知り合いなのかー？　ああ、もしもし。あたし、ちょっとお前の知り合いみたいなちびっ子にちょっかい出しちゃってさー」
決して口にすることはないが、その上機嫌の理由である京太郎からの電話に出た華菜は、隣の少女が件の青年の名前に反応したことを敏に察して、電話越しにその事実を伝える。
すると電話口の京太郎からは、それって優希、茶髪の小さいのじゃないですか、という言葉が。優希のつむじを見てから頷いて、華菜は話を続けた。
「うん。多分そいつだな。店が休業だからタコス食べられないって項垂れてて……ん、タコライスなら出来るかも？　そっか。まあ、あたしは別に構わないし。妹たちがいいなら大丈夫じゃないか？」
やがて、会話は隣で黙って気落ちさせていた優希にとって明るい方向に向かっていく。そして、電話を終えた華菜はひと伸びしてから、

視線を下げた。
　通話を見守るように望んでいた優希のどこか青っぽい瞳は、華菜の黒い瞳と繋がる。
「おい。ゆーき、でいいのか？　まあこれも縁だし、お前家にご飯食べに来るか？」
　不幸も幸福も時に唐突に降り注ぐもの。あたしは怖くないぞとでも言うように笑顔を作った華菜に、優希はぽかんとしたまま、一時何も返せなかった。

「いっくじょー。リーチ！」
　勢い良い打牌。真横に置かれた六萬に、五対の視線が集まる。自信満々にリーチすることで、聴牌を披露した優希が山から自摸って来た牌は、今局四つ。
　やけに美味しかったけれどタコライスだともう一つの感があるな、と優希自身は考えているが、他はそう思わない。
「相変わらず、早いな……」
「調子いいなー」
「もうリーチ？」
「はやーい」
「これすてちゃだめかなー？」
　東一局、優希の親番。起家な彼女の先制リーチを受けた南家の京太郎に、西家の華菜、北家に集まる緋菜、菜沙、城菜の三つ子は驚きを隠せなかった。
　しかし、何を賭けている訳でもない、ただの親睦を深めるための遊興としての勝負。誰の彼の顔にも真剣味は薄く、ピンチを面白がるような色の方が強かった。
「それも一発っぽい、か……よし、じゃあこっちを捨てるか。食いますよね？」
「む、何だか誘導されたようでシャクだけど……遠慮なく頂くし！
チー」

対する京太郎は、優希の捨て牌の間四間である五萬をためらいなく捨てて、既に白で鳴いていた染め手の様子である華菜の手を進ませる。

そして、二副露した華菜が捨てたのは、一萬。優希は、自分の待ち牌である二索、五索ではないどころか、それで染めている筈の萬子の一つが彼女の手からあぶれたことに危機感を覚える。

「くっ。こしゃくだじぇ……あれ？」

思わず呟きがこぼれ落ちたその時、唐突にも首筋を撫でられたかのような掻痒感が優希を襲ったために、彼女は思わず上家へと振り向いた。違和感を覚えたのは、打てるのかどうかも不安に思っていた相手から。

そう、両手で城菜が取ってきた牌を緋菜と菜沙で入れ替え差し替えしているその愛らしい姿に、優希は言いようのない圧力を感じたのだった。

「うーん。これで、たぶんそろってるし！」

「あとはここと、ここと、ここのどこか？」

「いっちゃだめだし！」

「そうだったし！　じゃあ、あたしたちもリーチ、だし！」

「これがせんてんぼうだっけ？」

「そーだよー」

そうして、緋菜の小さな指にて僅か斜め横に置かれたのは八索。ちょこんとその前に配された千点棒と一緒にそれを確認して、優希は自分が次に引く牌に悪い予感を覚える。

山から殆どそのまま河に流した赤い五筒を見た三つ子の目が輝いたのを察し、それが的中したと判った。

「あ、それロン、だし！」

「いっぱつだ！」

「おねーちゃん、みてみてー」

「城菜、引っ張らないでも分かってるって……うわ、これは大きいな。裏も付いてるし。倍満だ」

「リーチ、一発、ピンフ、タンヤオ、ドラ……四、か」

「随分と綺麗な手だじょ……」
　果たして、幼い彼女達が立派に麻雀をやれているのは、偶然に助けられたがためか。いや、それは違う。
　それは、特に誤っていない捨て方からも、判明できた。彼女達は、世話をしている立派な姉貴分の背中を追いかけ学び。そして、慕う彼の教えを大事にしているのだろう。
　更に、素質に縁故が手助けをし、麻雀における少女たちは強者となる。子猫のような姉妹は、見れば立派に肉食獣の目をしていた。思わず気圧されるような感を覚え。
「はぁ……私は何をやっているんだじょ」
　そして、不運を嘆くではなく、淡々と慣れた手つきで支払いをしようとしている自分に気付いて、優希は溜息を吐いた。

「……あはは。また、負けちゃったかー。私ちょっと、風を浴びてくるじぇ！」
「ゆーきちゃん？」
「はやいし！」
「いっちゃったー」
　ゲームが完了し、優希は最後の百点棒を華菜に渡した後直ぐに、その場を起つ。運動神経のいい彼女が池田家から出ていくのは子供達が驚くほどに速く。それは、一声掛けようとした京太郎が間に合わないくらいだった。
　パタンと閉ざされたドアに、拒絶の意を感じた京太郎は立ち上がりかけた格好のまましばし動くことが出来ない。だがそれは一拍程度。直ぐに発とうとした彼は、しかし袖を引かれてまた止まる。
　思わず向いた先に居たのは、敗北に決して腐らなかった彼女。果たして、右手を引いていたのは華菜だった。彼女は、京太郎に真剣な瞳を向ける。
「……分かってるな、京太郎？」
「勿論です」

「なら、よしっ！」
「はい。行ってきます！」
言葉は少なに、だが視線によって確かに通じ合った二人は想いのバトンパスを成功させた。
優希は今負けに揺れている。それを知って尚、あたしの想いも一緒に叶わせろと猫のようなお姉さんは京太郎に課す。だが、当の青年はそれを信頼と受け取って嬉しそうに笑い、金髪を揺らしながら出ていった。
「むー」
「むー」
「ふたりとも、どうしたんだし？」
「……あー。何だかこっちも、面倒な感じだなー」
しかし、恋する少女は繊細である。両方大好きであろうと、仲よさ気な二人の様子が面白くないと感じた緋菜と城菜は、頬を膨らまし。
お姉さんは自業の片付けに奔走した。

「……今日は、いい日の筈だったのに」
そして、最下位から逃げ出した優希は、幸不幸の上下著しい今日一日を思い返す。
最初は、特訓に集中するためと和に断られたために、一人での寂しいお出かけ。それでも、優希は素晴らしき日差しに次第に快くなった。それも、メキシコ料理店が閉まっていることを知るまでだったが。
だが次に優希は華菜という救いの手に拾われて、三つ子にせがまれ保護者にも頼まれたからと池田家にやって来ていた京太郎と出会うことになる。最近ようやく目を合わせることに慣れてきた彼は、世話の一環として子供等に料理を振る舞う予定だったと言う。
そして何と、さっき調べたんだけれど多分出来るぞと、タコライスを作ることも提案してくれた。タコスほどではないが、当然のようにタコライスは優希の好物。
手製ハンバーグを喜ぶ池田姉妹も、間に合わせだからお前には刺激

が足りないかもな、と口にする京太郎のことをすら無視して彼女は掻っ込んだ。
その美味しいことこの上なく。香辛料不足も、作り手の優しさの表れにすら思えた。思わず、優希が毎日作って欲しいくらいだじょ、と言ったことに華菜はびっくりして慌てて。緋菜等も騒ぎ立てはじめ。
そして、騒動の中心となった少女は太陽のように笑った。
色々と、予定と違う。でも、今日は本当にいい一日なのだな、と優希は思っていた。
「今回も、勝てなかったじぇ……」
そんな最高の心地が変わり始めたのは、池田家の誇る妹達が、麻雀をやりたいと言い出した時からだろうか。
僅かな抵抗感。姉は強豪校の大将と聞いた。しかし流石にこんな子供達に負けるはずもないからと自分に言い聞かせ、私も麻雀部だからやれるじぇ、と午後の遊戯に麻雀をすることに賛成票を投じたのだった。
しかし、結果は無情であり、優希は最下位で終わる。三位は三つ子、二位が京太郎、そして一位になったのは華菜だった。
「もう、負けるのは、嫌だ……」
東場に強く、しかし力使い切った後の南場では麻雀に冴えがなくなるというその能力の特性上、敗衄する時は大概が後半に散々点棒を搾り取られる形になる。
往々にして、先の勝ちより後の負けのほうが印象強いもの。優希が勝てないということは、南場での大敗のイメージを多く植え付けられることだった。
最近の対戦相手が強すぎるために続けられたそれによる痛みは、最早今まで腐らなかったのが不思議なほど。勿論、優希が牌を手に取り続けた理由はある。
「でも、嫌だって、言いたくないじょ」
辛かろうと、優希は絶対に麻雀が楽しくないと、言いたくなかった。
だって、麻雀部のメンバーはいい人達で、関わればそれだけ好きになっていく程。そんな皆と一緒にする遊びが最近つまらないなんて

伝えて、彼彼女等と心離れをさせるつもりなんて、毛頭なかった。
しかし、今。なけなしのプライトまで傷つけられた少女の心は決壊寸前。ついつい、淀みのように溜まった想いが口から転がり出そうになる。涙と一緒に、優希がそれを抑えていると。
「そんなの、言っていいに決まってるだろ」
無遠慮な、そんな男の声が耳に入る。独り言を聞かれていた恥ずかしさすら忘れ、沸き起こる怒りにつられたように勢い良く振り返った優希は、自分の心に踏み込んできた下手人に歩み寄る。
そして、光を背にした、彼女にとっては見上げるほどに大きな彼、京太郎に思いの丈をぶつけた。
「言ったら、麻雀が嫌いになったって喋ったら、私のことなんて、どうでも良くなっちゃうじょ！」
「馬鹿だな。麻雀部の皆がお前を見捨てる訳ないだろ」
「お前は皆に好かれているから、だからそんなことが言えるんだっ！」
最早、一度栓が抜けて、爆発させた感情は止まらない。高みにある胸板を叩いて、優希は泣きながら叫ぶ。
私を上から見るなと、駄々をこねるように。
「私は駄目で、一番弱い……そんなの、愛される筈がないじょ！」
「……弱い、か」
「そうだ。お前が私より弱ければ良かったんだじぇ！　そうしたら、こんなに惨めな思いはしなかったのに！　ああ、悔しい、悔しいじょ……」
優希は京太郎のお腹に頭を押し付けながら、はらりはらりと、涙を零した。自分が酷いことを言っているのは分かっている。でも、とても止められるものではない。
太陽のような少女の本音は、酷く陰ったものだったのだ。だがそれもとても純粋で、清く澄んでいた。そのことを知り、京太郎は一度青いばかりの空を仰いでから、手の平を彼女の頭に乗せ、口を開く。
「そうか。優希は強くなりたいんだな」
「ぐすっ。それは……そうだじょ」
当たり前のこと。そんなことを認めて、この男は何を言いたいの

か。それが少し気になり、撫でる手の平を振り払って、顔を見上げる。
視線の先にあったのは、とても真剣な、鳶色だった。
「俺も、もっと強くなって勝ちたい」
京太郎の強い意志の篭ったその瞳に、優希の怒気は次第に吸い込まれていく。強い思いは、より強い想いに負ける。
「あのさ。俺は元々手加減とか嫌いだけれど……特に、麻雀部の皆の前では絶対に手を抜かないで勝ちに行くって、決めてるんだ。何でだか分かるか？」
「分からない、じょ」
そう、分からない。どうして目の前の青年は弱い、どうでもいいはずの自分にこうも思いを見せてくるのか。そして、自分の胸音の響きが何故こうも強くなっていくのか。
全てがあまりに苦しくて、不明だった。
「だって、格好良いところ、見せたいだろ。きっと、優希も俺と似たことを思っているんじゃないか？」
「似た……」
「好き、だから勝ちたい。ただ負けるのが嫌だって言われたら何とも言えないけれど、それなら俺も一つだけ伝えられることがある」
そして、急に笑顔を作った京太郎に、止まりかけの涙がぽとり。そして、次の言葉に、彼女は胸を熱くさせる。
「大丈夫。負けようが、何があろうと、俺は優希のことが好きだ」
その告白に、愛はない。しかし好意は抜群に篭っていて。涙はまたぽろりぽろりと溢れてくる。
そして、それ以上に喜びが止まらない。口角上がり、笑顔なんてとうに越えて、身じろぎしながら体全体でその嬉しさを表しながら、優希は細まった瞳で彼を見つめる。
「あは、あはは……」
「お、おい、大丈夫か？」
果たして大丈夫、なのだろうか。平静でないことは、傍目からだけ

でなく、自分でも丸わかり。しかし、この想いに間違いなんてないだろう。
だから次に言葉を紡ぐことに迷いなんてどこにもなく。
「私は、もっともっと、ずっと――――大好きだじぇっ。京太郎！」
そして彼女は、再び本音をぶつけた。

「むぅ。おにーちゃんをゆうわくするな、だし！」
「ふふふー。これは告白っていうんだじぇっ！」
風が収まった直後、横から入って来た小さな邪魔者なんて、優希は気にしない。想いを告げられた。彼女にとって、それで充分だったのだから。
その熱い視線を、京太郎は確かに受け取る。
「参った……そういう意味で言ったんじゃないんだけれどなあ」
紅色の糸の一端。それを確かに手に取り、京太郎は迷う。少女の清さを彼は先の触れ合いで重々知っていたから。
思わず紅潮する頬。それを華菜に揶揄されるのは、直ぐのこと。しかし、京太郎が告白を受け取ることは中々出来なかった。

そう、花咲く彼女が瞼の内に、浮かんだために。

第十二話　私の方が

学校生活に、私生活。それぞれに楽しみは沢山ある。しかし、結局のところ、一日の中で最も大切なのはこの間隙の時間なのだと彼女は思う。

下校途中に二人きり。長野の自然溢れる車通りの少ない道を、二人並んで歩く。降りる沈黙の中をも楽しめてしまうのは、互いに馴染みきっているがためのことか。

暇を使って、遠くに見える山景に向うように飛んでいく一羽に心を乗せたり、風に舞い散る髪の長さを気にしてみたりして。彼と共にある安心感かときめきからか、彼女の心は四方に開き出す。

「……なあ、咲」

「どうしたの、京ちゃん？」

しかし、そんな最中であっても一番に心寄せている相手の言葉は何より気になってしまうもの。彼女、宮永咲は集中して、彼、須賀京太郎の長身を伺う。

相変わらず、あどけないながらも整っている、そんな素敵な顔立ちだと、惚れた彼女は思った。

「ちょっと相談したいことがあるんだが、いいか？」

「いいけど……内容によるよ？　それで、何？」

咲を放って、しばらく沈黙させる程に京太郎の思考を占めさせていたのは、悩み。休日明けの今日に起きた騒ぎをよくよく知っている彼女には、相談内容の予想がついていた。

それでも、他の可能性もあるだろうと、少し嫌そうな顔をしながら咲は促す。

「優希とのことなんだけれどな……」

「やだ」

「はぁ。即答かよ」

「べー」

咲はそんなこと聞きたくもないと、一声で遮断した。自身の色恋沙

汰を、自分に恋心を向けて来ている少女に解決を乞おうなど、たとえ恋情を察していなかったところで相当にアウトな行いである。
ただ、おっかなびっくりながらも、それなりに本気で助けを求めていた京太郎はにべもない反応に困り顔。惚れた弱みか、その歪みすら魅力的に思えてしまった咲は、頬に集まる熱を誤魔化すように、涙袋を人差し指で引き下げあかんべえをした。
恋人ではなく幼馴染とすらもいい難い、しかし縁深い二人は歩みを止めて、互いを伺い合う。それは、変化に揺れ動き始めた関係に拠っていた。
そう、片岡優希の積極的な恋愛は、今や停滞していた京太郎と咲の仲すらも、動かそうとしているのかもしれない。

優希が大好きを表明した翌々日の月曜日。自然、清澄高校に登校して京太郎と顔を合わせた優希は、その好意を大いに顕にした。
出会い頭に跳びつき、周囲の視線を釘付けにして。そうしてから当然のように共にあった咲に向かって京太郎は私のものだじぇ、と宣言。
多数の動揺に大荒れした場が治まるのは息を切らしてやって来た和が優希を引き摺っていった程度では無理であって。通りかかった誠がその体格からくる圧力を活かして野次馬に睨みを利かせるまでざわめきは続いた。
そして、迎えた休み時間。京太郎はチャイムとほぼ同時にやってきて、席の前にてむくれる咲と腕を組んだ誠により、立ち上がって教室から逃げようとしたのを止められる。
騒ぎ収めた誠がその際に、後で詳しく聞かせてもらうぞ、という言葉を残していたことを思い出して、京太郎は溜息を吐く。
「……京ちゃん。優希ちゃんと、何があったの？」
「宮永の言う通り、ホントどうしてお前は片岡にあそこまで懐かれてるんだよ。先日までそんな素振りまるでなかったってのに」
「それは……まあ、簡単に言うとだな。休みに偶然出会ったアイツが悩みだしたから俺はそれを解決しようとしたんだ。そうしたら、何で

か分からないんだが……告白されたんだよ」
　その言は非常に曖昧。だが、馴染みの二人にとって、それで殆ど理解に充分のようで。また無自覚にやったことで相手を惚れさせたのか、と咲と誠は同時に理解した。
　嘆息は、一揃え。京太郎は、妙なシンクロニシティに驚きを覚える。
「絶対、大切な部分を端折っているよね」
「というか、やらかしたことを意識すらしていないんじゃないか？全く。コイツはなんで自分の一番でもない相手に、好意を引き出すところまで頑張れるんだろうなぁ」
「京ちゃんだからね……」
「まあ、京太郎だから、仕方がないか」
「お前達……人をそんな子供を見るような目で見て……おいっ、二人揃って溜息吐くなよ！　この短い間に二回目だぞ！」
　京太郎は、自分の分からないところで友人等に意見を一緒にされているのを不快に思う。だが、彼の子犬が吠えているような文句なんて、柳に風。ただ溜息が重なったことに、友人二人は奇妙な連帯感を覚えた。
　咲も誠も彼に救われた者同士、意見通ずるところがある。決して愛想よくしてばかりな訳でもないが、それでも関わる者を惹き付けてしまう京太郎の性質。優しさ、またそれ以外の何か。彼彼女は、それが働くことを嫌っていた。
　もっとも、それも当然のことであるだろう。大事な人との時間を、他に取られるのは決して面白いことではない。そして、性差もあるのだろう誠は然程ではないが、咲の独占欲は高いもの。
　続いて質問する際に、咲の口元が大いにへの字に落ち込んだことを、誠は確認する。
「それで、京ちゃんはどうするの？」
「どうする、か……」
「告られたら、選ぶのは二つしかないだろ。受け入れるか、拒絶するか。はっきりしないと、門松先輩の時みたいに面倒なことになるぞ？」

「分かってるって……だがなぁ。……少し、考える時間が欲しいな」
「ったく。曖昧は一番残酷だと思うんだが……」
まあ、俺はそんなに大した恋愛なんてしたことがないからこれ以上は何とも言えないが、とぼやきながらも誠は渋々引き下がった。それは、自分なんかよりもずっと前に出たいと思っている彼女を知っているがために。
彼女、咲は告白に揺れている、そんな様子の京太郎が嫌だった。悩ましげに歪んだ彼の眉根を確認してから彼女は一言、口にした。
「私、知らないから」
ただそれだけ。目の前の自分のことを無視して勝手に彼女を作って、また徒に傷つこうともそんなことは知ったことではないと咲は伝える。それが嫌だから結局また邪魔してしまうのだろうことも、呑み込みながら。
言葉短く。しかし思いは届いたのか、ぷんとして去っていく咲の背中に京太郎は思わず手を伸ばす。そのまま何か声を掛けようとして。
「……はぁ」
しかし、黙したままに、彼は手を下ろした。その手はだらりとそのまましばらく垂れ下がったままで。
糸は結ばれず。花は、未だに咲かない。
「どうして、俺は……」
「……京太郎。俺は、片岡をお前の嫁とは認めないからな」
そんな未開振りに傍がもどかしさを覚えるのも仕方のないことだろう。もう、何年応援しているのだろうと、誠は胸中で指折り数える。
下ろした手を閉じたり開いたりしながら、そこに目と気を落としている様子の京太郎に向かって、早咲きを願う誠はそう牽制した。

その後、部活動の時間でも優希によって散々に京太郎との時間を荒らされて、斜めっていた咲の機嫌が直ったことに別段理由はない。
最初から咲の気分を悪くさせていたのは、京太郎を独り占め出来なかったことだ。下校にまで付いていこうとした優希を、少しためらい

を見せながらも、ほら帰り道は反対ですよと、確保していった和に感謝をしながらの帰り道。
麗しい信州の風光の中に溶け込んでいれば、邪魔など湧くこともなく。きっと、京太郎がつまらない相談を持ちかけてこなければ、咲の気持ちは楽しい今にばかり向き続けていたことだろう。
「……ま、京ちゃんだし、仕方がないね。それで、京ちゃんは優希ちゃんとの何を聞きたいの？」
しかし、残りの道々全てを仲違いしたまま過ごすのなんて、下らない。大いに嫌がりもったいぶった後、咲は思い切って相談を聞いてみることにした。
咲の言に改めて顎に手を当て考え、京太郎は言葉を選ぶ。
「いや、俺は現金なんだな、って思ってさ」
「どこら辺が？」
「正直なところ、俺は土曜まで優希のことをカピーと同じ枠で捉えていたんだよ。だが、告白された今では到底そう思えないんだ」
「意識しちゃってるんだね」
「まあ、な」
つい、目で追っかけちまうんだよな、と呟く京太郎に、私を見てよと叫び出したくなる気持ちを咲は必死に抑える。
直ぐ触れ合えるくらいに隣りあっているというのに、相手の気持ちを思い通りにすることが出来ないというのはもどかしい。
京太郎が自分を目に入れながらも別の少女を見つめていることに、咲は気持ちの悪さを覚えた。しかし、衝動に目を逸らすこともなく、ただ吐き出すように、彼女は肝心なことを質問する。
「……京ちゃんは優希ちゃんのこと、好きなの？」
「優希のことは嫌いじゃないし、親愛には出来るだけ応えたい、と思う。……でもやっぱり俺は、間違ってるのか？」
「前も言ったけれど、私は、好きと口に出来ない状態で付き合うのっておかしいと思う」
「そっか。そう、だよな。もっと、自分の気持ちと相手のことを知らないとなぁ」

京太郎は、金地の頭を掻いた。そして、当たり前のことを自分に言い聞かせるように独りごちている彼を、咲は少し哀れんだ。
恋愛は、一人ですることではない。そして、今回の場合はエゴによって恋慕に応えるのを選択する必要があった。
利己意識の薄いところがある京太郎にそれは苦手分野に入る。彼は他人の心の声に敏感で、自分の心の声に疎い。縁繋ぎが特に上手いわけである。逆さにすれば、それは縁断ちが苦手ということ。
そう、確かに須賀京太郎は魅力的ないい人ではあるが、そればかりに留めるには少し悪心が足りていないのかもしれない。
「……私のことは、よく知っているよね？」
「それはそうだろ。何年一緒に居ると思ってるんだよ」
「はぁ。もう、京ちゃんにはがっかりさせられるなあ……」
「何でがっかりしてるんだよ。しかし、これじゃ今日は何時もと反対みたいだな……」
ぼやきを無視して、咲は傾いている内心を知らず、京太郎が自分とのことを深く考えてくれないことに、歯噛みした。
彼女は言わずとも自分を見て欲しいのだ。伝えずとも好きになって欲しいとは傲慢かもしれないが、重ねた時間が自ずと愛を育むことを願うのは違いなく浪漫だった。
それは山の頂きの花を欲しがるような、高望み。しかし、未だ夢見る時間は残されている。幾ら悩んでいたところで、彼は今のところ一人。一番近いのは自分だという自負がある。
だから、もう少しこの間隙を愉しむのも悪くはないだろう、せめてこの帰り道の間くらいは――そう咲は思っていた。
とんだ危急が、唐突に訪れるまでは。

彼女の姿に気付いたのは、京太郎だった。家族を抜かせば一番に馴染んだ少女。共に過ごした時間も、咲に次ぐ。きっと、想いの大きさもそれくらいで。
だから、自宅の門前にて俯いた様子の津山睦月の、その落ち込みを京太郎が認められずに思わず足を走らせたのは、自然なことだったの

だろう。
　咲いた花々の横を通り過ぎながら、京太郎は思い詰めてぐしゃぐしゃになった睦月のところへと足を早めた。
「っ、どうしたんだ、睦月姉さん。一週間と少し振りか？　今日来るって言ってなかったじゃ……」
「……京太郎！」
「うおっ」
　それは、唐突な抱擁。何時ものスキンシップとは違い、まるで縋るようなそれを見て、追いつくために息を切らして駆けていた咲は目を丸くした。
　勿論、強く抱きしめられている京太郎の驚きは、傍目以上。ただ、彼はただそれを受け入れて抱き返そうとはせずに、先ずは引き剥がして様子の異常を問おうとする。
「どうしたんだよ、睦月姉さん……っ！」
「……あ、ああっ」
　しかし、それは悪手だった。自分が拒絶されてしまったと勘違いした睦月は、痛いほどに強く肩に置かれた京太郎の手を掴んだ。そして、手の甲に食い込んだ爪による痛苦によって眉をしかめる間近の彼を慮って、彼女は更に慌て出す。
　動揺によって奇しくも、乱れ混濁した心に空白が生まれた。隙間に、意識が満ちる。睦月が真っ先にはっきりと認識したのは、赤だった。目の前でぷくりと浮かんだ血液に、彼女は驚く。
「す、すまない京太郎！　血が、許してくれ……」
「こんなの平気だって。そんなことより、なんでそんなに様子がおかしいんだ？」
「おかしい……か」
「はぁ。ふぅ。……何かあったの、睦月さん？」
「咲……」
　動揺のあまり左手で京太郎の傷口を擦り、赤を広がらせながら、睦月は彼の言を呑み下し。呼吸を整えながら寄ってきた可愛かった筈の妹分を、目を細めて見つめた。

血に粘りはなく、決して糸のごとくに広がらない。血に汚れた手を素直に離して、睦月は自嘲する。
「ふふ。何もおかしなことはない。私は、こんなものなんだ」
「睦月、姉さん？」
「違うよ、京太郎。私は今お姉ちゃんをやれていないだろう？」
「……じゃあ、今の貴女はただの睦月さんっていうこと、なの？」
「そう。お姉ちゃんとしてしっかりしようとしていない時の私なんて、この程度。京太郎を求めることしか出来ない、ただの子供なんだ」
睦月は京太郎から目を逸らし、咲の問いに答えて。そうしてから今度は自分を強く抱きしめ始めた。まるで、震えを抑えようとしているようなその様子に、彼は別れに涙する少女の姿を思い出す。
そして、それは彼の庇護対象。京太郎は注目を知らずに睦月に迷わず近づいて、小さく纏まろうとする彼女を抱きしめた。
「睦月姉さんは、俺の姉さんだ。子供だろうが、変わらない」
何とか思い伝えようと、必死になる京太郎。彼は心から、睦月を姉と慕う。しかし、届いた想いに、彼女は失望を覚える。
「あはは……やっぱり、京太郎は私をお姉ちゃんとしか見ていないんだな！」
身じろぎ、抱擁から逃れた睦月は感情溢れさせて、笑い出す。それは先より大きな自分に対する嘲り笑いであり、溢れぬ涙の代替でもあった。
何度も自分に言い聞かせたしっかりしなくては、という言葉は最早呪いのようで。睦月が京太郎の前で泣くことなど、もう出来ないのだった。
自分を望み通りに見てくれない想い人に対して、最後に残された想いの表現は乾いた笑い。それは、あまりに哀れなものに見えた。特に、一つ心に隠したものがある、咲にとっては。
「睦月さん……」
「はは。残念だったな、咲。私は私の想いに気づけたよ」
「残念？」
呟きを聞き留めて、濁った瞳は手を強く握って感情を留めていた咲

へと向く。投じられた言葉に対して疑問符を浮かべる彼女を睦月は、白々しいものと見る。
そう、今や睦月は、京太郎と一緒になってくれると嬉しいんだが、と以前公言していた咲へと敵意の視線を向けていたのだ。その変心が、京太郎には理解できなかった。
何時もと違い、気持ちがまるで分からない。今にも壊れそうな睦月に出来ることなど殆どないだろう。しかし京太郎は無力を嘆くでもなく、ただ間近の遠い彼女を逃さぬように、その手を握る。
すると、睦月は愛おしそうに、彼のうす乾きの傷ごと握り返した。そして、彼女は口を開く。
「――私は麻雀が好きだ。どんな辛いことがあろうと、牌を投げ出すことは、決してないだろう」
始まったのは、睦月の独白。思い篭ったその短い言葉を、二人は確かに聞いた。
投げ出す、のくだりにて睦月は、今まで下げながらもしっかりと握りしめていた右手を見せつけるように開ける。その手には、麻雀牌、よく磨かれた白が一つばかり収められていた。
そして、逆手、左手だけは決して開かず、むしろ白くなるほど強く。睦月は京太郎と繋がった。
「でも、それ以上に。この気持ちだけは、私は、投げ出したくない！」
思いは接触のみで、どれだけ伝わるものだろう。間近の言葉に掌で。その激しさだけは、彼に届く。
愛は恋とどう違う。それが判らなかった少女は、悩みの果てに答えを得ていた。ただ、一つ。津山睦月という女の子として、彼女は彼に言の葉を送る。
強く強く、睦月は想いの成就を願い、京太郎に告白をした。
「京太郎、好きだ！　お姉ちゃんじゃない、ただの私を、見てくれ！」
「は？　って。あれ……本当に？」
その思いは真っ直ぐに届いて、京太郎を惑わせる。好意、その色が変わってしまった彼女を手離すことも出来ずに、彼は答えを返せない。睦月は手の握りを恋人のするように変えて、更に近寄った。

至近にて、口ごもる京太郎と茹でダコのように真っ赤になった睦月の間には沈黙が。その場の雰囲気は一重に甘いものに変じてしまったようだ。

きっと、このまま一度京太郎がそれに呑まれてしまえば、睦月の告白が成就するのは間違いないだろう。それだけの時間と思いを、二人は重ねてきていたのだから。

「あーあ」

しかし、そう易々と、目の前にて想い人が奪われることを認める乙女はいない。嘆息してからは黙して。一歩、二歩と咲は京太郎へと近づく。

アクションは静かに行われる。肩に二度三度、つつかれたような感を覚え、何も考えることも出来ないそのままに、京太郎は振り返った。

「京ちゃん」

「何だ？」

「ん」

首に両手を巻いて顔を下ろさせ。そして彼女と彼は、カチリと、僅かに歯と歯がぶつかるキスをした。離れる互いの間に、唾液の糸が出来ることはなかった。ただ、何かが結ばれ、繋がったことを、その場の誰もが理解する。

咲は京太郎に向ける紅い瞳に、蠱惑的な色を乗せた。そして、我が子を安心させるように、微笑んだ。

「京ちゃんこれで分かったでしょ？　睦月さんより、私の方が、好きだから」

もう、握りしめられていた手と手は驚きによって離れた。そして、ピンと張られる筈だった赤い糸も、もうこの場で結ばれることはなく。

ただ、花は開いたようだった。それが何色かは、伺えないまま。

「やったな、咲……！」

「うん。これで私の方が、深く繋がったよ」

そして恋敵として、彼を間に二人の視線は真っ直ぐ繋がった。

「あわわわわ」
「ワハハ……修羅場だなー」
「怖いっす……正直、むっちゃん先輩置いて帰りたいんすけど……どうするっす？」
「論外だ。足がないと津山が帰れないだろう。しかし、蒲原の運転のダメージと合わせて、この空気を味わうのは心身ともに厳しいな……」
そんな三角関係を、四対の瞳は木陰に隠れた車内から見つめていた。
京太郎に見つかった彼女等が雰囲気をぶち壊しにするまで、あと少し。

第十三話　可愛い

「はぁ……」
　入浴剤によって乳白色に染まった浴槽に浸かって、染谷まこは溜息を吐く。そして彼女は掌でお湯を撹拌させながら、眼鏡を付けていないというそれだけでなく湯気によっても淡くなった視界を瞑ることで閉ざした。
　まこはしばらくそのままに、身体を温める。暗い中にて温水に疲労が溶けて出て行くようなそんな心地を覚え、緊張がどんどんと解れていくのを感じた。
　ふと目を開け、心なしか軽くなったような気がする右手を、湯船から出して灯りにかざす。途端に眩い光は隠れ、なだらかなまこの手の細さに合わせて水が滴った。水面に広がる白い波紋を見つめて、彼女は何かを思ってから口を開ける。
「……どうも、最近ちいと疲れが溜まっていけんの。全く。どこの誰のせいじゃろうかのぉ？」
　どこの誰か。いたずらっぽく独りごちているが、その人物の顔かたちをまこは端から想像ついていた。少し精悍さが出てきて出会った際の軽さも薄くなってきた彼、京太郎のことを今日も彼女は思い浮かべる。
「優希にはじまって、咲もあからさまになって。……和は機を伺っとるみたいじゃのう。おどけとるが、部長もどっか不機嫌で」
　まこをくたびれさせているのは、最近の麻雀部での変動。それは、京太郎への好意の表面化によるもの。
　優希が始めた猫っ可愛がりに続くように、翌日から行われるようになったのは咲の積極的なスキンシップ。和は両者を毎度堰き止め、そして時折意味深な目を京太郎に向ける。久はモテモテね、とからかうがそこに多少の険が見え。
　困る京太郎とざわめく彼女等の間で緩衝材となる以外に何も出来ないでいるまこが揉まれて疲労を蓄積させるのは、仕方のないことだ

ろう。
ただ、彼女等が恋愛に気が漫ろになるわけではなく、麻雀に真剣なままであることが救いといえばそうだろうか、とまこは考え。
「いや、むしろありゃあ……」
いっそ怖いくらいに皆が麻雀に集中しているのは麻雀に向いている彼の目を最高の摸打によって自分に移行させるためでは。と、まこは邪推してしまった。
思ってから流石にそれは違うだろうと首を振って、まこは仲間の集中を疑った自分を恥じる。ぽとり、水滴が彼女の癖っ毛に落ちた。
「……はぁ。けれども、取られたくはないのぉ」
他人に裏を望むのは、それが敵であるから。自分が日向で相手が影。己が感情の正当化のためにも、そう考えたくなるのも仕方ないだろう。
そう、まこの内で半年前に芽吹いた恋は胸の中で大きく育っていて。彼に味わってもらう前に、失望でその実りが萎れてしまうのは嫌なものだった。
女子の間に挟まれ右往左往。はっきりとしない京太郎を格好悪いと多少がっかりするところもあったが、その逡巡に助けられているのも間違いなくて。
「恋は盲目、痘痕も笑窪。屋烏の愛ってのもあったかの。多少の瑕疵なんて可愛いもんじゃ。しかし、一人として愛想尽かんのは困ったもんじゃのう。咲も和も優希も……部長も。皆、京太郎の虜じゃけぇ。仕方がないんかの？」
空に疑問を呈しながら、まこはざばりと立ち上がって、その白い肌を撫でる。お世辞にも起伏に富んでいるとはいえないなだらかな身体を濁った水が撫でるように滑り落ちていく。
まこは湯船に腰掛け、暖まった身体の中心を指でなぞった。この火照りは自分のもの。しかし、彼女等も殆ど変わらぬそれを感じているのならば。それならば、仕方がないのだろう。
清水のようにこんこんと湧き出る感情を、抑えきれなくなっても。しかしいくら強まったところで思いを表すことなんて、とても、まこ

には出来ないことだったが。
「好きと伝えれんなあ……きっと弱いからじゃけぇのぉ」
吐き出すように言い、のろりとまこは浴槽から出て。ぺたりぺたりとシャワーの前へと立ってから、そして鏡に手を当て曇りを取った。
「はぁ……着飾らにゃあ、わしはわし、じゃな」
冷たさと感情にギュッと握った白魚の手の内側の鏡面に映された彼女の顔は、眼鏡ないまま見定めるために眉根が少し、歪んでいた。
そんな素直な自分が、少女には、認められない。
まこは、蛇口を捻って冷水を被った。

清澄高校で一番に自在の打ち手といえば、それは間違いなく染谷まこだろう。オカルトを活かすには独自のルールに則る必要があり、デジタルに打つというのは効率に縛られてしまうことでもある。
奇しくも、過去に観たり経験したりした牌譜から類推しながら打っている、それだけのまこ以外に清澄では間違いを活かして打てる者は居なかった。
不正解にて卓上を変える。それは河を見て流れを変えるのともまた違う。全体を人の顔と見て、不利となる状況つまりは嫌いな顔であれば、打ち方を変えて好きな顔へと歪ませてしまえばいいという発想。
自己の歪み、つまりは一時の間違いこそ、勝利に帰結するという綱渡りのような打牌。流れを見るものと違って確信などそこにはない故に失敗は覚悟の上。だが勘ではなく経験則のみでそれを狂いなく行えるまこは、紛れもなく達者な打ち手だった。
「ロン。タンヤオ、ピンフ、赤一。三千九百の一本場は四千二百点です」
「あんた、それをダマに取っとったのか……」
「ええ。だって、染谷さんはこの方が間違えるでしょう？」
「……なるほど、のぉ」
しかし、その実力すらも容れて、青と茶の瞳はまこの下家にて瞬く。

福路美穂子は、両目を開いて楽しそうに笑んでいた。
調子よく連荘中だった最後の親番を蹴っ飛ばされた上に、能力ではない実力すらも見切られてしまったまこは、愕然としてしまう。三面待ちの良形で黙聴。追いかける点差を思えばリーチをかけた方が自然な状況にて、敢えて美穂子は黙して待ったのだ。
それは、場面を誤認させるため。過去の似た牌譜を、大勢が選んだ打ち方を敢えて避けて直撃を狙う。そして美穂子は見事に考えを的中させ、一位と二位の点のやり取りは行われた。
それでも点差はまだ開いている。もっとも、メンタルの優位の度合いは既に逆転済みのようであるが。
「美穂子さんと、まこさん。この二人を相手取ると、やり辛いったらないな……」
「キャプテンは風越のランキング一位だから当たり前だけれど……両目を開けるまでに差を付けた染谷さんも強いね。勿論、須賀君もだけど。私一人沈みだよ……」
「吉留さん、さっきから何回もテンパってるのに、残念ですね」
「そうだよね……え？　黙聴バレてた？」
火花を散らし合うまこと美穂子の横で、蚊帳の外気味な京太郎と未春は軽いじゃれ合いを見せる。
ただ、話はどこか間が抜けていても表情には鋭いものを維持したままの京太郎と違って未春には諦めが見えていた。敏にそれを感じ取り、風越の二人の引率をしている貴子は彼女にそっと近寄り耳打ちする。
「吉留。ヤキトリは許さねぇぞ」
「コーチ。は、はい！」
苛立った声からは鉄拳制裁すらあり得るものと思えてしまう。怯える未春。これにて、彼女がこれから最終局まで点数気にせずなりふり構わず速攻を狙うことが確定した。
「……凄いな」
だが、それは貴子なりの教え子のコントロール。顔に心配を表した自分に向けたウィンクを見た京太郎は、それを察する。

元ヤンという経歴から恐れられていることを知っていて、貴子は怒りやすい指導者の振りをしていた。だからきっと、彼女が手をあげることはないのだろう。

それこそ、わざと悪役になって団結を誘うなど、そんな場合以外には。

「東、ホンイツ、ドラ一。八千点です」

「はい」

それからは、場は混戦となっていく。皆の瞳に熱が帯びる中、炎を散らす京太郎は一時捲ることに成功した。しかし、自分を傍に置いた点数の推移すらも容れていたのか、勝ったのは、美穂子。

僅かな点差で京太郎を抑えた美穂子の自信がこの一戦の間に揺れることは一度もなく。

因みに未春は振り込むことは一度しかなかったが、結局一度も和了れずに、ヤキトリに終わった。

「これは、いかんのぉ……」

敢えて普通に打ってみた三局にて消極的になりすぎたためか何の収穫も得られなかったまこは、そう呟く。そして、好きな相手の前で情けないと目を伏せて。

だが、そんな彼女を好意的に見定める目は一つではきかない。利き手で顎を押さえながら、貴子は考えを纏めるように言葉を発する。

「やっぱり噂や靖子さんの話通りにｒｏｏｆ―ｔｏｐの看板娘は強いな。しかし須賀君は、部内は実力伯仲だとか言ってたが。……部長の竹井某が公式大会に一度も出ていないのは、実力を隠すためか？　いや、それだけのために二年間を捨てるはずもない、か」

分かんねぇな、と貴子は右手を動かし頬を掻く。その後、まあこの後本人が来るんだから、特に気にしないでもいいかと投げ出して。

「あら。時間的に、上埜さんはそろそろかしら？」

貴子の独り言に応じるかのように、壁時計を見上げた美穂子はそう口にした。

竹井久。旧姓は上埜。そう、ここｒｏｏｆ―ｔｏｐにて風越と清澄

の麻雀少女達が卓を囲むことになった理由は彼女にあった。

以前、京太郎が初めて風越の少女達と出会った時。その時には既に麻雀部に入っていた京太郎は自身の部での活動等を語りながら仲間の話もしていた。

何処か自慢気な語り口の内容。その中にて、部長は悪待ちが特徴的ですね、と京太郎が口に出したところ、美穂子がそれに食いついて彼の腕を取りながら、部長の名字は上埜ではと聞いてきた。

池田家の緋菜が美穂子の胸元に行った京太郎の視線を糾弾するのを余所にして、二人は互いの情報のすり合わせをした。しかし、それだけで両者が確信を得るには至らず。

ならばと、連絡先、携帯電話を持っていない美穂子の代わりとして未春の電話番号――華菜のものは既知であったがキャプテンにまで手を出すなし、と協力してくれなかった――を確保し、京太郎は後日久に確認を取ることにした。

その日は麻雀部でゴタゴタが表面化する少し前。まこの五月五日の誕生日を祝ってからそれほど経たない日にち。

休み明け、京太郎は休み時間に久を呼んで、真っ直ぐ疑問をぶつけた。二人きりのシチュエーションに期待をしていた彼女は少しの失望を見せながら、ロングの髪を弄る。

「上埜久？　……それ、誰から聞いたの？」

「美穂子さん、風越のキャプテンからですね。彼女が、もし部長が自分の知っているインターミドルで出会った上埜さんと部長が同一人物であるなら一度会ってみたいと言っていました」

「まあ、確かに私の旧姓は上埜だったけれど……まあ、細かく語る必要はない、か。面白くもないお話になるし。須賀君も、対して興味ないでしょう？」

「いや、部長の過去話、正直気になるんですけれど」

「うふふ。そう、気になるんだ」

機嫌は一転。ミステリアスな学生議会長の年相応な姿に周囲が湧

くが、それを気にする京太郎でもなく。彼はただ、久の笑みばかりを大切にする。
　そんな集中に気を良くした久は、しかし一本指を眼前に持ってきて、口元に当てるポーズを取った。
「でも、内緒」
「ええっ」
　気を惹かしたままにしたい。そのためだけに、彼女は秘する。それを知らない京太郎は、漫ろな気になりながら、生真面目にも話を先に進めんとした。
「まあ、無理強いはしませんが……それで、美穂子さんと、会ってもらえますか？」
「……仲がいいのね。まあ、風越は仮想敵の一つでもあったし、丁度いいかもしれないわ。ちょっと待っていてね」
　女子との距離が近すぎる京太郎に僅かむっとし、久はポップなピンク色が目立つ可愛らしい手帳を取り出してから、その中に記載されていたカレンダーを指し示す。
　すると近く、覗き込んできた京太郎にどきりとする思いを隠しながら、久はペンで日付にチェックを付けた。
「ちょっと後になるけれど……この辺りが良いと思うわ。連絡しておいて」
「分かりました。あれ、当日、カレンダーに赤い丸が付いていますね」
「その日は、学生議会の会議があるから、ね」
「あれ。なら遅くなっちゃいますね」
「ふふ。だから、いいのよ。須賀君は、先方には学校が終わり次第直ぐにｒｏｏｆ―ｔｏｐへ来るように言っておいて」
「えっと……それだと、待たせてしまうのでは？」
「待たせるのよ」
「え？」
　不良ではない京太郎に、わざと待ち合わせ相手に暇をさせることなんて頭にない。思わず彼が呈した疑問の答え代わりに、久は笑みを見せる。

大丈夫と雄弁に伝えるその微笑みの後、久が更に理由を伝えんと口が開いた時、遠巻きに見ていた周囲から飛び出すように向かってきた足音が耳響いた。
「何しとるんじゃ、二人共。学生議会長が一年坊に告白される、とか言われちょるぞ」
果たして、京太郎と久が向いたその先からやって来たのは、まこ。彼女は周囲に広がる噂を語り。級友に彼が取られちゃうかもよ、と囃し立てられながらやって来たことは、決して口にはしなかった。
その時、カチャリと芯がぶつかる音が鳴って響き。そのため久はまこが手にしている緑色のシャープペンシルを見つけることが出来た。
「あら、それ大事にしているのね」
「べ、別にいいじゃろ」
それは京太郎が誕生日プレゼントとして送った文具の一つ。収まりがいいそれを中々手放せないこともまた、口外出来はしない。
しかし、何を察したのかにんまりと笑ってから、久は続けた。
「丁度よかったわ、まこ。話があるわ。須賀君も聞いておいて」
「何だか嫌な予感がするのぉ……」
「同感です」
「ふふふ」
それは、小さな悪巧み。だから彼らの予感は当たらない。大した意味はなかったのかと、京太郎もまこも脱力した。
ただ、その策が上手く実ることを思って、久は今回待つのではなく、待たせる。

「ねぇ、染谷さん」
「……なんじゃ？」
京太郎君にも言ったのだけれど別に敬語は要らないわ――三年生がそう言ってから少しの悶着の後に大分馴染んだ二人。まこと美穂子の仲は闘牌を挟んでからも悪くはなっていないようで、長椅子に座りながら、並んで久の到着を待っていた。

「上埜さん……ううん。今は竹井さんね。ひょっとしたら、彼女が会議を忘れていたってこと、嘘じゃないかしら？」
「確信があるようじゃな……よお分かったのぉ」
「思い返したら、染谷さんが嘘を吐いたあの時だけ普段と比べて、少し固さがあったような気がしたのよ」
「その観察眼は、流石じゃな」
「私としては、貴女の記憶力のほうが凄いと思うのだけれど……」
「わしの打ち方が記憶を元にしているとあれだけ短時間で気づけたことの方がよっぽどじゃと思うがの」
　互いに褒めあっているが、持つものに対する驚きの度合いは二人の間で大分違う。
　内心おののいてすらいるまこは、溜息を呑み込んで、美穂子を流し見る。性格は明らかに良く、整った顔には人好きのする笑顔が浮かんでいて、更には男性ウケ――特に京太郎に――しそうな体つきをしていた。
　麻雀の力量では負けたくないが、これはとても敵わない。まこはそう思う。
「それで、どうして竹井さんは貴女に嘘を吐かせたの？」
「……出来るだけ自然な形で、わしにあんたの腕前を体験させたかったそうじゃ。そら、雀荘で暇をつぶすのにゃあ麻雀が一番じゃからのぉ」
「染谷さんの記憶力なら、私の牌譜を後でおこすことも出来る……でも、自意識過剰でなかったらだけれど、私の牌譜なんてそんなことをしなくても探せば見つかるものだと思うのだけれど」
「言われんでも判っとるじゃろうが、実戦で感じることもあるからの。……まあ、一番に肌で感じられたのは、あんたの強さだったんじゃが」
「そう言ってもらえると、嬉しいわ」
　本当に、嬉しそうに美穂子は笑む。言われ慣れているだろう強いという褒め言葉に、これだけ無垢な反応を返すことが出来る。純な強者はあまりに眩いものだった。思わず、劣等感をチクチクと刺激されてしまうくらいに。

「……これで、疑問は大体溶けたかの？」
「ええ。片一方は溶けたわ。ありがとう」
「うん？　まだあるんか？」
「ええ。あの――――どうして、染谷さんはそれ程強い想いを秘めていられるのかしら？」
「ああ、それも分かっとったんか……」
　その目はどこまで見通すのか。何時の間にか開かれていたオッドアイの瞳はまこへと向いていて、捉えて離さなかった。
「ごめんなさい。これは私の好奇心でしかないわ。でも、私の好きの何倍も、大きなものを持っていながら、それを口に出さずにいるのは苦しいのではないかって、そう思ってしまったのよ」
「ああ、苦しいのぉ。……ちゅうか、あんたも京太郎に好意を持っとったんか」
「私は親愛の範囲。でも、染谷さんは……」
「ああ、わしは狂おしいほどに京太郎が好きじゃよ」
　誰にも伝えたことのない好意が僅か姿を覗かす。想いによって頬は紅潮し、貴子に未春と会話していた京太郎を見つめていた瞳の熱は強まる。そして、まこの表情は蕩けるような甘さに変貌した。それはそれは、蠱惑的な様子である。
　好きはこうまで人を変える。それを間近で理解して、より疑問は深まった。だから、美穂子は提案をする。
「そのこと、伝えてみたらどう？」
「無理じゃよ」
　しかし、にべもなくまこは断った。どこか悲しげに、彼女の眉は降りる。
「わしに京太郎は勿体無い」
「そんなことは……」
「あるんじゃよ」
　彼女の中で、最初から秤の片手は落ちていた。確信を持って、まこは言っている。それが、美穂子には痛いくらいに判った。
「わしはのぉ、記憶力ばかりよくての。それでじいちゃんの言葉を覚

えられたのは良かったんじゃが、悪いことも忘れられなくての」
「悪い、こと？」
「こんな言葉遣いに髪の毛じゃけえ。わしは、よく男子にからかわれたんじゃ。やれ婆さんだの、ワカメだの。小学の頃なんてしょっちゅうの」
「酷い……」
「それだって小さなことじゃ。もっと、本当に酷いことだってあったんじゃが……わしは、それを一々思い出してしまうんじゃよ」
　まこは、目を瞑って悪夢のように思い返す。とても、悲しいことがあった。それが忘れられない。更なる辛いことがあった。それも、消すことは出来ない。
　染み付いて離れない、そんな過去の感情が、まこを痛め続けている。それが、彼女の自信を弱めているのだ。
「思い返せば、その都度恨んで濁るんじゃ。真っ黒で小さい。こんなわしが清澄なんて名前の高校に入っていることなんてお笑い草じゃろ？」
「そんな、そんな……」
「こんな可愛くないのが、京太郎と一緒になるなんて……ムグ、な、何じゃ……」
「それ以上言わないで！　染谷さんは可愛い、可愛いのよ！」
　察し、相手の気持すら分かる。きっと、それだってとても辛いもの。自らを傷つかせることを発する口を掌で塞いで、美穂子は大いに叫ぶ。
　美穂子の涙腺は緩い。まこの心を代弁するかのように、彼女はぽろぽろと涙を零し出す。
　そして、美穂子はただ、可愛いのだと、それでも貴女は可愛らしいのだと言い張った。まこの弱音に負けないように。何事かと寄ってきた京太郎にも、彼女は矛先を向ける。
「可愛い。染谷さんは可愛いわっ！　ねえ、京太郎君もそう思うでしょ？」
「は、はぁ……いや、そんなこと、当たり前じゃないですか」

「あ、あた……ムグッ」
「なら、好き？」
「好き……いやそれは当然好き……違うな。もっと真面目に考えないと」
「ぷは。きょう、太郎？」
怖い。つい、美穂子の掌から逃れたまこはそう思う。それくらいに、京太郎は真剣な表情をしていた。
何しろこれは、何人もの少女と自分を困らせてきた悩み。好きの重さをようやく彼は計ることが出来るようになっていた。だから京太郎は、至極真面目に返す。
「すみません。分からないです……」
「そ、そうか。いや、仕方ないのぉー。こういうときは冗談でも……」
「好きなのには、決まっています。俺、初めてあった時から可愛い人だと思っていました。麻雀と出会わせてくれた恩とか、色々な人との縁を繋いでくれたありがたさとか、全てひっくるめて俺はまこさんが大好きです」
「な、なぁっ……」
それはまるで告白のよう。いや、これは真にそれなのだろう。全ての胸の内を浚いながら、京太郎は訥々と続ける。
「でも、これってきっと違いますよね。馬鹿な俺だって分かります。今は恋愛の意味で、言うべきなのだって」
「れ、恋愛って京太郎……」
「まこさんが俺のことを好きなのかは判りませんが、隣の美穂子さんを見れば真剣に問われているのは分かります。大好きの中で一番を、決める。キツいですけど、言わなきゃ待ってる皆がもっとキツい」
もう間違えない。その思いは確かに京太郎の鈍感を少し正した。背筋を伸ばして、彼は核心を述べる。
「この場で言うのは恥ずかしいですけれど、決めました。俺の一番は……」
「――止めて！　言わないで！」

胸元に巻き起こるは喜びに不安。これ以上は私が壊れてしまう。
訛りを忘れ、彼女は言った。
沢山の落涙の隣で、涙が一つ、零れ落ちる。
「っ」
その悲痛が解ってしまったから。京太郎は、口を噤んだ。

第十四話　負かします

結局のところ、場所も弁えず勝手に自分の思いばかりを告げようとした須賀京太郎は誤っていた。場は兎も角として、柔い心に強く想いをぶつけたらどうなるか。そんなこと、彼も冷静であったのならば判っただろうに。

結果、少女は傷つき涙を零し、彼女を大切に思うものが集まるその場からも出入り禁止となって。京太郎は、大好きな麻雀の最初の大事を失った。

だから、後日謝罪した京太郎に少女、染谷まこ個人が表ばかりの許しを出して、結果彼が平常通りを装うことになってもどこか上の空。闘牌にも陰りが見えて、笑顔も漫ろ。

専心という、京太郎の魅力の一部は失われた。真剣に卓に向う彼の姿はとても眩くて、笑い顔は煌めかしいものですらあったのに。

大切、だから取り戻さないと――情報を集め、仔細を知った原村和はそう考えた。

「のどちゃんは、ずるいじぇ」

淡く、柔らか。何もなければ無機質なばかりである部屋は、メルヘンチックな内装によってふかふかした綿のような優しい印象を受けるまでに変化していた。

硬い趣だった人家の一角を自分の好みを集めることによって取り替えた少女、和は自分の部屋にて寛いでいた。好きに囲まれて安心できない者などそうはなく。

ましてや隣に親友まで置いているのであれば、心が尖りようもない。お気に入りのペンギンのぬいぐるみ――エトペンという――に、顔を沈めながら和は椅子に乗っかったお尻を左右に揺らした。

しかし、その親しき友、優希はどうにもおかんむりの様子で口を曲げて文句を言っているようだ。優希がそっぽを向いたことによって小さなサイドテールが揺れる様を観察してから、和はどこか余裕を

持って口を開いた。
「ゆーき、本当にずるいのはどっちですか……自分の胸に手を当てて考えてみて下さい」
「うう、分かってるじょ。抜け駆けしたのは確かに……って、何だか話がずれてきてないかー？」
和は優希の罪悪感を撫でて、弄ぶ。
優希は僅か落ち込んでから後、困惑の表情を見せた。和と結んだ、京太郎を好きにならないという、事前の約束を破ったことを、この活発な少女は随分と気にしていたのだ。
しかし、約束といえどもそれは所詮、恋敵が増えないように半ば一方的に伝えた牽制のようなもの。あの日真剣に謝る優希のつむじを眺めながら、和はやはりこうなったのかと諦観を覚えただけ。
だから、当てこすりのように和が優希をおちょくるのに、深い怒りなどない。ただ、軽い憤りがあるばかり。何せ、彼女の最近の京太郎に対する猪突猛進振りには随分と迷惑をさせられているのだから。
和がいたずらっぽく作った微笑みを、混乱した優希は気づかなかった。
「そうですね、少しずらしました。……それで、明日のこと、京太郎君の家にお呼ばれしたこと、それについては本当に、私の作為は入っていませんよ」
「それじゃ、どうしてのどちゃんだけ、呼ばれたんだじぇ？」
「どうも、京太郎君のお知り合いに、私と雌雄を決したいという方がいらっしゃるみたいなので、どうしても、と……」
「ああ、のどちゃんって有名だからなー。うう、私もお呼ばれされたかったじょ」
インターミドルが東風戦だけだったのなら私も有名になれたのに、と口走る優希はしかし、最近その力の増し様著しく。何だか風を感じるじぇ、と勢い良く和了るその速度に連荘を重ねる姿は、何処かのチャンピオンを彷彿とさせるもので。
今のところ実力が伸びた実感に乏しい和に、それは眩いものですらあった。優希が羨ましいと、彼女も思わなくもない。普段の京太郎に

対する気安さに対する苛立ちに加え、我慢せずに嫉妬まで混ぜ込んでしまっては友愛に揺らぎが起こることだろう。
　しかし、存外強い精神力を持っている和は、そんな懊悩なんて欠片も表出すことなどなく。微笑み絶やさぬまま、優希に向かって優しく言い聞かす。
「ゆーき。このことは貴女が京太郎君に告白する前、彼がああなってしまう、もっと前から決まっていたことですから」
「……そっか、分かったじょ。それにしても京太郎、どうしてあんなに腑抜けてしまったんだじぇ……のどちゃんは理由を知ってるのかー？」
「ええ、大体は」
「むぅ。誰に聞いても口が固くて分からなかったのに。どう調べたんだじぇ？」
　お値段高めのデスクチェアーをそれと知らずに寄りかかってクルクルと周りながら、優希は疑問に思った。もちもちのクッションを手の中で歪めて、首を捻りながら彼女は悩む。
　そんな稚気溢れる姿をひと目見ながら、一度俯いてその瞳を影に隠し。そうして再び笑顔を持ち上げた和は一言だけ紡ぐ。
「秘密です」
　親友の一瞬のためらいを判らず、ただ暢気にも優希はえー、と返した。

　京太郎にとって、原村和は豊満に包容力に溢れた正しく好みのタイプそのままの存在である。故に、本来だったら二人きりというシチュエーションに、彼が鼻を伸ばしていても不思議でも何でもなかった。
　しかし、和と隣り合っていて尚、京太郎は心ここにあらずといった様子。彼女が体の前で組んだ手を動かし、間近で大きな胸を歪めてみたところで、彼は見向きもしなかった。
　擦り寄る近くのゴワゴワを撫でながらも、耐えきれなくなった和は、京太郎に声をかける。

「京太郎君」
「ん、何だ？」
「ほら、私に寄りかかったカピーちゃんが寂しがっていますよ？」
「ああ、すまない。どうしたカピー？」
　呼び声に応じたのか、トテトテと足元に寄ってきたカピバラを、京太郎は抱きしめた。抱擁を喜ぶその懐き様に微笑ましさを覚えて、和の機嫌も僅かに良くなる。
　そう、カピーとは須賀家の一員であり、最大のげっ歯類でもあるカピバラだった。カピーはとても一般的な人家では飼えないその大きく茶色い身体をゴシゴシと、一番に世話してくれる飼い主に寄せる。
「よしよし。……お、行っちゃうのか」
「可愛い。ふふふ」
「ぷ。カピー。お前は狸か？」
　しかして、存分に可愛がられて満足し。そして、京太郎の気持ちが落ち着いてきたことも察したのか、カピーは彼から離れて大好きな水場へと向った。
　気ままにざぶんと泳ぎ始めたカピー。彼が一度潜ってから水面に出た際に乗っかった若い葉が中々落ちずにずっとそのままになったこと等、のそりとしていて色々とユーモラスなその様体は、京太郎と和に自然な笑顔を誘った。
「あれ、どうした？」
「カピーちゃん、リムジンが来たのに気付いたのですね……ワンちゃんみたいで、偉いです」
　だが、唐突にカピーは水から上がって飛沫と共に葉を落とし。そしてから、彼は近くに停まった車を見つめた。
　その長き車体の途中から飛び出してきたのは、兎の耳のような意匠のカチューシャをした小さな女の子。金色の長髪を揺らしてカピーを目掛けて走る彼女の後に、車から彼女の親類とひと目で分かる高貴な少女、長身痩躯な執事の男性に、星のタトゥーシールが特徴的なメイドさんが続いて現れた。
　彼女等は、どうにも興奮しているようで、鋒として先頭の少女、天

江衣が振り向いて声を上げる。
「トーカ。京太郎の家の庭に、奇天烈な生き物が居るぞ！」
「珍獣ですわね！　捕まえて、私達が新聞の一面トップを飾りますわ！」
「透華お嬢様に衣様。あれは京太郎君のペットであるカピバラかと……」
「はは……二人共、あれだけ食い入るようにカピーの写真を見ていたのに間違えちゃうんだ。まあ、でもやっぱり生は違うね。可愛いけれど、迫力あるよ」
訪れた相手は四人。その名前と特徴と、更には面白い人達と京太郎から言われていたが、カピーを目にした彼女等のやり取りに、さしもの和も目を丸くした。
京太郎もその高いテンションに付いてはいけずに、思わず苦笑しながら、挨拶をする。
「こんにちは、透華さんに、衣さんに、ハギヨシさんに、一さん。そこの茶色くて大きいのがカピーで……そして彼女が和です」
「あ、はい。原村和です。皆さん、今日はよろしくお願いします」
「ハラムラノノカだな。よろしく！」
「衣さん……ののか、じゃなくてのどか……ん？」
「ふふ……京太郎君。そのくらいの間違えなんて、可愛いものじゃないですか」
「そうか？」
挨拶を交わす、和と衣。その際京太郎は多少の齟齬を見咎めたのだが、豊かな少女はそれを笑って認める。
小さな少女の小さな間違いなんてむしろ微笑ましくて、直すのが勿体無いくらい。夢の一つにお嫁さんというものがある和は、子供のように幼気な姿の衣を見て頬を緩ませる。
衣が上級生であるという事実は、この場で披露されることはなかった。
「ノノカ。それで、だな。それでそれで……」
「衣さん、落ち着いて」

「……こほん。つい、周章狼狽してしまったな。突然で短兵急な話かもしれないが、ノノカ。衣と友達になってくれないか？」
「いいですよ」
「麻雀をやっている衣を見せずに誘うのは卑怯かもしれないが……でも、麻雀していない衣も衣だし……ん？　いい？　ノノカはいいと言ったのか？」
「はい。一向に構いませんよ。お姉さんを信じて下さい」
「お姉さん？　まあいいや、わーい。やったー！」
　少し屈んで衣と目を合わせながら、和は承諾する。すると、わーいわーいと兎の少女はまん丸お月さまみたいな胸部の少女の手を取りその場で飛び跳ね、大いに喜色を顕にした。
　一人ぼっちの隣に、また一人。近くに集まってきた衣の事情を知る皆は、そのはしゃぎように、快くなった。
　ただ、衣に友達が出来たのは良いことだと思いつつも、京太郎は和の言葉尻に勘違いを確認し、笑顔を微妙に歪ませる。そんな表情を見て、一は彼に耳打ちをした。
「あの子、絶対に衣の年、勘違いしているよね」
「まあ、俺も卓に着くまで気付けませんでしたから……」
「武者修行を積んだからと仰っていましが、牌山越しに向かい合っただけで衣様のお年に気付くことが出来るということは、私は凄いと思いますが」
「ボクもそう思うけれど……会ってひと目で衣の大体のことを理解しちゃったらしいハギヨシが京太郎を褒めるのはちょっとおかしいよねえ」
「黒子の性能なんて、気にするようなものではないかと」
「いや、ハギヨシさんが一度表に出たら、色々な常識が覆されることになると思うのですが……」
「本人にその気がないのが残念だよねー」
　京太郎は、穏やかに笑うハギヨシを見て、彼がハンドボールの大会でその得意の縮地と隠形を用いて世界の場で活躍を見せる姿を想像する。彼は年若い、十九歳。今から学んで鍛えれば、或いはそんな夢

想も現実になるのかもしれない。
だが、ハギヨシが執事以外の職に就くことはありえないと、一だけでなく、京太郎もよくよく知っていた。
出過ぎないのが、執事。そうハギヨシは京太郎に己が心構えを言っていた。そんな彼が、主よりも目立つことなんてする筈もない。
また、ハギヨシが衣の孤独を知って尚、見守ることを選んだのは、成長を望んだため。いたずらに助けてその機会を奪うなんて、可能性を信じることも出来ない執事失格のすること。そう、彼は一に言っていた。
そんな優秀な執事たるハギヨシが一歩下がる。その様子を見て、京太郎達は主が前に出たのだということを察す。
視線を移してみれば、お嬢様たる龍門渕透華が、未だ喜んでいる衣から解放されて少し息を乱している和に向かっているところだった。
僅かに緊張しているのだろう、透華のその背筋はピンと伸びている。周囲は彼女が毎日立ち上がるようにセットしている癖っ毛が、更に真っ直ぐに伸び上がったような、そんな印象すら受けた。
「貴女が、のどっち？」
「ええと……」
「まあ、私が勝手に突き止めたこと。自分からは言い難いことなのかもしれませんわね。後で貴女の打ち筋に直接聞きますわ」
「ノノカは達者な打ち手と聞いているぞ！　衣も、楽しみだ」
「はぁ……あれ？　すっかり意識していませんでしたけれど、天江衣って……貴女？」
「うん？　衣は衣だぞ？」
「なるほど」
和は、自分の間違いを、ここで理解する。可愛さばかりを見てしてしまい、名前を認識とすり合わせることを忘れていた。天江衣は上級生で、更には強力な雀士。そんな情報を少女の矮躯とここで合致させた。
途端に、思わず、釣り上がる口角。和の意識は、直ぐに衣との闘牌へと向う。

そう、天江衣は敵を倒すために、和が越えるべき壁と決めた相手。何せ、あの藤田靖子が自分と同程度の力を持つと認めた存在である。
和は満面の笑みを見せる少女を見つめる自身の瞳に、熱が篭るのを感じた。
「むぅ。何だかのどっちは衣にお熱のようですわね。とても、距離が近い。歩ならここで、勘違いをして変なことを口走るのでしょうか？」
「そういえば、他の三人はいらっしゃらなかったのですか？」
「あまり大勢で押しかけるのも良くないと思いまして。未だ機会はあるでしょうからと、今回は平等に、メイド四人から一人、ジャンケンで決めましたわ！」
「そう、平等に、ね」
「はぁ……」
透華が口にした平等、をわざわざ強調する一を、京太郎は胡乱だと見る。彼女は父親がそうであるだけに、マジシャン裸足の手品の腕を持っていた。それを思えば、ジャンケンの結果くらい操れるのではないのだろうか。
龍門渕のメイドの中でも、一ほど透華に親愛を寄せている者はなく。だから全てをひっくるめて思えば、彼女が愛する主人に付いていくためにズルをしたと京太郎が考えてしまうのは仕方がない。
目が合った際に行われたウィンクの意味を、京太郎は上手く計れなかった。

「貴女はそのペンギン？　のぬいぐるみを普段から抱えて打っているのですね。インターミドルで打った時との違いはそれくらい、だと」
「はい。私はエトペンが大好きなので。でも……皆の前でするのは少し、恥ずかしいですね」
「そこは、目立つからむしろいいと思うべきですわ。まあいいです。取り敢えず、打ってみましょうか」
今回、龍門渕の面々、もっと言えば透華が和との闘牌を求めてやっ

て来た理由は一つ。それは、ネット麻雀界隈で伝説とすら謳われたのどっちというハンドルネームの打ち手。透華は全中王者、原村和の打ち筋からその影を見出していたから。
　同じデジタルとして大いに意識しているのどっち。それを彷彿とさせるそんな打ち手と、奇しくも京太郎との縁で繋がることが出来た。ならば、卓を囲んでみたいと思うのは仕方のないことだろう。
「万全の貴女と打つのは楽しみですわ」
　似ている。しかし、だからこそ解せないところがあった。運営の用意したプログラムとすら言われたのどっちはミスのないデジタル打ち。しかし、和はミスをすることも多い。
　その違いの故は。和とのどっちが同一人物だと確信している透華は、それを現実の緊張や情報を過分に受け取りすぎているためではないか、と考えた。
　だから、今回は出来るだけ自宅でパソコンに向かって打つのと同じ環境にする。それを頼んで、透華は通していた。
　丸いペンギンに胸を乗せ、何時の間にかハギヨシが了承を取り須賀家の客間にセットしていた自動麻雀卓を囲む席に座って、牌に触れている和を見ながら、透華は策の成功を願う。
「それじゃあ、後卓に付くのは和と透華さんと衣さんと……一さんでいいですか？」
「あら。京太郎は遠慮しないでいいのですよ？」
「そうだぞ。場を貸してくれたきょーたろーが先に打つべきだろうに」
「いや……ちょっと今回俺は見て学ぼうかな、と」
　そして、この会の主催でもある京太郎は及び腰に場を仕切ろうとする。今彼のその目は、牌を見ていなかった。
「どうか、しましたの？」
　それが彼を明確に想う少女には不思議に感じ取れるもの。普段の高いコンセントレーションを受け取れない現在の京太郎の態度は、少し異様だった。
　だが、牌の前にて常に気を張っているのも、本当はおかしなことか

もしれない。こういうこともあるのだろうと、透華は受け取る。
「いえ、決して京太郎は打ちたがり、という訳でもありませんでしたわね。……私ったら、どうしたのでしょう？」
「そうだ。まあ、衣の後ろを壟断して、参考にするのもいいだろうな！」
「いえ、京太郎には私の勇姿を存分に見ていて貰いましょう。衣も万全ではないですし、私の勝機は充分、ですわ！」
「駄目ですよ、京太郎君――――卓に着いて下さい」
「ノノカ？」
　そして、再び和やかな空気が場を包もうとした時に、それを両断するかのように静かな声が響く。
　それを発した和は、何かを確かめるかのように左手で牌を握っていた。そして、確信を持って何かを嫌がる様子の京太郎にまた言葉をかける。
「いや、俺は……」
「知るのを、怖がらないで下さい」
「……俺が、怖がってる？」
「そうです。それでも、打って下さい。そして、今の京太郎君は一度負けるべきです」
「負ける……か」
　考え込む京太郎に向かって、和は勝ち気にも笑顔で、京太郎君は私が負かしますから、と力強く宣言をした。

「以前の牌譜とも、のどっち……とも違いますわね」
　比べてから、大人しげな彼女が、こんなに攻撃的な麻雀をするなんて、と透華は舌を巻く。
　河の様子と牌姿によって分かるその判断に打ち方。それが、兎に角勝つことばかりに拘っているようにも思えた。先の宣言もあるのでそれも当然なのだろうが、リーチされた後での回し打ちの精度、そして思い切りの良さには驚くべき部分も多々あって。

「はい、四千三百点ですわ」
それ以上に驚愕すべきは、その聴牌スピードと打点の高さ。現在東三局で和が親の四連荘。これまで和了ったのは衣と彼女ばかりであって、更に今のところ和は七千点以下の点数で和了ることすらなかった。
当然、周囲の点棒は風前の灯火。このまま一度七千七百の一本付けの直撃まで受けている京太郎がトんでお終い、となるのが現実味を帯びてきていた。
そして、周囲の目を惹かせるのはそのヒキの強さ。実は既に披露していた衣の周囲の相手を一向聴で抑えるという、そんなとんでもない支配の能力をすら上回るそのヒキは、むしろ強引にすら映って。
誰もが静かに気炎上げる和の横に、鋭いものを向けて来る天使の姿を幻視した。
「気持ちだけで出鱈目をするものだ……強いな、ノノカ」
「強くないと京太郎君には勝てませんから」
和は素直な衣の賞賛を、軽く頭の中でチャットログと変えて流し。そして、闘牌を続けていく。
せり上がって来た牌を、和は脳裏で平たいパソコン画面のものへと変換してから、のどっち、いやそれ以上の打ち方を模索し、うずく左手を抑えながら右手を伸ばした。
そして、彼女は少しばかり道筋を考えてから、牌を捨てる。
「和は、早打ち極まって来ているな……」
西から捨て始めた河を望みながら、隣で秒の迷いもなしに牌が置かれる音に、京太郎は僅かに気を取られた。
惑わされまいと思っていても、目の前で行われるそのあまりの選択速度には思わず瞠目してしまうもの。
それよりも、もう七千点しか入っていない自分の点箱を気にした方がいいのだろうが、しかし強く、また美しい彼女を無視することは今の京太郎には出来ない。そして、内にある不明な喪失感に不安感も。
「駄目だ」

基本と自分の力の要点のみを抑えているだけの、漫ろな闘牌。そんなもので真剣一途に勝たんとしている和を打倒できるはずもなく。
引きどころかそもそも配牌もすこぶる悪いものであれば、この局はオリに徹した判断をした方がいいだろうと京太郎も思う。
別段まだ場が煮詰まっているという訳でもないが、和了りは諦めて黙聴警戒をした方がいいかもしれない、と考えた時に。
「ん……」
赤ドラで一つの嵌張塔子が埋まった。だが、それでもシャンテン数が一つ少なくなったばかり。この面子の中この速度で先に和了るというのは難しく。
だが京太郎は回し打てば或いは、と思ってしまった。甘い判断。そのツケは直ぐに来た。
場を見ながらも親の現物を落とすことを中途半端に嫌い、和の河に落ちていた五萬を目に入れてから反射的に八萬を捨てる。
それが、和の当たり牌だった。
「ロン。三色同順、ドラ一。七千七百の四本付け。八千九百点です」
「引っ掛けだったか……箱下なし、だったよな……トんだよ」
京太郎は、ぎしりと椅子の背もたれに身体を預ける。終わってみればそれはもう、和の圧倒だった。
一矢も報うことも出来ずに、負ける。それは随分と久しぶりのことだと京太郎は思う。
「のどっちの鱗片、確かに伺えましたわ。その正確な打牌、怖いくらいです。しかし、今回は一度たりとてオリませんでしたね。回し打ちも華麗でしたわ。少し強引な部分もありましたが……」
「絶対に勝つには、無理しないといけませんから」
「凄いぞ、ノノカ！　衣の支配を破るなんて！」
「支配？」
「ふふ。多分、貴女には判らない言葉なのでしょうね……」
盛り上がる和の周囲。彼女等の仲が深まって嬉しいと、素直に京太郎は思う。だから彼は、必要経費だったのだと、この負けも素直に呑み込もうと思った。

だが、その時に背後から一の声がかかる。彼女の手を戒める、メイド服に不釣り合いの手錠が、ジャラリと鳴った。
「今回はコテンパンにやられたねー、京太郎後ろから見ていたけれど、良い所一つもなかったよ？」
「ああ、そうですね。……ちょっと悔しいです」
「ちょっと？　やっぱり京太郎、何だか変だね」
「変、ですか？」
「そうだよ、だって……そんなに悔しそうな表情をしているというのに」
「え？」
思わず、京太郎は疑問符を浮かべる。一の言葉は意外だ。何せ、悔しさの自覚なんて一つもない。
京太郎は、自分の顔に手を当てる。そして、指が額に険を見つけた時に、ようやく彼女の言葉を理解した。
「ああ、そうか。俺、悔しがっているのか……そりゃそうだ。皆の前で格好悪い所見せるのなんて嫌だし……」
それに、大好きな麻雀に本気になれていなかった。皆まで口にせずともそのことにも気付いて、京太郎の胸の内は爆発する。
「ああ、俺は半端だった。そりゃあ悔しい。途中で引くくらいなら、最初から押さなければ良かったんだ……拙いこと、しちまった」
「京太郎？」
「すみません、一さん。次、交代しなくていいですか？」
「別にいいけれどさ……はは。何時もの京太郎に戻ったみたいだ。みんなー、京太郎がもう一度やりたいってー」
彼の内の炎は、胸を焼き瞳から垣間見えるまでに膨れ上がった。振り向返り、彼の方に向いた和等の目に入ったのは、真っ赤な篝火。
それに照らされた彼女達の頬は、自ずと、紅く染まった。
「これからはもう、半端はしない……もう一局、お願いします！」
皆に頭を下げる京太郎。その本気は、熱気は、この場の誰にとっても心地良いものだった。何しろ皆、そんな彼のことが好きだったのだから。

赤い空の下、自転車を代わりに転がしながら歩む男子にその隣を歩む女子。
昼と夜の隙間。暮れた日に染まり、全てが融和しているかのようで。自然と二人の距離は近くなった。
しかし、それは過ぎたるものがあったのだろうか。兼ねてからの疑問。それが、彼の口から自然と口から転び出てしまった。
「あのさ。自意識過剰じゃなかったら、だけれどさ……和って俺のこと、好きなのか？」
「好き、ですよ」
「それは嬉しい、な」
こんな自分でも、と口走る彼に、少し意地悪に彼女は笑んで言う。
「今日は京太郎君がもっと好きになりました。それまで格好悪かったから……ちょっと、ですけれどね」
「そっか……」
直ぐに答えなければ。そう思っても彼の口は中々開かない。
幾ら以前感情の大小で決めたつもりでも、迷いは、確かにあったのだ。想いの深み。そして、恩に愛だって参照できた。
焦りに追われず、心底真面目に考えた時には、好きを比べるのも存外難しくなるものである。そう、彼は痛感していた。
「……返事は後でもいいか？」
「この場で直ぐに答えられたら、むしろ信じられませんでしたから、いいですよ」
そうですね、ただ、夏が終わる頃までには答えが欲しいです、と言う彼女に、彼はああ、とだけ答える。
彼のはにかみを見て、彼女は目を細めた。

第十五話　勝っちゃうのよね

竹井久は、人誑しだと言われたことがある。
キセルの煙と共に吐き出されたその言葉の通りに、少し悪ぶっていたその昔から学生議会長に選出され麻雀部を率いる今まで何をしなくとも久の周りには自然と人が集まっていた。それこそ一年の頃の部室の中以外で彼女は孤独を感じたことはない。
「でも須賀君の方がよっぽどよね。いえ、あれは女誑し、と言った方がいいのかしら？」
だが、その程度。京太郎のように無自覚に異性を大いに振り回す、そんな台風の目になどなった覚えはなかった。
もっとも、久とて、自分が影にて綺麗だともてはやされていることは知っている。けれども、お互い集めている思いの強さには、随分と違いがあると感じていた。
「気づけば目に入れてしまうくらい好きと、その人しか見えないくらい好き、は好きの深度が全然違う。後者ばかり集められるのは才能というよりも、最早呪わしくすらあるわね……」
八十デニールの繊維が集まり足を覆っている、そんなタイツの暗さを知らずに見つめながら、久は呟いた。
縁も強すぎれば邪魔になる。少し前まで、恋情ばかりを集める少年は、糸に縛され身動きを取れないようになっているようだった。
それが変わったのは、再びあの屈託のない笑顔を見られるようになったのは何か。それを知っていながら、久は笑う。
「やっぱり、和に任せて良かったわね」
シンプルな内装の私室にて、いやらしくない程度に口角を持ち上げながら、久は直近に巡らせた策の成功を喜ぶ。そう、京太郎のこころ浮つかせていた事情の仔細を和に教え、背中を押させたのは、彼女だったのだ。
周囲を見回して真っ先に気付いたのは、欲しがり二人に、臆病者一人。だがそれらを無視して、微笑んで見守るその他の彼女と久はわざ

と、目を合わした。そして近くに寄ってから、口を開いたのである。
恋情は一様に、思わず溢れてしまうほどに強いもの。それでも、それを成就させる方法は様々。久のように、手段を選ぶものも居る。
将来の夢は、お嫁さん。和がやりたいのは、甘い、悪く言えばままごとのような恋愛だったのだ。強引なのは、希望に合わない。故に、彼女は肝心のところで必ず一歩引くのである。
己の麻雀観についての会話から偶々それを知った久は、京太郎に一等親身なカウンセラーとして和を使うことにした。
謀は、竹井久の得意。友達というにはまだ浅い、年下の恋敵。そんな相手を利用するのに躊躇いは、あまりない。もっとも、互いが互いを利用していることは察しながらの情報譲渡。
京太郎を思う心は交錯し、そして結果的に彼を救った。
「さて、普通にやっても多少は勝機が出てきたのかもしれないけれど……」
悩むばかりであった京太郎の心には余裕が出来たのだ。周囲を見回すことだって出来るだろう。もしかしたら、意地悪く構う部活の先輩を気にすることだってあるかもしれない。
思うはもしも、もしも。だがしかし、そんな甘い夢想に久が浸ることはなかった。
「もっと悪く、悪く……そうしてから、待ちましょうか」
まだまだ、足りない。悪待ちを好む久にとって、最悪こそ最高の機会。何時か訪れるであるだろうその時のために、彼女は今日も昨日も策を巡らす。

「……私、人間関係が得意とは言えないの。同年代のお友達も、少ないし」
「ふぅん……それは、信じがたいことね」
それは、少女と少年の想いがとっ散らかった日。待ち合わせの時間通りにｒｏｏｆ―ｔｏｐへと訪れた久が見たのは、喧騒の中心で憔悴した様子の京太郎に、泣き腫らした福路美穂子の姿だった。

常連客の険のある視線と飛語を嫌った久は軽く事情を訊いた後に先ず京太郎を帰らし、そして奥へ隠れてしまったまこの面倒を見ている彼女の両親に説明をしつつ断りを入れて。

そして、顧問と後輩に話をしてから悲しみを全身で表していた美穂子を引っ張って、近くの喫茶店へと場所を移して仔細を把握した久は、彼女の自虐にそう呟くように応えた。

「ウザいと言われるのも、きっと、仕方ないのよ。私、適切な距離を計れていないことがあるから……」

「そんなことはないでしょう。優しさは、反省するべきものではないわ」

そして、続いた言葉に、久は断言をする。伏せていた左目を、つい美穂子は持ち上げた。

事情を耳にしただけの久にだって分かる。美穂子は優しく、良くも悪くもそれに過ぎていた。そして、時に過ぎたるものは毒になるもの。

確かに、うざったいときも、邪魔なこともあるだろう。今回のように、距離を近くし過ぎて問題が起きる場合だって、勿論あった。

だが、それは久が羨ましくなってしまうくらいの長所でもあるのだ。思わず、笑んで彼女は彼女に言う。

「貴女が隠しているサファイアの青色みたいに、綺麗なところの一つよ」

「やっぱり貴女は、上埜さん……」

「今は、竹井久、だけれどね」

あの日と同じ言葉を再び受けて開いた美穂子の右目の異色を、久は喜びと共に認める。相変わらず、嫌になる程綺麗だと思いながらも。

美穂子は上埜久という少女を意識し続けていた。最初は敵わないからその姿を、目を見開いて追いかけ、それから交わした会話に魅了されて。

ずっと、久の姓が上埜から竹井に変わったことすら知らないままに、美穂子は彼女が放った言葉の真意を求めていた。

再び出会えたこと、それがあまりに嬉しくて、つい美穂子は両の二

色の宝石を煌めかせる。
「あ……ごめんなさい！」
「泣き虫ねえ。ほら」
　苦笑してから久はハンカチーフを取り出し、渡す。親切受けることを躊躇う美穂子に促しを付け足すことを忘れずに。
　拭われる、その手が飲み終えたアイスコーヒーのグラスに当たることで、氷がカラリと音を立てた。
「貸してあげるわ。何時か洗って返して頂戴。後で機会を作るから」
「嬉しいわ。また、会ってくれるのね」
「ええ。だって、福路さんは曲がりなりにもまこに京太郎に良くしてくれようとしてくれたし、貴女が覚えていてくれたように、私も福路さんのことが気にかかっている。出来ることなら、友達になれたら嬉しいわね」
　喜怒哀楽の波は美穂子の中でまた盛り上がり、彼女の口元に笑窪が二つ。泣き顔よりもやはり微笑みが似合っていることを確認し、そして久も笑みを作る。
「ありがとう。友達、久しぶりだわ。出来れば、私のことは美穂子と呼び捨てにしてくれないかしら」
「いいわよ。だったら、私のことも、久って呼んで」
「わ、分かったわ」
　言われ、美穂子は途端に狼狽した。その躊躇い振りから、承諾してはいるがこれは中々自分から言いそうにないな、と久は思ったが、今回そこは突かずそのままにしておく。
　美穂子が落ち着くまでたっぷりと待ち、改めてから久は本題を切り出した。
「それで、美穂子」
「な、何？　……何だか照れるわね」
「切り出した貴女が恥ずかしがってどうするのよ。……まあ、それはいいとして。美穂子、貴女須賀君のこと、好きよね」
「え？　ち、違うわ。だって、そんな。彼のことが好きで、それでいて染谷さんを唆すなんて、悪い人みたいじゃない」

美穂子は子供の駄々のように、いやいやをする。それもそうであろう。自身に悪心を認められるほど、彼女は強くない。
優しく、脆い。それが何処までも美穂子の基本色。勿論、そうであるからには、彼女に二心はなかった。
ただ、美穂子は割り切っていたのだ。自分にはもう関係ないのだ、と。
「分かってる。貴女、既に諦めているでしょ？」
「……そう、ね。どうして、判ったの？」
「貴女の性格と須賀君の性質からの、予想ね。でも……私はそれが勿体無いと思っているのよ」
「勿体無い？」
首を傾げる美穂子に対し、妖しく微笑んで、久は応える。
「貴女ほどの相手が敵じゃないと、絶対に私が勝ってしまうじゃない」
口をぽかんと開いたままの綺麗な少女の前で、あまりに楽だとそれはそれでつまらないわ、と悪い顔をした久は繋げた。

「……それで、京太郎の出禁はもう解けたのかな？　ｒｏｏｆ―ｔｏｐに行っても京太郎の顔が見れないとなるとつまらなくて足が向かなくてね」
「一週間で終わっているわ。結局あれは、須賀君を悪意から守るためのものだから」
「下手をしたら看板娘を泣かせた青年が常連さん達の手で私刑にでも合うとでも思ったのだろうかね。常連公認カップルの痴話喧嘩なんて、犬をも喰わないものと思うけれどな」
「そこに美穂子……更に別の女の子が絡んでいたから。嫉妬心で須賀君を見る目もあって、そういうことではないのだと皆に説くのが大変だったみたい」
電話越しに、二人きり。師弟ですらない年の離れた友人同士は、話をする。くゆる煙が空間に大いに互いの違いを演出するようだった。
一方、白色を吸い込んで吐き出した彼女の口は、そのまま歪んで弧を

描く。
「ふふ……そうか。全く、染谷夫妻は京太郎を随分と、買っているな」
「本当に。今度の合宿の話をしたら、部屋割りに注文を付けてきて、困ったわ」
「男女別にしろ、とか？」
「違うわ。迂遠な言い方だったけれど、要はまこと須賀君を同じ部屋にしろ、って」
溜息が、呑み込まれたのを相手は感じ取る。反して、笑い声を呑み込んだ彼女は言う。
「……それは無理な相談だろう。因みに、合宿の引率に顧問が来られたりはするのかな？」
「何処かの学生会議長さんが余程信頼があるのでしょうね。中学の頃の内申の悪さも忘れてお前なら大丈夫と先生は丸投げしてくれたわ」
「なるほどねぇ。大人の目もない気楽な合宿か。それなら私の出る幕はなさそうだ。だが、それでは困るのではないかな？」
「困るって？」
その疑問符は、ただの体。次の言葉を引き出すための、釣り針にすぎない。しかし、年上の友人は、大げさなチョーカーを空いた手で弄くりながら、平気で予定調和を続ける。
「このままで、勝てるのかい？」
大丈夫だろう、そう思いながらも、しかし友のために彼女はそんな疑問を紡がずにはいられないのだ。
「勿論。靖子に言われるまでもなく、崖っぷちの最悪の位置に居るから大丈夫よ」
「久、普通ならば負けるつもりかと問うべきなのだろうが……お前は本気で勝つ気のようだな」
「そうね。この合宿で、決めるつもりだわ」
「ふふ。頑張るんだな」
「ええ」
言葉少なく意味深に、笑みは交わされた。二人の思惑、一致しながら。

ジャンケンはどうにもつまらないと、久はそう思う。最優の結果を得てはみても、過程は酷く単純で面白みに欠けていて。
麻雀漬けで疲れ切った頭で他の勝負事を誰も思い付かなかったとはいえ、しかし他に、例えばダイスの出目を比べ合うのでも良かったのではないかと、そう考えなくもない。
「部長」
だが、そんな愚慮を吹き飛ばすかのように、低い声が心地よく久の耳に響いた。そう、覗きの監視という無理矢理な名目にて皆で設けて奪い合って折角得た京太郎と二人だけの時間を大事にしなければ、と思い直す。
「何かしら？」
見れば年下の彼は、真面目に牌譜の山へと向かい合っていたようだ。思わず久は座椅子に預けていた身体を彼へと向ける。
少しくたびれた様子の金髪長身が、むしろ大人びた雰囲気のものにすら見えてしまうのは、惚れた弱みなのだろう。
「ここぞというときに見せる悪待ちが目立ちますけど……部長って、何時もは綺麗な手を作りますよね」
「そうね。別に、こっちのやり方に自信があるという訳ではないのだけれど、基本を守ることも大事だから。……須賀君は、もっと奔放に打つものと思った？」
「まあ……」
頬を掻きながら、京太郎は言葉を濁す。それを見て、久は頬を緩める。
久は、京太郎の前では特に、型に嵌まらない振る舞いをしていた。それをちゃんと認めていたのだと解して、彼女は笑うのだ。あの時彼に評されたように、可愛らしく。
それこそ、まるで美穂子のように微笑みながら、久は話を続ける。
「同じ待ちばかりしていては、相手も騙されないし……それに、待っていられなくて。優希も和も早くってね」

「ですねぇ、あいつらと打つと食う暇も殆どないです」
「悠長に待っていたら、まこには対策されて須賀君に流れを奪われてしまうし。それに、咲なんて気軽に避ける上に嶺上牌で和了っちゃうから」
久は、悪待ちと相性の悪い面子ばかりよね、と零す。
そんな反応を軽い感慨を持って横目で見ながら、京太郎は頭を押さえながら牌譜を睨み、改めて彼は自分の中で結論を出した。
やはり、竹井久は強者であると。
「それでも、部長が綺麗に打っている時の勝率って、かなり高いですよね」
「あら、気付いていたの？」
「それはもう、皆知っていますよ。だからこそ、和は部長の悪打ちを嫌うんでしょうね。そんなことをしなくても、勝てるのに、って」
「そんなこと、ねぇ……」
「部長？」
小気味の良い応答が、渋る。それが気になり京太郎が紙束から目を話すと、立ち上がった久が物憂げに近寄る姿が目に入った。
年の数は二つ離れているばかり、しかし近くの大人気が、少しだけ京太郎の胸を高鳴らせる。
「一人で過ごした一年間、私も何もしていなかった訳でもないの。ツキがなくても、能力を使わなくても、打てるようにはしているのよ」
更に京太郎に近寄った久は、書かれた今日の牌譜を指でなぞった。そして炭素が指先に付いたことで掠れたその綺麗なタンヤオ手を、爪で更に詰る。
「でも、付け焼き刃を信頼するほど、私は素直ではないの」
後付とはいえ、その刃は鋭いものがあった。それこそ、久は普通であっても後の県予選にて安い手とはいえ六回連続で早和了りをし、少し前の東場の優希に泣き言を口にさせる程に速攻で手を作れる程の腕前なのである。
だが、足りない。マトモでは決して勝てないあの圧倒的なチャンピオンの闘牌を思い起こせば、頂点に手を伸ばすということがどれだけ

の難度か判るものだったのだ。
「牙を抜かれた虎、ではないけれど。私は自分の一番の武器を使わないと、安心なんてとても出来ないわ」
「一番の武器……」
意外と、緊張し易い久は、自分の中で得た自信を大切にする。目の前で憂慮している様子である愛おしい京太郎によってもたらされたものであるから、それはまた更に。
しかし武器を得たばかりの京太郎の懊悩は存外深く、数多のやり方の中で一番を持たない彼は、何かヒントを得ようと、口を開こうとした。
「でったじょー！」
その時。風呂から出たことを知らせるために高く響かせた優希の声が彼らへと届く。
半端な口元は改められて閉じてしまい。京太郎が選ぶチャンスはこれで一つ、潰れた。
「優希ったら、これじゃあ、他のお客さんの迷惑になってしまうわね」
「本当ですね。後で叱らないとなぁ……」
「ところで、話が変わるけれど。――――須賀君って、咲のこと、好きでしょ？」
普段が帰ってきた安堵。京太郎のその隙を突いて、久の言葉は鋭く突きつけられた。
驚きに、沈黙が広がる。誤魔化そうか悩みながら京太郎が恐る恐る、振り向いてみると、紫の瞳が側にて瞬いていた。あっという間に、彼は呑まれる。
「うっ。それは……その……」
「部長命令よ、答えなさい」
「……はい」
「ふふ、冗談だったのに、須賀君ったら真面目ね。でも、それなら二人は相思相愛じゃない」
様子で判っていたけれど、と言い、何処か久は嬉しそうにした。
それはまるで年下カップルの誕生を素直に喜んでいる先輩のよう

で、祝福されているつもりになった京太郎は愚かにも警戒を再び薄くする。
「後で二人きりの買い出しの機会を設けるなりして、チャンス、作ってあげましょうか？」
「それは……」
「ふふ、直ぐには言えない、か。まあ、焦ってもいいことないとは思い知っているでしょうからね」
「その節は本当に……」
「はいはい。気にしない気にしない」
　そのからかいも何時もの通り。全てを普段通りと受け取ってしまった京太郎は、紫色の奥に潜む暗さに気付くことはなかった。
　だから、ただ感謝を表すために、頭を下げる。だから京太郎は、久に浮かんだ嗜虐的な色を見逃してしまったのかもしれない。
「ありがとうございます。なんだか、自分の中で想いが明確になった感じがします」
「それは嬉しいわね。そろそろ皆帰ってきそう。私も入浴準備をしようかしら……あ、そうだ。須賀君」
「何ですか？　用意するなら退きますし、覗きませんよ？」
「それじゃないわ。――――私も貴方のこと、好きだからね。覚えておいて」
　それは唐突な告白。彼女は言葉で彼の心をきゅうと、痛めつける。
　あまりの刺激を理解できずに停止した京太郎の前で、しかしそんな無防備な想い人に何をすることもなく。
　恋を表立たせることもなく、久はばいばいをして、分かれた。
「冗談……じゃないんだろうな」
　だが、質の悪い嘘ではないと判じてしまった京太郎の心は、しばらく久への想いで占められることとなる。咲に頬を抓られ、普段を取り戻す、その時まで。

「はぁ……」

竹井久は、火照った顔を冷まさないまま、着替えとお気に入りのバスセットを持参しながら風呂場へと急ぐ。
すれ違った恋敵達の訝しげな視線を、手を振り断ち切りながら彼女は人気のない浴場へ身体を隠した。
「これがきっと、一番悪い待ち。普通なら、どう考えても、私に運命が振り向くことはないでしょう。最悪の、状況」
そして、一息ついて、洗面台の鏡へと顔を近寄せる。持ち上がった顔に、影は次第に失われ、そうして最後に明るさばかりが残った。
「でも何時も――――勝っちゃうのよね」
久は自分の勝利を確信して、彼に独り占めしてもらうための自分の中で一等可愛らしい笑顔を試す。
ここに一つ、花が咲き。

「ごめんね……京ちゃん」

そして、何処かで花が散る。

間章　水元

第十六話　間違える

勝者が居れば、敗者もまた存在するもの。殊更、麻雀インターハイ地区予選の一位ばかりが勝ち抜けしていくルールでは、一度で三校も敗北チームが出てしまう。

ワンチャンスにて、一年の努力実力の全てを出さなければいけない綱渡り。学生競技者が往々にして難儀しているそれに、失敗した者たちは溜め息を漏らし、時に涙する。

そんな敗者の中の一人、今宮女子高校三年生、門松葉子は友人のカラオケの誘いにも乗ることが出来ずに、残った会場で一人、呟いた。

「気に食わないなあ」

人の中でこそ楽しめる、そんな性質の葉子を孤独にさせたのは、止めどなく溢れる悔しさ。心だけでなく、朝に決めたはずの髪型にまで乱れを覚えて、彼女は髪を弄り出す。

打ち込んできた麻雀の成果を試す、インターハイに挑むことが出来るのも今年で最後。己の実力に、仲間の腕前に夢は大きく膨らんでいた。それが、一回戦目にして破れてしまったのだ。

意気も何もかも、向かいどころなければ、ただ己の弱さを原因にして当たる他にはない。ちくしょう、と葉子は何度口にしたことだろう。だが、じくじくとした辛さは一向に取れてくれない。

また、胸の内で痛む傷はそれ一つだけではなかった。思い出して、つい立ててしまった爪が、ヘアゴムに小さな裂け目を作ってしまうほどに強く引っ掻く。

「あのチビ、私を見ていなかった……」

自分の目つきが鋭くなっていることを覚えながら、葉子は今日の不甲斐ない闘牌と共に憎き相手の姿を思い出す。

小さく元気な、清澄高校の先鋒。葉子は別に名前までは、覚えていない。だが、その視線が全く向いてこなかったことは、意識されてい

なかったことはよく覚えていた。
確かに、その次元の違う強さは認めざるを得ない。身内と比べて、最速という自負を持っていた葉子が影すら追うことが出来なかった、その早上がりに高打点。
二回連続のダブルリーチには、持っているものの違いをまざまざと見せつけられるような気分にもなった。
だが、それでも敵同士。石ころ相手くらいでも対する気持ちがあれば、まだ救われたのだ。だが、三千九百点ばかりとはいえ、点棒のやり取りをした相手を目に入れながらも清澄の先鋒はこれっぽっちも認めてくれていないようだった。
ここにいない誰かを見つめているような遠い目。対戦相手よりも意識すべきものなどあるのか。競技に対する真剣さに欠けている。つまるところ、まるでナメられているようだ。傲慢さが、葉子には腹立たしかった。
「こんな時、近くに彼氏でも居たらなあ……クソ、別れるんじゃなかった」
備え付けの粗末なソファにごろりと横たわり、愚痴で少しは苛立ちを減らした葉子は、次にスマートフォンを弄り始める。この気持ちをぶつけられる相手、それを探すために。
しかし、先月喧嘩別れした彼氏の連絡先は別離の際に衝動的に消していた。悪口を飛ばし合えるような仲の友人は、遊びの誘いを断ったばかりであって何となく気軽に連絡し辛い。
取り敢えず、メッセージアプリを使って知り合いに、負けた、悔しい、という内容だけを飛ばし、そうして葉子はやることを無くした。
「はーあ……」
身動ぎしながら、ただ時間ばかりが過ぎていくのを感じる。多くの学生が帰り支度をしている様子すら聞くばかりで、葉子は天井を見ながらやる気なくごろごろとしていた。
多方に下着を披露してしまうことすら気にせず寝転がる、いかにも不良な少女に声を掛けるものなど、そうはいない。
そんな自分の見られ方を把握している葉子は、この場を閉めに大人

が仕事でやって来るまでしばらくの間は珍しい孤独に休めると考えていた。
「困ったな……ん……あれ。葉子先輩？」
だがそれでも、深い知り合いであればだらしない格好をしていようが、声を掛けるに難いことはないものだ。
葉子と違って染めたものではない柔らかな金髪が、高い位置で揺れるのが彼女に見えた。
耳に心地良い声色を聞いて、反射的に葉子は起き上がる。
「京太郎」
そして、久方ぶりに呟いたその名に思ったよりも熱が篭らなかったことに、葉子はどこか安心を覚えた。

「決勝まで勝ち抜いた四校の内の二校、龍門渕高校と風越女子は順当。そして私達清澄高校と、そしてもう一校は意外な結果になったわね……鶴賀学園、か」
「見事に、京太郎が関わったと報告したことのある高校ばかりが揃ったのう」
「京太郎は、どの高校の応援をするんだじぇ？　可愛いタコス星人が一人所属している高校とか、オススメだじょ」
「ですって。ふふ。どうしますか？」
「優希の勧めがなくたって当然清澄を応援するさ。俺が皆の頑張りを一番に知ってるんだ。悪いが、他校に目が移るようなことはないぞ」
「京ちゃん……」
団体戦、二回。共に副将戦で終わらせた清澄高校。無名校の突然の飛躍に、俄然注目度が上がる中にて、等の彼彼女らに良くも悪くも変わりはなかった。
部内唯一の男子、須賀京太郎を中心として和気あいあいと。半ば程度でトバして終わらせたその時間の余裕を、皆揃って雑談のために使う。
楽しくも、嬉しい結果まで付いてきた麻雀の後に、一等好きな人と

の触れ合いの時。そんな幸せを長いものにしたいと思ったのは誰からだろう。先んじてその方策を思いついたのは、久だった。
「ねえ皆。ちょっと夕ご飯には早いかもしれないけれど、後で帰りにラーメンを食べに行かない？　近くに美味しいって評判の屋台が出るって噂なの」
「うー。楽しそうだけれど、今月初めに使いすぎたから、お財布の中身が心配だじょ……」
「なあに。懐具合なんて野暮なものは気にせんでええよ。なあ、部長？」
「勿論、私のおごりよ！　頑張った皆だけでなく須賀君にも応援ありがとう、っていうことでサービスしてあげる」
「良いんですか？　なら、遠慮なく頂きます！」
「やったじょ！」
　大声を上げる優希を筆頭に、奢る側の久も、ラーメンを食べたことのない和ですら笑顔になって、喜色に溢れる場。しかしその中にて、憂い顔が一つ。
　それは、今日この団体戦において、役に立った覚えのない咲だった。彼女はおずおずと、口を挟む。
「あのー……私、番が回ってくる前に皆でトバしてくれたから、控えていたばかりでサポートを買って出てくれた京ちゃん以上に今日、何にも出来ていないのですけど……それでも、おごって貰えるんですか？」
「ふふ。咲。秘密兵器っていうのは、隠れているのが仕事なのよ？　待つことも緊張して疲れるものだし、咲は今日立派に頑張ったわよ」
「そうですよ、咲さん。咲さんが後に居ると思うと私も安心して打てましたし、部長の言う通り、皆の前で打つことさえなければ、対策されることもないんです。決勝まで咲さんの独特な打ち回し方を隠せたことは、むしろ幸運でしょう」
「そ、そうかな？　じゃあ、私も一緒しちゃうね」
　笑顔は繋がり、大きな輪となる。
　咲の不安は、久と和、二人の言葉で直ぐに解消。全員で行くことが

本決定したところで、気になる癖っ毛から手を離して、次期部長たるまこが口を開く。
「これで問題なし、じゃな」
「じゃあ、行っくじょー」
「こら。まだ時間があるけぇ、落ち着きんさい」
「そうね。もう少しゆっくりしていてもいいし……取り敢えず忘れ物がないか確認して、後は会場に何か用があったら先に済ましておいてね」
「分かりました。何か、忘れているものは……」
「京太郎、一日一回以上を約束している私へのハグを忘れてるじぇー」
「さらっと、とんでもない約束を捏造しているな……」
「嘘は駄目ですよ、ゆーき」
盛り上がり、男女の声が入り交じる。手を広げて向かって来る彼女の頭を押さえ付ける彼の姿を見て、皆笑った。
自由時間の雰囲気に、面々は弛緩する。真面目にチェックをする京太郎を、冗談でからかう優希。その横でたしなめる和も本気ではない。
底に流れている恋情の黙認が穏やかに行われるそんな中、咲がそっと久に近寄って、耳打ちをした。
「あ、私ちょっと、お手洗いに……」
「そう。待ってるわ」
別段プライベートなことを目立たせることはないと、さらりと了承は行われる。そして、咲は一人、その場から発つ。
これまで久の前では、京太郎を筆頭に人にべったりであった咲。故に彼女は、咲の迷い癖の酷さを知ってはいても理解していなかった。果たして、迷子の達人ははじめて来た場所で、用意もなく真っ直ぐに戻ってこられるものだろうか。
「あれ……ひょっとして咲、どっか行っちゃいました？」
「ちょっと、一人でお手洗いに行ったのだけれど……」
「あー、それは拙いですね……」
直ぐ後に久が咲の悪癖を知ろうとも、時すでに遅し。急いで探しに

行こうともトイレや付近に、彼女の姿はなかった。
　こうした経緯によって、京太郎達一年生による咲の探索が行われることになる。やがて三人は散開して、それぞれがポンコツ少女の姿を探していく。
「困ったな……ん……あれ。葉子先輩？」
　そして京太郎は、咲よりも先に葉子の姿を見つけたのだった。

「久しぶりです、葉子先輩」
「おひさー。京太郎、こんなところに一人でどーしたの？」
「ちょっと迷子の咲を探していまして……」
「何。京太郎って、まだ宮永の世話してんだ」
「まあ……不本意ながら」
「ふうん」
　元は恋仲になるくらいに縁深かった、門松葉子と須賀京太郎。だがすれ違いによる事件によって二人は彼氏彼女の関係を解消せざるを得なかった。確執こそなかろうとも、彼らは決して真っ当に別れた訳ではない。
　更には、連絡を交わすことすらなくはや三年。会っていきなり会話が弾むようなことはなかった。
　それでも、葉子は京太郎のことが気にはなる。だいぶ前のこととはいえ、付き合ってその恋のために問題を起こすくらいには好きな異性だったのだ。信頼はしているし、万が一何があろうとも嫌えそうになかった。
　なら別に構えることはないかと、当時の京太郎の初心を思い出しながら、葉子は微笑んだ。
「はは。私等らしくないな、これじゃ。前はもっとこう、フランクだったよ。まあ、いいや。この予選会場に居るってことは私と別れてから、京太郎は麻雀部に入ったのか。どこ高の？」
「ちょっと言い難いですけど……清澄っす」
「マジ？　私を負かしたあのムカつくチビと同高か……」

「はい」
　しかし、前の恋人は今や敵方だった。葉子は苛立たしいくらいに強かった、少女のことを思い出す。そうしてから、目の前でどこか小さくなっている京太郎を認めてから、吹き出した。
　どうにも憎めない京太郎の前で、葉子の怒りは相当なものであっても持続しない。そもそも、眼の前の男の子は、当時相当に外れていた自分を受け入れてくれた程、筋金入りの良い子と知っている。だから、恋はなくても好意で笑んでしまうのだ。
「ぷっ。気にすんなって。いや、私はさっきまで気にしてたけどさ。でも、もう良いや。京太郎の前で自分勝手に怒ってるのもバカらしい」
「そうですか……」
　対して、京太郎は恐れ入るばかり。少年は、別離の原因が自分にあると思い込んで、そのことを気に病んでいる。
　結論としては、その考えは半ば見当はずれ。そんな間違いを察した葉子は、少し残念に思う。自分はとうに吹っ切って好き勝手やっていたというのに、この元カレは重りを持ったままだなんて、面白くない。
　つまらなかった前の彼氏から貰ったお気に入りのイヤリングに触れてから、端的に、葉子は言った。
「ホント、気にすんなって。あの時京太郎が悪かったのは、目移りばかりしていたことくらいだったじゃんか。恋を理由にして暴走した私が一番悪い」
「でも」
「でも、も何もなし！　私がもう良いって言ってるんだ。あんなのただの思い出に、しちゃえばいいんだよ」
「思い出、ですか……」
「引きずってると、疲れるぞ？　目の前の相手に優しくするのは良いけどさ、過去のことまで優しく取っておくもんじゃないってーの」
　葉子も拙くともどうすれば良かったのか、あの時のことについて考えたことは沢山ある。けれど、幾ら頭を働かせようともどうしようもなかったのだという結論が出るばかり。是非はともかく、もしもを思

うのは無駄だった。
なら、忘れることはなくとも、昔に責任を覚えることはない。そう、葉子は決めたのだった。
「なるほど……分かりました」
そんな葉子の実感の籠もった言葉に、京太郎も感じ入る。何より、目の前の彼女は笑顔なのだ。その言を信じなくて、どうする。
自分の考え違いを理解して、京太郎も笑んだ。
「何だか、すっきりしました。ありがとうございます。そう言えば、訊き忘れていましたけれどこっちに咲、来ましたか？」
「周り見てなかったから、ちょっと分かんないな」
「そうですか。ちょっと探してみます」
「じゃあな……っ」
そして、笑顔で別れるその予定は、京太郎が葉子に背を向けたことで、変わった。
昔そこに頬を擦り寄せ、あまつさえ顔を埋めて匂いを嗅いだことすらあったからだろうか。前と比べて背中にどこか重りに陰りが感じられた。どうにもオカルトな感覚が起きたものとは思うが、しかし誤っているとは考えられない。
つい葉子は後ろ髪引かれて立ち上がり、京太郎の肩を掴んだ。
「待った。京太郎、お前他にも何か悩んでるだろ」
「それは……」
「先輩が、重りを少し貰ってやる。なあに、良いだろ。別に知らない仲じゃあないんだ」
だから、宮永にこれからあげるはずだったお前の時間をくれと、葉子は頼み込んだ。

門松葉子が須賀京太郎にアプローチしたのは、単に彼が群を抜いて格好良く見えたからだった。二つの年の差なんて考えられないくらいに、その少年の容姿が好みだったのだ。
一番に思い出すのは、告白をした中学三年の冬のある日。

玄関先で京太郎に乗っかっていた粉雪を後ろから払ってあげたその時。柔らかな鈍い金の元ではにかむ端正な顔を覗こんだその際に、以前から彼に好意からかけていたちょっかいは度を越してしまった。

少女は少年に、公衆の面前にて抱きしめ、好きだと伝える。真剣なそれの返答としての頷きが、あまりに軽く行われたこと。それがおかしかったのに、葉子は後で気づく。

その時期の、まだどこか幼かった葉子にとって、付き合うというのは相手を独占することだった。見られないことは意識されていないこと、という考え方はそこから今まで続いている。

だから、お人好し過ぎて、近くの恋人よりも助けが必要な他人に寄って行ってしまう京太郎の姿に耐えられなかった。

自然、喧嘩は幾度も起きる。見当違いの努力として、染め、髪色を同じくしてみても注目してくれることはなかった。むしろ、京太郎は遠くの宮永咲の危なっかしさに注意するばかりである。

理由は判らない。だが常に、京太郎は自分が必要とされることを求めている。それを葉子は知った。

だから、親家族や友人の手で止められてしまったが、自分だけを見てもらうためにと、溜め込んだお年玉を握りしめ二人で駆け落ちをしようと試みた葉子の考えは、しかしそう的はずれなものではなかったのかもしれない。

直ぐに二人離され、時が経ちもはや恋薄れてしまった今。別にあの時の行動は間違っていなかったと、葉子はそう思い出す。

理路整然としたものではなく、むしろ間違っている。恋とはそういうものと、少女は理解していた。

「計り方、間違えてない？」

だから、京太郎がどの告白に応えるのが正しいのか分からず難儀している、という贅沢な悩みを口にした時に、葉子はそう口にする。

「計り方、ですか？」

「うん。京太郎のことだから、待たせた時間とか、相手がどれだけ自分を必要としてくれているか、とか余計なことを色々と考えちゃってるんじゃない？」

「そう、ですね」
「違う違う。恋はサービスじゃないの！」
今だから、葉子は言えるのだろう。少女は笑みを深める。三年前、酷く迷惑をかけた後輩を助けるために、動けることが少し嬉しい。
そう、他を参照なんてする必要なんてないのだ。恋なんて、もっと酷く簡単なもの。

「自分の心が、勝手に間違えるもんなんだよ」

それは間違えてばかりの葉子だからこそ学んだこと。言葉はなるだけ端的最速に。麻雀では引いてしまっても、ここは行くべきところと分かっている。
思いを込めて真っ直ぐに、葉子は京太郎を見た。茶色い瞳が二対、相手を映しあう。
「……そうか。そう、ですよね。良い悪いかじゃなくて、想うんだ。はは。そんなことすら、判らなかった」
「くくっ、よく考え過ぎたんじゃないの？」
「はは。ですねー」
そして、思いは通じた。目を合わせて、二人は笑む。
失敗して恋壊れてしまったけれども、あの時赤い顔を隠しながら頷いて良かった。そう、京太郎は思う。だから今度も、もう迷わない。そう決めた。

今だけではどうしようもなくとも、過去が助けることもある。こうして、少年は答えを得た。

「あ……」
「咲、居たのか」
京太郎はソファから離れる様子を見せない葉子と別れ、探索に戻る。すると、意外なことに捜し物は直ぐ近くで見つかった。
廊下の曲がり角。先に会話していた場からは見えずに声しか届か

ないくらいの位置に、咲は佇んでいた。京太郎は彼女に笑いかけ、手を伸ばす。
「ほら、戻るぞ」
「……うん」
余計な言はない。迷わず咲の手を取り、京太郎は仲間の元へと進んでいく。咲はそんな些細なふれあいが嬉しくも、喜べない。引かれながら、彼女は逡巡する。
それでも、道半ばにて咲は勇気を出して手を離し、京太郎を見つめた。止まって振り返り、優しく目を合わせてくれる最愛の相手に胸を高鳴らせながら、彼女は問うために口を開く。
「咲？」
「……京ちゃんは門松先輩とのお話で、誰が一番か、決めたの？」
「なんだ、盗み聞きしてたのか……」
「ごめんね……京ちゃん」
「別にいいさ。それで一番、か……」
そして、彼も応えるために口を開いた。
「俺は咲が好きだ。でも……」

転がり続けた運命の賽はこうして止まる。一旦余計な熱は雪がれ、そしてもう迷いなくその糸は選ばれた。
かもしたら、その選択は間違っているのかもしれない。けれども、それでもいいと、彼は自分の心を信じるのだった。
紅糸は、清く澄んだ想いによって手繰られていく。

終章　紅糸清澄

第十七話　理屈じゃない

始まりは、恋だった。そして、それは次第に愛とすら交わった。
彼女は彼を、運命の相手、だと思う。それは、どんな出会い方、想いを最初に抱いたとしても、結局彼を好ましく思うのは間違いないという事実から、そう考えたのだった。
この道を進むことに間違いなく、だから迷いはない。そもそも恋は一本道。迷うことなんて、あり得なかった。
様々な種類の注目の中、卓を囲んで、四人。油断ならない打ち手ばかりが揃っている。その中でも殊更二人は、彼女の恋敵とすらなり得る資質を持っていた。
判る。狂おしいまでの恋と、潜めてなお燃え上がる恋が、そこにあることを。意識すれば邪魔になりかねないそれを、けれども余計な情報とは処理することなく、彼女はただ受け容れた。
むしろ、原村和は自分の恋する人が、これだけ愛されていることを、誇らしくすら、思う。
「リーチ」
和は誰より真っ直ぐ進んで、そうして誰よりも速く、牌を曲げた。

「はぁ……」
原村恵は、原村和の父である。親であるからには、最も近くて誰より彼女のことを理解ってやれているもの、と彼は考えていた。
しかし、そんな認識は少しずつ変わって、どうにも分からない今となっている。それは、娘和が東京の病院にて麻雀を覚えてからのことだったかと、恵は考える。
「なるほど、それは私が間違っていたからだったのか」
恵は、画面越しから娘の熱中を見つめ、そう零した。彼女はどこかぽうとした表情をしてもいるが、そこに籠もった真剣さは、極めつけ

のものだと親として感じ取れた。
「麻雀、か。つまらないものだったと、思い込んでいたが……」
麻雀とは、運で決まる、不毛なゲーム。それは、学生の頃にはまり込んで遊び、幾ら頑張ったところで負けて勝ってそれを繰り返すばかりだった経験からそう結論出していた。
そう。決めつけてしまっていたからには、考えることもなかったのだ。自分が置き忘れていた、確かにそれで楽しんでいたという過去の思い出すらも。
しかし、休暇をとってまで娘の応援に足を運んだ会場のどこもかしこも熱を持ち、誰も彼もが悲喜こもごも、思いの丈を顕にしている。それには、熱心にサーフィンに興じていた頃の自分を思い起こさせ、胸にくるものを感じざるを得なかった。
「全く。人事尽くして天命を待つ。そんなもの、どんな競技であろうが一緒だっていうのにな……」
勝ち筋を常に用意できないゲームに捻くれて、確率に身を委ねるに至るまでに切磋琢磨して得た彼彼女らの確かな努力を忘れる。
だがこの場の誰も彼もが懸命で、想いを持っていた。それを、下らないとまで恵は思わない。むしろ、蒙を啓かれたように、思い知っていた。
「……和が東京の進学校を頑なに断ってでも、続けた遊戯だ。そこに、何もないと考えていた俺が、浅はかだったのだろうな」
未だ若いと思い込もうとしていたが、それでも自分はもう四十四歳。自覚していなかったが、老いて頑なになってしまっていた部分もあったのだろうと、恵は考える。
愚かしいまでに、必死になること。その価値を忘れてしまっては、流石に老人だ。恵は頭を振って、反省を覚えた。
「ん……」
その時、視界の端で、恋人つなぎをしながら闘牌が映るスクリーンを見つめている男女を恵は見つける。何となく、微笑ましく思って然るべきそれが、彼には気になった。
「そういえば、嘉帆は、どうにも妙なことを口にしていたな……」

恵は妻嘉帆に、どうにも娘が東京行きに頷かなくて困っている、という旨の言葉を伝えた時。その際に、確かに彼女は言っていた。
あの子も、恋をしたのね、と。
まさかそんな筈は、と一蹴したその戯言。しかし、確かにこうして画面越しで見てみれば、顔を紅くしながら麻雀と親しんでいる和はどうにも面映いくらいに恋する乙女に見えなくもない。
けれども、その場で和と対しているものは、同性と物言わぬ牌ばかり。まさか愛娘が真剣になりながらも心に恋する相手を想い描いているとは考えずに、恵は妙な雰囲気を醸し出す彼女を心配にすら思った。
どこかのセカイの可能性を受信したのか、もしや同性のことが、とまで恵は思考を惑わせたが、そこで再び頭を振って、考え直す。
そうして、今度は娘に負けず、真っ直ぐに前を向くのだった。
「……まあいい。頑張れよ、和」
親は子の応援をする。それこそ幸せな当たり前なのだと、思い直して。

娘に彼氏が出来て、そんな方針を直ぐ様に撤回してしまうまで、後少し。

速く、それだけでなく、迷いない。そして、今やその最速に凄まじい意志の強さから来る強運というレールが加わっていた。
清澄高校の、副将。インターミドル覇者である、原村和。誰もが、この選手が台風の目となると予想した。しかし、実際はどうにもこうにもそれ以上。
数多交じる優れた矛の中で、それら全てを弾いてしまう程の強烈な風を孕んだ、どうしようもないものになるとは、誰も想像しなかった。
「――三本場」
起家の親をドラ絡みの二翻で流して、それからずっと、場の流れは和のもの。
「くっ」

自動的にせり上がってくる牌を見つめながら、龍門渕透華は、奥歯を強く噛み締めた。
このままでは目立つ目立たない、どころではない。血に潜むものから、流れを解すことの出来る透華は、あんまりなまでの持っていかれ振りから、パーフェクトゲームすら予想出来てしまう。
辺りの全ては、無機質な和の場。ネットの中の最強と謳われた『のどっち』。しかし、現に顕れてみれば、それはそんな程度では済まないレベルの怪物だった。
「……これからっす」
しかし、そんな透華の慄きから反するかのように、他の二人、深堀純代に東横桃子はまだ事態を楽観している。特に桃子の消え入るような小さな呟きは、信じる希望を感じさせた。
実のところ、これまでの和の打点はそう高いものではない。未だ満貫以上を和了ることもなく、全ては配牌からの望ましき最短を駆けるばかり。
先鋒にてトップを走ったが、次鋒で大崩れして、中堅にて持ち直し、そうして殆ど平たい場にて多少浮かび上がったというところが、現在の清澄高校の実際。
確かに、これまでは持っていかれている。しかし、いくら優れていてもそれがずっと続くものではない。普通ならば、弛んで失速するもの。
むしろそんな隙を狙い撃つのが得手である桃子は、気配を隠して雌伏の時を続けていた。
「ロン。三色同順、タンヤオ、ドラドラの三本場。一万二千九百です」
「はい……っす」
しかし、そんな楽観も、次の点棒のやり取りにて終わる。打牌を四回も許されることなく、一万二千以上の点数を奪われた、その手傷の痛みによって。
閑散とした和の場の四索を見てまあ大丈夫だろうと捨てた七索は、彼女の嵌張待ちにすっぽりと入った。
それがまた、おかしいのだ。そろそろ、自分は能力によって相手に

見えなくなり始めている筈であるのに。ぼうと力なく見つめていたところに、和に真っ直ぐに見つめ返されて、桃子はどきりとする。
「どうか、しましたか？」
「なんでも、ないっす……」
そこでようやく桃子は気づく。自分の得意の隠形が和には、これっぽっちも通じていないことに。
デジタルにも綺麗に輝く少女の前で、桃子の闇は通用しない。だから、武器を失ったままに普通に打って、自分はこのバケモノと対さなければいけないのだと、彼女はようやく理解する。
「マジっすか……」
それは、絶望的な戦いの始まりだった。

「四本場」
「ふぅ……」
深堀純代は、自分が吐き出した息に、驚きを覚える。それほどまでに、場は静寂に包まれていた。
純代はこれまで和了り続けている和を強い、と思う。ただ、それが手の届かない程度のものだとは考えなかった。
幸い配牌は、悪くない。配牌二向聴ともあれば、もう方針は決まっている。それに、諦めることなんて、教わった試しもない。純代がやってやる、と思うのは当然だった。
「ポン」
だから、どうしても切らざるを得なかった東を親に喰われた後、次に一筒を出した、その行動に悔いはない。
「ロン。一気通貫、ダブ東、ドラ一の四本場。一万二千八百です」
「……はい」
だがしかし、果たして純代のそんな意気すら呑まれてしまう。間違ってはいない。その筈であるのに、相手に点が積まれていく。
それでも、点数がある限り、続けなければいけない。そのことに、純代は決して悲観しなかった。
純代は強豪風越女子高校のレギュラーメンバー。池田華菜や福路

美穂子、そして久保貴子以外にもＯＧ等部活で強者と矛を交えた記憶は多々ある。男子では、須賀京太郎との対局が記憶に新しい。
そんな中で、どうあがいても勝てないことは、多々あった。そんな中で、純代が理解したこと。それは、諦めないことだった。
「……うん」
たとえ焼き鳥になったとしても、それでもチームのために、流す血は少なく。そうするためにも、絶えず目を光らせて当たる。周囲を注視し、何だろうと変化を見逃さないように。
そう、だから異能に馴染みのない彼女でも、気づけたのだろう。
「――――これ以上は、やらせませんわ」
龍門渕透華から発される、寒々しい空気に。

龍門渕透華は『治水』という能力を持っている。冷たい透華、とも呼ばれる龍門渕の血に拠って強敵が現れた際に起きてくる、酷く冷静な彼女の人格が保有する、それ。
冷たい透華が持つ治水とは、河を静かにして鳴くことをさせない、それをまず基本とする。
そして、更に進んだ治水の真骨頂は他家に当たり牌を行かせなくし、更に危険牌の察知を可能とするもの。
引けない、出てこないとあれば、どうやっても透華から和了るということは不可能。他家同士で潰し合うのが、精々のこと。
これを発動した透華は正しく。
「――ツモ」
無敵だった。
早々に和の親を流して、また今度は透華の連荘。
和へと向かっていた流れは完全に停止して、そうして揺り返しの如くに、透華の手牌を良くする。
もとより、透華は和に準ずるデジタルの打ち手。そして、冷静沈着になってしまった彼女に、油断も何もない。
何の起伏もなく、ただ効率的に能力に従って打つ。それだけで透華は堅城鉄壁な、どうしようもない存在となる。故に、次第に彼女の場

に点棒が積み上がっていくのは、当然のことだった。
「――五本場」
本数は意図返しのように、先の和と同じ。しかし、流れだけでなく、能力という強固かつ唯人ではどうしようもないものによって極められた透華の方が、より有利に場を進めていた。
和からも直撃を奪って、そうして順位は逆転。一位を奪取した透華は、それでも喜色を表すことはない。ただ淡々と、打牌する。
「リーチ」
そんな中で、テンパイ宣言の声が響いた。まだ五巡目。実に速い仕上がりである。それでも肝心要の当たり牌が彼女のところに行かなければ、どうしようもないだろう。
和は、今回和了ることは出来ない。そんな事実を冷静に、透華は見つめる。
故に、安心して和の河に一枚ある客風牌を捨てようとした、その時。
「っ！」
全身にその行動を止めるための、怖気が走った。透華が出したのは、北。自分には確かに、要らない牌だ。だが、これを欲している可能性のある存在を、自分は果たして忘れてはいなかったか。
そして、気づけば置いてあった、この千点棒は、誰のものか。
「――ロン。ふぅ。やっと来たっすか……」
しかし、気づいたところで時に既に遅し。ゆっくりと、透華はそっちを向く。驚きに、自分がすっかり熱されてしまったことに気づきながら。
「貴女……」
「リーチ、一発、チートイツ、ドラドラ。五本場で一万三千五百点っすね！」
そう、それは隠形をし、潜め続けていた桃子による和了り。自分の武器がもう一人のバケモノには通じたということに、彼女は笑みを見せる。
絶望的な戦いを続け窮鼠は、無敵に孔を開けた。そして、それは冷たくなった場に熱を持たせることに繋がる。

「ロン」
「ツモ、ですわ！」
「焼き鳥にならなくて、良かった……ツモ」
「ロン、っす」
やがて皆の意気で撹拌した流れは平等に機会を与え、それを逃すほど全員は鈍くはない。
滞った前半荘は嘘のように副将戦の終わりは早々と訪れ、そうして最後に和了ったのは、やはり誰よりも真っ直ぐな彼女だった。
「ロン。ホンイツ、白、西。八千点です。ふぅ……」
吐息はどうにも艶めかしく、和の胸の中でぬいぐるみが歪む。勝ち抜いた。そう、彼女は順当に一位で、大将の咲にタスキを繋げたのだ。
しかし、麻雀が終わり、次に思うのは不純にも、いや純粋にも彼のこと。その場の皆が気を取り戻して、挨拶を交わすまでの僅かな時間、その間隙にも真っ直ぐに想い、和は呟いた。
「見てくれていましたか？　京太郎君」
この時、Ｗｅｅｋｌｙ麻雀ＴＯＤＡＹの山口大介が激写したその瞬間の和の写真は、後々まで高く評価されることとなる。男女問わずに、彼女に見惚れるのが当たり前。そう、それほどに、美しい。
愛らしく、緩んだ笑顔。その時の和は正に、恋する少女だった。

「俺は……いや、俺も和のことが好きだ」
「京太郎、君」
だからその日、和の恋が報われたのは、きっと望ましいことだったのだろう。
勝利に沸く中、麻雀部の皆に遠慮してもらって作った二人きりの帰り道。その意味を察し涙を零す少女を見なかったことにした、その罪悪感入り混じった複雑な心情の中で、それでも京太郎は応えた。
歯を食いしばって勇気を出した男の子の告白に、和はぽうっと、麻雀の時よりもよほど紅くなった頬を自覚する。
直ぐにはい、と言いたくなる口元。しかし、それを優しく曲げて、和は笑顔でこう返した。

「それはひょっとして……私が、貴女の好むような身体をしているから、ですか？」
「いや、まあ。そういうのは……ない、とは言えないのか、俺の場合……でも、それだけで好きになったんじゃないぞ？」
「ふふ。冗談です」
胸元を強調する、という以前からは考えられない行動を取った和に、しかし京太郎は目をさまよわせてから、確りと彼女の瞳に目を合わす。
京太郎の茶色い目に見惚れて、そして彼の言葉に心底安心してから、和は片目を瞑って茶目っ気を出しながら、微笑って返した。
「和って、意外と意地悪なところがあるな……」
「それはもう、大分待たされたものですから、意地悪にもなりますよ」
「……悪かった。でも、その御蔭でやっと分かったんだ」
「何が……ですか？」
長身の彼を見上げて、彼女は首を傾げる。そんな仕草も一体全てが愛おしくて、京太郎は和の微笑みに一歩近寄った。
「好きって、理屈じゃない。タイプだとか、そんなことよりもずっと、俺は和の笑顔が忘れられなかった」
あの日と同じ、黄昏の下。しかし、二人を阻む、関係の鎖は、もうない。ならばと、一歩互いに縮めれば、それは触れ合えるくらいの距離となった。
「和」
「京太郎君……」
和と京太郎は手を伸ばし、お互いを抱きしめる。そうして、二人は真っ直ぐな、一つの影法師になった。
夏迫る清く澄み渡った空の下、ただ一本に繋がった紅い糸。
それが末永く、途切れることがありませんように。

最終話　左手と右手

男女同士の接触が、いやらしい。そうなるのは、どれくらい年を重ねてからであるだろうか。或いは、年齢ではなくその深度こそが大事なのかもしれなかった。

だから、指先触れ合い繋がるばかりの、未だ幼さを残した京太郎と和のそんな初々しいくっつきあいは、どこか優しく周囲に認められる。

「う、何時もよりちょっと視線が多い、ですね……」

「これでもちょっと、か……和は今まで、とんでもなく注目される中に居たんだな。でも、今日からは俺もずっと、一緒だ」

「京太郎君……」

恥じらいを覚えながらも、それでも離れたくない、甘い欲求。香るような赤ら顔の二人の恋慕に、見せつけられた周囲は、注目してからそっと目を逸らす。

睦み合いには遥か遠くとも、それでも恋人同士のいちゃいちゃに、いたずらに割って入るような無粋な輩はそうは居ないのだ。

だからゆっくりと、二人は少し湿った朝の空気を食みながら、進んだ。辺りを二人して見回し、その美しさを再発見することを楽しみながら。

山間に、人が住む。それが進んで切り拓かれた結果、清澄はそれなりに栄えている。

しかしそれでも変わらず坂道多い、清澄高校への通学路。二人並んで歩んでいては、自然と進みも遅くなる。時に囃し立てられながら追い抜かされて、そうして歩みの鈍い、彼女にまで追いつかれてしまった。

誰よりも山頂に近い異能を持ちながら、それでも普段はあまりに平凡に可愛らしい、そんな彼女は二人を見つけてから走って横に並び、笑顔で呼びかける。

「京ちゃんに、和ちゃん、おはよう！」

「ん。ああ、おはよう、咲」
「おはようございます、咲さん」
そして交わされるは、朝の挨拶。好み合う三人、笑顔は三つ並んだ。
のろりと向いた彼の瞳に、喜色満面な自分を見つけて胸痛めさせながらも咲は気丈にも微笑み続けて、初々しい二人を望む。そうして、感想を言うのだった。
「なんだか、二人……こう、見せつけちゃってる感じだね」
「……やっぱり、そう見えるのか」
「うん。かなり目立ってるよ？」
愛らしい見目を忘れて日陰の少女と自分を勘違いしている節がある咲は、彼彼女の眩しさに目を細めざるを得ない。
ああ、こうなりたかったな、と思いながら、ずっと離れない二人の指先の接続を恥ずかしく思うのだった。
けれども、当の二人、特に和はそんなこと素知らぬ顔。なにせ、真っ直ぐな彼女には引け目など存在しない。愛を示すことに、なんら照れるところなどないのである。
だから、和は京太郎と繋がった左手を持ち上げて、零れるような笑みで、咲へと言った。
「ふふ。別にこれくらいなら風紀を乱す程、ではないと思いますよ？
親子のそれより、むしろ控えめなくらいで」
「それは、そうだけれど……」
けれども、と咲は続けようとして、はっとする。その後に自分の目に障るから、という文句しか用意出来ていない自分の浅はかさに、驚いて。
胸の痛みはずきずきと続く。それが嫉妬心と理解して、咲は醜い自分に溜息をつくのである。
「はぁ。駄目だね、私。全然京ちゃんを吹っ切れていないや」
自分に素直に、それでようやく咲はもやもやを一部だけ消化出来たような気がした。そうだ、好きで、愛していて、それは未だに変わっていないのだ。
違ってしまったのは、彼と彼女の関係性くらい。もうその間に割っ

て入ることが出来ないことが、とても寂しかった。
「……そうか」
軽々と慰めの言葉をかけられない、京太郎。だから、己の選択の結果を受け止めて、どこか痛々しい様子の咲を黙って見つめる。
幼馴染と言っていいくらいに身近に過ごして来て、それが一挙に離れてしまったことに、痛痒はあって当然。これまでとはいかない、それは京太郎であっても、寂しかった。
思わず右手にぎゅっと力を入れてしまった彼に、優しい力が帰る。振り向けば、そこに最愛がどうにも優しげに微笑んでいた。
和は、誰よりも幸せそうにしてから、一歩咲に向かう。その力強さに、京太郎は少し揺らいだ。
「咲さん」
「なあに、和ちゃん……」
目の前で、和と京太郎は寄り添い合う。より近くで見せつけられる、恋人関係。それに対して、眉をひそめるだけで済んだことに、咲はほっとする。
今すぐそこを退いて欲しい。飢えに、喉が鳴る。好きで好きで、愛していて、それでも独り。そんな無様はもう嫌だったのに。
けれども、彼が選んだのは彼女。みっともなく京太郎に縋り付くことを我慢できたのは、微かなプライドか恋を汚したくない気持ちのどちらだっただろうか。
自分の気持ちが醜く歪んでいようとも相変わらずに、和は綺麗なままだ。正直なところ、嫉妬心からどんな言葉も真っ直ぐ受け取れないだろうから、あまり続きを聞きたくないな、と思う。
けれども、意外にも和の真っ直ぐな言葉は、咲へと届く。笑顔美しいままに、彼女は話すのだ。
「私、咲さんにずっと嫉妬していました」
「え？」
「羨ましかったですよ。どうして、私よりずっと近くに咲さんがいるの、って何度思ったことか」
天使のような少女が語るのは、醜い心。多く過ぎ行く登校中でも、

停まっている男女気にしてちらほらと、それを見つめて歩みを止めるものが増えている。
しかし、誰彼に聞かれようとも、和には関係ない。隣で京太郎が固唾を呑み込む音ですら、信頼から気にするところではなかった。
ただ、咲――友達――の迷いを断ち切ることこそが大切だったから。そのために、正直に悪心だって晒すのだ。そうして、少女の悪を、許す。
「良いんですよ。同じように私を恨んでください。京太郎君を好きに、愛してください。それでも、いい。……私はそんな咲さんだって、好きですから」
「和、ちゃん」
これは、本当にこの世にあるものか。咲は、その後ろに輝く羽根を幻視する。
頑ななところばかりが目立っていた少女は、少年と出会い確かな芯を得た。そして、曲がらないことを長所とする。
和は綺麗ごと、そればかりでなく、悪心ですら受け容れて、友と共にあることを決して諦めない。自分達だけが幸せ、それだけでハッピーエンドではないでしょう、そういう思いが彼女にはあった。
そして和は何を思ったのか、表情を変えた。それが悪戯っぽい笑みであると咲が気づいた時。彼女は続ける。
「でも……」
「でも?」
「私は決して、京太郎君を、離しませんから」
「うおっ」
左手と右手、繋がったそれを持ち上げ胸元へと引き寄せて、和は大いに、綻んだ。
咲は、思う。彼女はこんなによく笑う少女ではなかったのに、と。けれども、それを開花させたのは大きな胸の近くに手を寄せられたことで、目を白黒させて鼻の下を伸している、だらしない想い人。
ああ、それは自分も同じだったなあ、と思い、ようやく素直に咲は笑んだのだった。

「もうっ！」
彼がこんなに好きで、彼が好きな人だって、好きで。なら、もう仕方がない。二人の幸せを願うしかないじゃないか。
涙を流した昨日は忘れられない。けれども、今日は、大好きな人の隣で笑おう。
「あははっ」
笑い、彼女は空を見上げる。緑の額縁に白くグラデーションされた青が、あまりに美しい。そして、思えば周囲は太陽のおかげできらきらと輝いていて。
ああ、世界はこんなに綺麗だったのだ。そんなことを、咲は久しぶりに思い出した。

「うう、だじぇ……」
「ぐす……」
「やれ、おんしらも辛い立場じゃのう……」
旧校舎の最上階を支配する、広い麻雀部の一室。居心地の良さが自慢のその部室に、泣き声が響いていた。
いかにも居心地の悪いそんな中で、まこは丸くなって涙をこぼす下級生の優希を撫でながら、上を向いて堪える上級生の久の二人を気にする。
まこは正直なところ、自分も泣きたい気持ちがあった。けれども、可愛くない自分が選ばれることはないと思い込んでいたから、何とか我慢出来ている。
足元に冷たい涙を零す優希を優しく撫で、そうして椅子に座って必死に耐える久を、まこは優しく見つめた。
「悲しいじょー……」
「よしよし。それにしても、学生議会長がフケていると知られたら、おんしを嫌う先生共のええ弱みになってしまうじゃないんか？」
「分かっている、わよっ……」
まこの軽口に優希はびくりとしたが、久は応じない。
自棄になっている、とまこは感じる。けれども、それも仕方ないだ

ろうと、思う。なにせ、フケているのは、自分も一緒なのだから。
そう、気乗りしない彼女らは、久主催のバカップルへの愚痴の会を開いたがために、自主休講していた。つまり、授業はサボり。
昔に散々したのだから、悪いことはもうしないの、といい子ぶっていた久はどこに行ってしまったのだろうと、誘われたまこは思っていた。
「愚痴は、どうしたんじゃ？」
「ぐすっ。そんなの、建前に決まってるじゃない……」
「本心は、わしらに慰めて貰いたかった、と。相変わらずおんしは甘えん坊じゃのう」
「じぇ……」
好きから嫌い。そう単純に変わりはしない。彼女ら三人だけの愚痴の会が始まり、そうして直ぐに、すすり泣きが起きた。
誤魔化すためによく笑顔を作ってはいたが、とても吹っ切れていなかった優希が、堪えきれなくなったのである。
やがて、その泣き声につられた久も涙声に。瞬く間に、場は愚痴どころの雰囲気ではなくなった。そんな風にして、残ったまこが二人をあやす、今がある。
みっともなく涙流したくないがために久は黙し、その隙間に優希は喋り始めた。
「本気で、好きだったのに……こんなの、ないじぇ……」
「そうじゃのう」
「染谷先輩も、京太郎のこと、好きだったんだじぇ？　どうして、そんなに……わぷっ！」
「あほう。わしだって辛いんじゃ。じゃが、わしはもう泣かんって決めちょるからのお……」
今まで遠慮なく近寄れていた親友が、恋する人が、遠い。それはとても辛いこと。まこは優希の気持ちが多少は分かる。
けれども、それは多少止まり。確かに、似たように辛い。けれども、前のように泣き喚くよりも尚、まこにはやりたいことがあった。
「わしは少し前に諦め、泣いたんじゃ。その時、随分と皆に優しくして

もらった。だから優希。同じように泣くおんしに、わしは同じように優しくしてやりたくてのぉ」
「染谷、先輩……うううぅ……」
まこは決して、忘れない。駄目な自分を慰めてくれた誰彼の優しさを。そして、恩返しをしようと発奮したその時、他の困った人に優しくしてあげて、と言った彼女のことも。
故に、可愛い後輩を撫であやしながら、可愛い先輩にも優しく声をかけるのだった。
「部長。おんしが悔やむのは、よう分かるよ。もう目頭まで来とるんじゃ、思い切って泣きんさい」
「……嫌よ……嫌！」
しかし、頭を振って、久はまこの厚意を拒絶する。
そうして、涙溜め込んで紅くなった目を大きく開いて、熱病にかかったかのように震えながら、久は言う。
「まだ、未だ大丈夫……まだ、待てるわ……好きな人に彼女が出来た。これって最悪じゃない！　一番悪く待てるわ……これなら、これならっ！」
恋は人を狂わす。それが深ければ深いだけ、根こそぎに。或いは間違えてしまうくらいに、少女は一途。
このまま、違えてどうなるのか。以前の自分より今ならよっぽど悪いことが出来ると、久はほくそえみ、そうして頬から涙がこぼれ落ちた。
狂笑。けれども、そんな久の駄々を、まこは両断する。
「……久。もう待つのは終いじゃよ」
「っ、うう……うー！」
恋し合う二人は付き合って、お終い。そんな喜ばしい出来事の横で、選ばれなかった少女は泣く。
啼いて嘆いて、そうして自分の今までを回顧し、それを足蹴にする。そう、悪く待つなんてふざけたこと、しなければ良かったのに。そう、久は考えてしまった。
「こんなことなら、当たって砕ければ良かった！　こんなのただ、惨め

なだけじゃない！」
素直に恋に挑んだ京太郎に対して、捻くれて恋愛の駆け引きにそっぽを向いた自分。それが以前と同じく満足いかない対照的な結末になるというのは当たり前。
けれども、信じていたのに、肝心な時に裏切られるなんて。こんなの、と久は自分の賭けの全てを否定しようとした。
「――同じ、じゃよ」
「……え？」
けれども、まこは、不可思議なことを言う。しかし、真剣な声色のそれに、久は惹きつけられる。
「おんしはおんしなりに精一杯をやった。ぶつかろうが待とうが、それで駄目な結果悔しいのは、仕方ないもんじゃ」
まこは目を瞑りながら、そう言った。やるべきことをやれなかった自分の、その無念を塞いで。
一つ年下の親友の痛々しくも優しげな、そんな様子に、ついに久は決壊する。
「うう、うわああん！　私私、好きだった、好きなのにい！」
「分かっちょる。わしだって好きなままじゃ。けれどもこうは考えられんかの？　好きな人が幸せになれたこと、それが一番だ、って」
こんな言葉は、綺麗ごと。そんなのはまこにも分かっている。でも、そう思いたいのは間違いない。
涙しながらぐずる皆。その横で、彼女はただひと言だけ、本心を呟いた。
「……京太郎。絶対に、選ばなくて残念だったって思わせるくらいに、私は綺麗になってあげるからね」
それは、誰の耳にも聞こえない、自分のためだけの宣誓。
涙を一筋流し、彼女たちはまた一つ、綺麗になった。
秋風たなびく曇り空の下。麻雀ｒｏｏｆ―ｔｏｐの前にて、お気に入りのキセルをふかすことすらなく、ただ藤田靖子は佇んでいた。

寒さを覚えて震えることすらもなく、ただ空を見上げるばかりの師。いいよと言われてもどうしても気になって、弟子が付いてくるのは当たり前だったのかもしれない。
気づけば靖子の横には、京太郎が立っていた。微笑んで、彼女は彼を受け容れる。
「……今日の麻雀、どうしたんですか？」
「なあに、ただ好き放題やっただけ、さ」
「……確かに凄まじい捲くりの技術を持っている靖子さんなら、最初から仕掛けて揺さぶっても、悪くはないでしょうが……」
「けれども、負けた」
「……はい」
風を覚えて、立ち位置を変える。そんな彼女に対して行っているのだろう所作を、自分にも適用してくれた。
それが、むず痒くも嬉しくて悲しい。改めて、靖子は自分が京太郎という青年にやられてしまっていることを、再確認する。
「流石に、インターハイ個人優勝を共に果たした高校生カップル相手には敵わないと、再確認したよ」
「そんな……」
「事実さ」
師から初めての勝ち星を拾った京太郎。しかしその面に喜色は少ない。
それはそうだろう、自分は本気であったが、師はそれ以上に死に物狂いだったのだ。それを、示し合わせていなかったとはいえ、愛する人と共に下してしまったのは何とも後味が悪い。
落ち込んでいないか気になり見に来たが、しかし、靖子は先の戦いなんてどこ吹く風。京太郎の前で、優しげに笑んですら見せた。
やがて、また強い風が吹く。靖子は風に髪を流しながら床に置いたバッグをがさごそ漁ったと思うと、中からあるものを取り出し、そうして京太郎に渡した。
「これ、あげるよ」
「わ、なんですかこれ……首輪？」

それは、大きな犬を繋げるための首輪。師匠の目線がついと、自分の首元に一度向いてから離れたことに、京太郎が気づかなかったのは、幸いだろう。

雲は流れて、光が差し込む。靖子は、こともなげにそれを渡して、言う。

「将来、君たち二人が結婚すれば家を持って、或いは犬猫でも飼うこともあるだろう。気が早いが、その時のための餞別さ」

「これ、大型犬にしか付けられなさそうなサイズですが……まあ、有り難く頂きます」

よく分からないが、渡された。それが師匠からの贈り物であるからには、大事にしなければならないだろう。

場を辞して、保管するために中へと戻ろうとする京太郎。その背中に一つ、声がかけられた。

「京太郎」

「はい？」

ひと言に応じ、弾けるように全身を向けてくれる、弟子。それに師匠として、靖子は向かい合った。

何となく、これからはキセルを控えようかな、と考えながら彼女は彼に声を掛ける。

「成績が上がったせいか予定が混んでいてね。これからはあまり構ってやれないが……頑張って、いい男になれよ」

「分かりました！」

そして、気合を入れながら、去っていく前よりずっと広くなった背中。それに思わず伸ばした手を逆手で留めて、再び靖子は京太郎に背を向けた。

後ろでは、幸せな恋人同士の会話が繰り広げられているのだろう。揶揄する周囲の騒ぎ声が響く。

それに、幸あれ、とは思う。思いながらもやはり、こんな独りは寒かった。

「さあ。私は、最後までいい師匠をやれていたかな？」

思い出したかのようにぶるりと震え、そうしてバッグを掴んだ靖子

は独り、歩き出す。
彼との経験は、素晴らしいものになった。それに、未だに指先には炎がちろり。心の繋がりは未だにあるのだろう。
けれどもそれは未練。手を強く握って、それをかき消し。やがて靖子は喧騒に消えた。

「京太郎君」
「和」
向けられた左手に、応じるのは右手。彼と彼女はずっとそう。
「貴方」
「お前」
結婚して、子供が沢山出来て、何時かくたびれてすっかり細くなってしまってからも、それは続いた。
「……あなた」
「おまえ……」
左手の小指と右手の小指。そこを繋ぐは紅い糸。
最期に二つ揃って途切れるまで、清く澄んだ想いよずっとずっと幸せに。

紅糸清澄、了。

番外　異織

番外話①　笑顔の材料

負けるのが楽しいというのは、ありえないことだ。そう、片岡優希は思っている。

確かに辛酸舐めて、勝利の価値を知るものだとは思う。けれどもどうしたって、負けるのは面白いことではない。それが、好きな人達相手であっては尚更だ。

出来れば、格好いい姿を見せつけたい。自分がおつむに背どころか舌すら足らないことは分かっている。でも、頼ってほしいし、任せて欲しかった。足りないで迷惑ばかりかけているのは、嫌だったから。

それでも、大好きな彼はそんな優希だって好きだと言ってくれる。それどころか皆みんな、泣きたくなるくらいに優しくって親身に悩みを訊いてくれた。

曰く、大丈夫。ああ、口々に言われるそれを信じようじゃないか。ここまで言われて、負けるのを怖がるなんてもう、バカらしい。負けても、克てばいいだけじゃないか。そう、少女は理解した。

前を向いて、少女は花開く。

「……頑張るじょ！」

だから、そんな優希がエースばかり選ばれるとされる先鋒を皆から任された時。彼女がどう思ったかは分かりきったことだった。

「あははっ」

その時の、全ての悩みが吹っ切れたかのような笑みは、何より朗らかであって、まるでそれは、雪に負けずに咲いたクロッカスの可憐。

「良かったな、優希」

そんな少女の笑顔に京太郎が惚れ込んでしまうのもまた、仕方のないことであったのかもしれなかった。

「チー！」

「ふむ……」
「……ここで鳴くか？」
高校麻雀大会長野県予選、決勝。他校からの疑問の視線を受けながら、優希は元気に鳴いて三萬を持っていく。同時に手牌から披露されたのは、二萬と四萬。ドラは見えなかった。
「なるほど……」
目算が通ってほころぶ優希に反し、二巡目での強引とも取れる親の鳴きに他家は警戒を深める。捨てられたのが么九牌であるのは、彼女らにとって何ら救いに感じられない。
こと純にはひしひしと感じられる濃厚な、聴牌気配。優希の喜色からは、手の高さも透けて見えるようだった。タコスパワーがどうのこうのと言っていたことを、彼女なりのジンクスだろうと軽く見ていたことを、美穂子は恥じる。
まだ、はじまったばかりで癖をつかめてもいないこの状況。しかし、美穂子はそっと両の目を見開いた。紺碧の右目が、見定めるかのように、優希を望む。
「そうね……」
ドラは萬子の六。理牌が素直だと仮定しての恐らく程度の予測であるが、視線とその辺りでの手の彷徨わなさから、ドラで雀頭かひと面子が揃っているだろうと仮定できる。
そして、先の九萬の出どころを思うと、萬子の揃いが良い様子だ。そして、揃えながら最初に捨てた客風牌の北の出場所を思う。それを総じて考えるに、どうにも字牌の待ちはなさそうではあった。
「ごめんなさい、はい」
とはいえ、そんな不完全な予測にその全身を預けられるほど美穂子も軽くはない。彼女は他校が九萬を捨て終えていたことに気づいてから止まっていた手を動かし、対子になっていた北をためらいなく河に捨てる。
その、次。山から牌を引いた際の優希の瞳の輝きに、美穂子は強く目を惹かれた。
「ツモ、だじぇ！　タンヤオ、ドラ3、4千オールだじょ！」

「ったく、ツイてんな……」
喜色満面な優希を見ながら、純が零してしまうのも仕方がない。ドラを三枚配牌から持っていたのもそうだが、ツキが見える彼女にとって、今の優希はまるで幸運を纏っているかのよう。
あからさまにこれはそういう能力なのだろう。それでいて、門前で待たずに手を伸ばす油断のなさ。これは、生半可な紛らしでは邪魔できない。純がそう確信してしまうに充分なものだった。
「とはいえ、連荘されたくはねぇな」
持っていかれている感は、ある。けれども純に運がないということはなかった。先は鳴かず飛ばずだったが、今度は二向聴でほぼ三色揃った手牌とまずまずだ。
無理にでも鳴いていけば或いは先に。そう思うのも当然。しかし、そんな希望を京太郎に作ってもらったタコスを食んだ優希は一蹴する。
「ダブルリーチ、だじぇ！」
「は？」
改めて語らずとも、純はツキ、というものが見えてしまうのに間違いはない。そして、この日この場において、それはむしろマイナスにしか働かない。
なぜなら。
「バケモンかよ……」
東場において或いはチャンピオンにまで届きかねない程の単純な強運。その片鱗を見通してしまえば、自分の得意の鳴きずらしすら蟷螂の斧としか思えないものだったから。
「ポン」
「むっ」
しかし、同卓でそんな魔物じみた実力を純と同じように感じていたとしても、津山睦月のやることは一つ。次に間違いなく来るだろう被害の軽減、それのみだ。
無理にでも鳴いた二索。そして、一切悩むこと無く彼女は客風牌の処理をする。これで一発は消えた。とはいえ、そんな程度で逃げられ

るほど優希のツキは甘くはない。
「ロン！」
「ふむ……８千か」
六筒・西待ち。意外なところといえばその通り。とはいえ、この程度は仕方がないと割り切れるのが睦月の強み。
ネット麻雀でも大会でも勝利以上に数多の敗軸を重ねてきた彼女に、いくら相手が強いからといって諦める理由などにはならない。そんなことで、睦月が作ってきたしっかりとした芯は微塵も揺れ動くことはないのだ。
淡々と打ち、腐らない。もう、彼に縋ったあの日の甘えは捨てたのだ。たとえ彼女として見てもらえなくても、年長者として快く思ってもらうことを諦めることはないのだから。
だからこそ、もしそんな彼女を折ることが出来るものがいるとするならば。
「あ」
「どうかしたの？」
「いやー……ごめんだじぇ、おねーさん達」
取ってきた牌を整理してから、少し困ったように優希は笑う。何事か問う美穂子を他所に、睦月は猛烈に嫌な予感を覚えた。
あっけらかんとした様子で、優希は口を開く。
「もう、和了ってたじょ」
そして彼女が披露した十四の牌は、それはそれは綺麗に揃っていたのだった。

誰より早く和了る。それこそ麻雀をする人間の目指すところ。東場において圧倒的に優れた優希に衝突するような能力を持つ相手もない現況、彼女に圧倒的なアドバンテージがあるといえた。
「これか？」
「ポン」
「……で、次はこっちと」
「ロン。１６００」

「はいよっと」
「むぅ……狡いじぇ」
とはいえ、この状態でも優希の力の最高の山場ではないのであれば、その速度が不完全で付け入る隙が出来てしまうのも否めない。
優希を他所にして行われた牌の移動、その結果による点数の支払い。コンビプレー地味たやりとりに、僅かに優位者の表情が曇る。
そして、そのメンタルに起きた隙。必然的に起きる速度の遅れ。それを逃すものなどこの場には存在しなかった。
「……ツモ。６千オール」
「ロン。３９００ね」
「ほいっ、ロン。７７００」
「くっ、ツモ。満貫だじぇ」
それに何より、優希には明確に南場になって勢いが落ちる、という弱点がある。
それでも、彼女が和了るためにあがくことを止めなかったのは良かったのか、悪かったのか。
確かに一度和了れはしたが、連荘されることも多く、五分間の休憩時に優希が溢したのは気弱な言葉だった。
「随分と、差を詰められちゃったじぇ……」
巧者たちに執拗に狙われ、それでも三万点程度の差は開いている。しかし、これを果たして自分は後半も維持できるのだろうか。
一人その場に残った優希は緊張に締め付けられる胸元を覚えるのだった。
確かに、優希はもう負けを恐れはしない。なら、どうして今身体を固くしているのか。それは、必要以上に気負ってしまっているからだった。
自分が浮き沈みさせている点数。それが自分だけのものだと勘違いしていられたら、もっとのびのび出来たのだろう。
しかし、弱点の点差の計算をそらで出来るようになった上で先鋒を任されたことにより、自覚を持った今の優希はしゃちほこばっているようなところがあった。

「はぁ」
　気づけば、表情も固くなる。格好いいところを見せたい。でも、本当に負け続けだった自分に勝ち抜けることなんて本当に出来るのだろうか。
　どうしようもない不安。思わず優希は空に手を彷徨わせて。
「ほら、タコス」
「じょ？」
　気づけばその手に大好きなモノを、一番大好きな相手によって握らされていた。温さを感じて一気に、少女は発奮する。
「京太郎、タコス持ってきてくれたのかー！」
「ああ。そろそろ優希にタコスが足りてないんじゃないかって、思ってな」
「よく分かったじぇ……あむ」
　もぐもぐ、ごくり。笑顔でソースの旨さと肉の味わいを感じていたところ、その全てを京太郎に見られていたことに優希は遅れて気づく。
「ん？　どうしたんだきょうた……じょ！」
　向き直り、すると彼がおもむろに頬に手を伸ばしてきて、彼女は慌てる。こんな、カメラが普通にあるところでまさか。そう勘違いした優希は再び身を固くするが、そんな様子をすら笑って、京太郎はその頬を手で拭ってから言った。
「相変わらず、優希は頬にソースつけてるな。最初に会ったときのこと思い出すよ」
「うう、恥ずかしいじぇ……どうもがっついちゃうんだじょ」
「優希」
「じょ？」
　そして、照れる優希の頭に、京太郎は大きな手を置く。遅れて自分を撫でているのだと気づいた彼女は彼の瞳に慈しみを見つける。
　克明に全てを照らすための数多のライトの光を背に、京太郎は、続けた。
「お前は、それで、いいんだ」

「それで、いい？」
「そうだ。皆を信じて、優希は自分のやりたいようにやっていいんだって。それで、出来たら何時もみたいに笑っていてくれ」
真摯にその鳶色の視線を真っ直ぐに向け。そして、皆もきっとそうだろうが、と前置きしてから彼は言う。
「何より俺はそんな、片岡優希のことが、一番好きなんだからな」
どうしようもなく愛おしくて、だから場も弁えずに、間違えてしまったかのように告白は起きる。
勿論、そんなものをあっさり受け止められるような用意をしている乙女など居やしない。けれども、それでも優希はにっこりと微笑んで。
「そっか。なら――――楽しんでくるじぇ！」
再び、前を向くのだった。

「京太郎、疲れたじぇー」
「おいおい、こんな暑い中ひっつくなっての……周りの視線、凄いぞ？」
「私は気にしないじょ！」
「俺は気にするんだがな……そんなに、居残り辛かったのか？」
「テスト小テストで大変だったじょー……ん？」
「疲れてるだろうと思ってな。ほら、タコス買っといたぞ」
「おおっ、流石はダーリンだじぇ！」
「ダーリンは止めろって……」
暮れの山間に、元気な声が響く。タコスを包みごとかぶりつくように頂いてくるり。彼が愛した笑顔は、今日も何より彼の近くで花開く。
通りがかりの陸上部の面々は、そろそろ周知されてきた京太郎と優希のラブラブぶりを眺め、凸凹だけど似合いだなという感想とともにすれ違っていった。
そう、二人は先の麻雀県予選の時より付き合うことになっていた。

そして、そのままぴったり離れず一年と少し。部員でごった返すようになってきた部室の外ではこんな風に仲良く過ごしているのだった。
　ぺろりと大好物を平らげて後、しばしの歩み。とことこ左右に膨らんで足早に進んでから、優希は京太郎に振り返り言った。
「それにしても、麻雀部の部長を京太郎が引き継ぐようになるとは思わなかったじぇ……京太郎は大変じゃないか？」
「まあ、大変といえばそうだけれど、まあ何とかやってるさ。実績的には優希がなっても良かったはずなんだがな……」
「そこは京太郎が２連覇中の男子チャンピオンだから、推されても仕方ないと思うじょ？」
「魔窟の女子個人チャンピオン様の方が、冠に価値があると思うんだがな……まあ、適材適所ってところか」
「そうだじょ！　あ、京太郎！　のどちゃんが副部長をやってくれてるからって、鼻の下をのばすんじゃないじょ？」
「……ノーコメントで」
「何っ、京太郎、私の身体に飽きたのかー!?」
「人聞きの悪い事言うなっての！　単にその、やっぱり見惚れることくらいあるってことで……」
「むむっ！　相手がのどちゃんとはいえ、余所見は厳禁だじょ！
……本当に京太郎、私のこと好きなんだよな？」
「そりゃあもう、優希、お前のことが一番好きだよ。……だから、そんな顔すんなって」
　元気から一転しおらしくなった優希に、京太郎は慌てだす。
　意外に小心なところのある恋人を慮って近寄る彼。しかし当の優希は背を向けながら含み笑いを一つ。そして。
「ふふ、私も京太郎のことが、一番大好きだじょっ！」
　振り返り、ひまわりの笑顔を見せた。雪割って、小さく咲いた筈の花はどこまでも大輪に育ち、何時までも彼はそれに魅せつけられる。
　もう二人に言葉は要らず。二人の抱擁は熱く、そして強いものとなった。

タコスの具材はミートに野菜。決して揃わぬそれら(二人)を、ソース(時間)が馴染ませトルティーヤ(愛)が包んで一緒くたにして。

彼女の笑顔の材料は、そんな素敵なもので出来ていた。